

長野県松本市

松本城下町跡

HIGASHIMATI

東町

—第3次発掘調査報告書—



2006.3

松本市教育委員会

長野県松本市

松本城下町跡

*HIGASHIMATI*

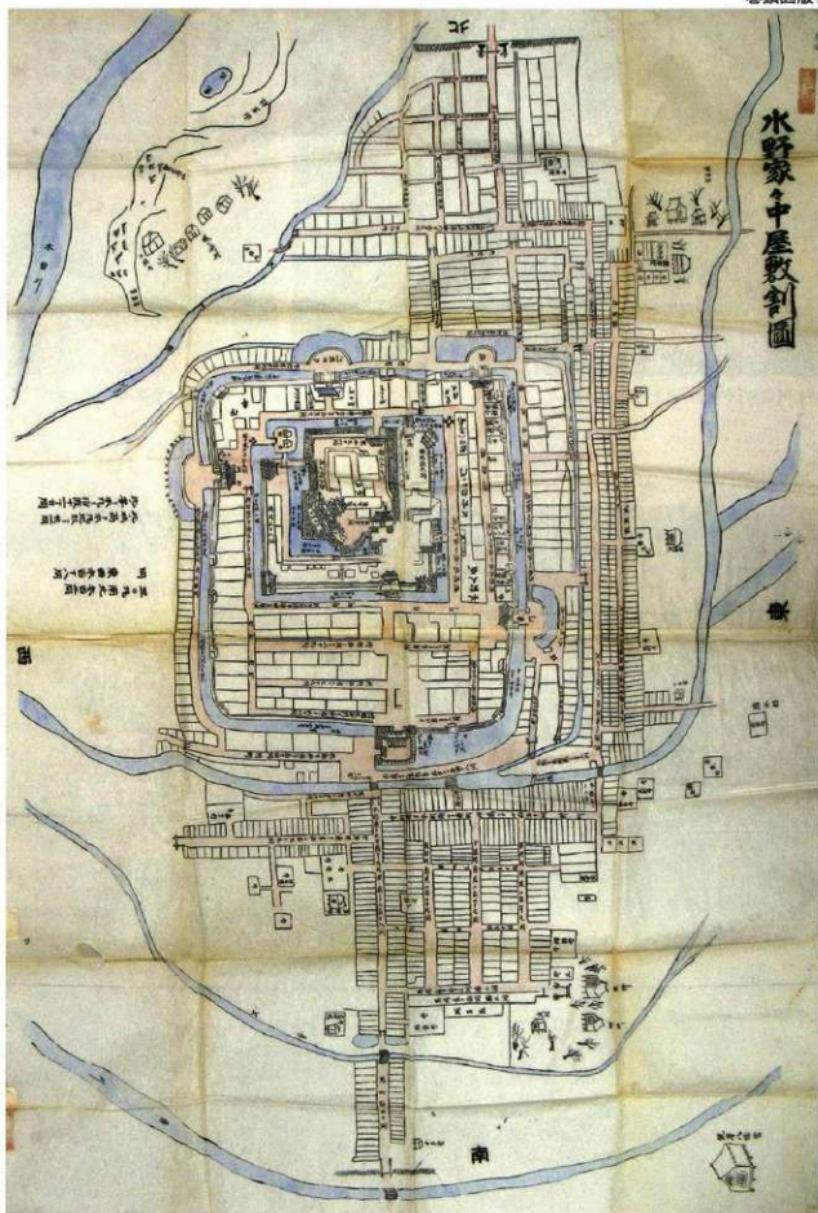
東 町

—第3次発掘調査報告書—

2006.3

松本市教育委員会

水野家中屋敷割圖



元禄期の松本城と城下町

巻頭図版2



仙台坂遺跡(東京都)出土の石組み竈



復元された石組み竈(酒の博物館)



出土した石組み遺構(Ⅲ検土2)

## 序

松本城下町の親町三町の一つである東町は松本城の東にあたり、善光寺街道沿いの宿場町・商人町として発展してきた町です。このたび当地に東部地区コミュニティ防災広場整備事業が計画されたため、埋蔵文化財を記録保存する目的で松本市が緊急発掘調査を実施することとなりました。松本市は松本城下町跡の発掘調査を数多く行っておりますが、東町については今回が3箇所目の調査となります。

発掘調査は平成16年5月から11月にかけて行われました。長期間に渡る調査となりましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、近世町人の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思います。

緊急発掘調査は近年開発事業が増加する中で、遺跡を記録保存する目的で行う調査です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えています。そのため松本市としましては市街地の開発にあたって現市街のもととなった城下町の発掘調査には力を入れております。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

## 例 言

- 1 本書は、平成16年5月17日～11月16日に実施された、松本市城東2丁目3番に所在する、松本城下町跡東町第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東部地区コミュニティ防災広場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、1章：櫻井 了 4章2節：竹内貴長 その他を小山貴広が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子 石製品実測、トレース：望月映  
土器・陶磁器接合：中澤温子 金属製品実測、トレース：澁沢文江  
土器・陶磁器実測、トレース：上條信彦、白鳥文彦、遺構図調整、トレース：村山牧枝  
竹内直美、竹平悦子、八板千佳 遺物写真：宮嶋洋一  
木製品実測、トレース：久根下三枝子、斐島菜奈 総括・編集：小山貴広

- 5 本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。

土坑→土1、ピット→P1、溝状造構→溝状1、間知石列→間知1

- 6 本書では土層を略記号で表した。各土層との対応は下記の通りである。

7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 Tel 0263-86-4710 Fax 0263-86-9189）に収蔵されている。

土層記号一覧 表記法 土色(混入物・含有量) 含有量 多量：a 中量：b 少量：c 微量：d  
土色

赤褐色土：1 茶褐色土：2 黄褐色土：3 褐色土：4 暗褐色土：5 灰褐色土：6 暗灰褐色土：7 灰色土：  
8 暗灰色土：9 黑褐色土：10 黑色土：11 黄白色粘土：12 黄色粘土：13 黄灰褐色粘土質土：14 黄  
褐色粘土質土：15 暗褐色粘土質土：16 暗灰褐色粘土質土：17 黑褐色粘土質土：18 褐色砂質土：19 褐色砂礫土：  
20 暗褐色砂質土：21 暗灰褐色砂質土：22 暗灰色砂質土：23 黄灰褐色砂質土：24 青灰色砂質土：  
25 赤褐色砂：26 黄色砂：27 褐色砂：28 灰色砂：29 暗灰色粘土質土：30 黄灰褐色土：31 灰褐色  
粘土：32 灰色粘土質土：33 灰褐色砂質土：34 灰褐色粘土質土：35 灰色粘土：36 炭化物層：37 燃土：  
38 灰：39 腐食土：40 黄褐色粘土：41 暗灰褐色粘土：42 暗灰色粘土：43 灰色砂質土：44 暗褐  
色砂：46 黑褐色粘土：47 黄灰色粘土：48 灰褐色砂：49

混入物

黄色：A 黄白色：B 黄灰褐色：C 黄褐色：D 赤褐色：E 褐色：F 暗褐色：G 灰色：H 黑色：I  
暗黄褐色：J 茶褐色：K 白色：L 黄灰色：M 暗灰色：N 暗灰褐色：O 灰褐色：P 磨：Q 小砾：  
R 炭：S 燃土：T 灰：U 白色石粒：V 鉄分：W 木片：X 青灰色：Y 青灰褐色：Z 黑褐色：  
AA

土質

土塊：I 土粒：II 粘土塊：III 粘土粒：IV 粘質土塊：V 粘質土粒：VI 砂：VII 砂塊：VIII 砂粒：  
IX 砂質土塊：X 砂質土粒：XI 粘土：XII

# 目 次

序

例言

目次

## 1章 調査の経緯

1 節 調査に至る経緯	1
2 節 調査体制	1

## 2章 調査地の環境

1 節 地理的環境	7
2 節 歴史的環境	8

## 3章 調査結果

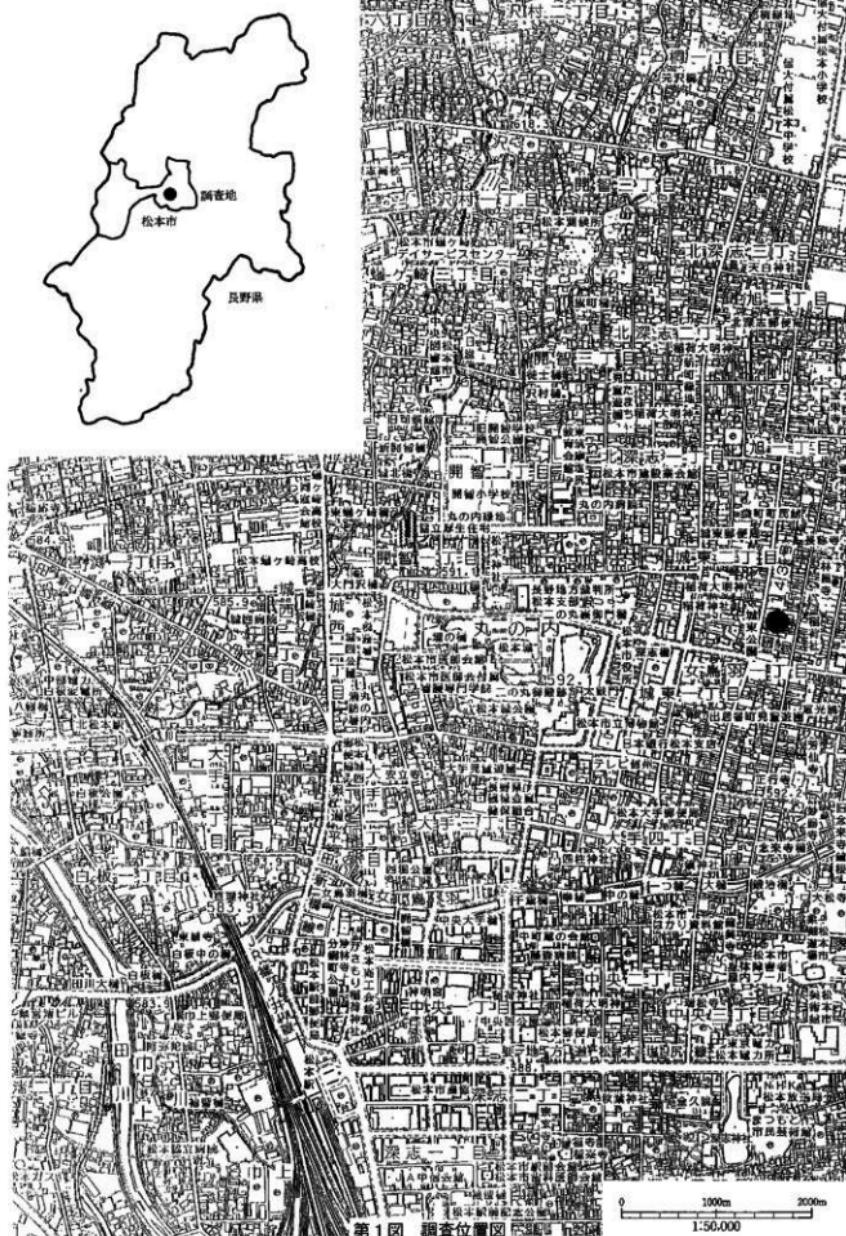
1 節 過去の調査	10
2 節 調査概要	10
3 節 調査成果	11
4 節 出土遺構	
第1検出面	11
第2検出面	11
第3検出面	13
第4検出面	16
第5検出面	16

## 4章 出土遺物

1 節 土器・陶磁器・瓦・土製品	33
2 節 木製品	67
3 節 石製品・骨角製品	73
4 節 金属製品	77
5 節 自然遺物・骨類	86

調査のまとめ	87
--------	----

写真図版



第1図 調査位置図

# 1 はじめに

## 1 調査に至る経緯

今回、長野県松本市城東2丁目において、松本市による東部地区コミュニティ防災広場事業が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である松本城下町跡(東町)に該当しており、防火水槽の設置や親水広場等により、予定地内の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。松本市教育委員会と事業担当課で遺跡の保護について協議し、事前に発掘調査を実施して記録による遺跡の保存を図ることとした。

文化財保護法第57条の3(現93条)に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書は、平成16年5月14日付長野県教育委員会宛てに提出された。通知に対しては、長野県教育委員会より発掘調査の指示が平成16年5月28日付で通知されている。

現地での発掘調査は平成16年5月17日～平成16年11月16日にかけて行った。なお、試掘調査の実施については調査地の現況等から省略した。調査終了後、平成16年11月17日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成16年12月3日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行った。

## 2 調査体制

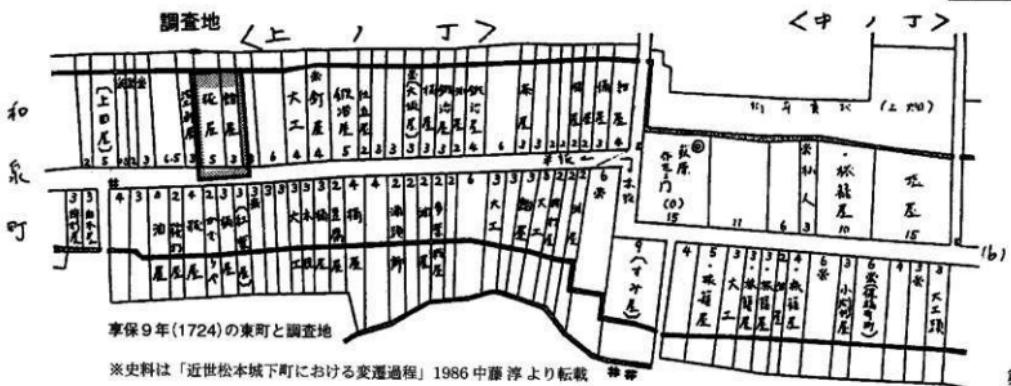
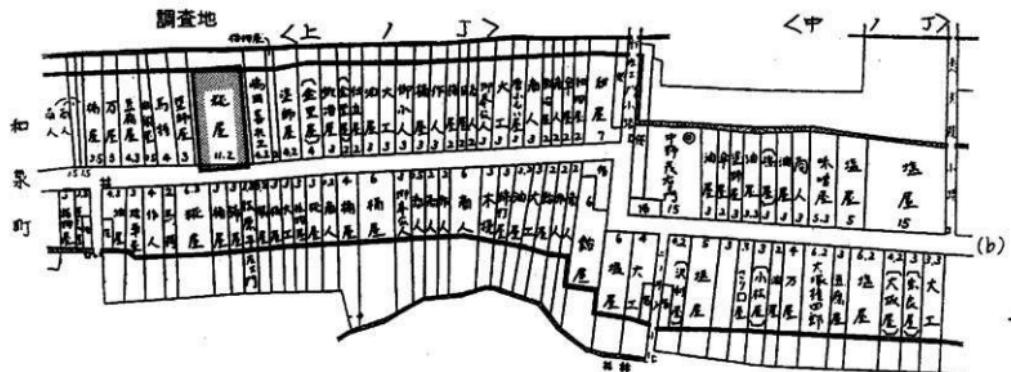
調査団長：竹瀬公章(松本市教育長)

調査担当者：菊池保夫(主任～H17年3月31日)、小山貴広(同嘱託)

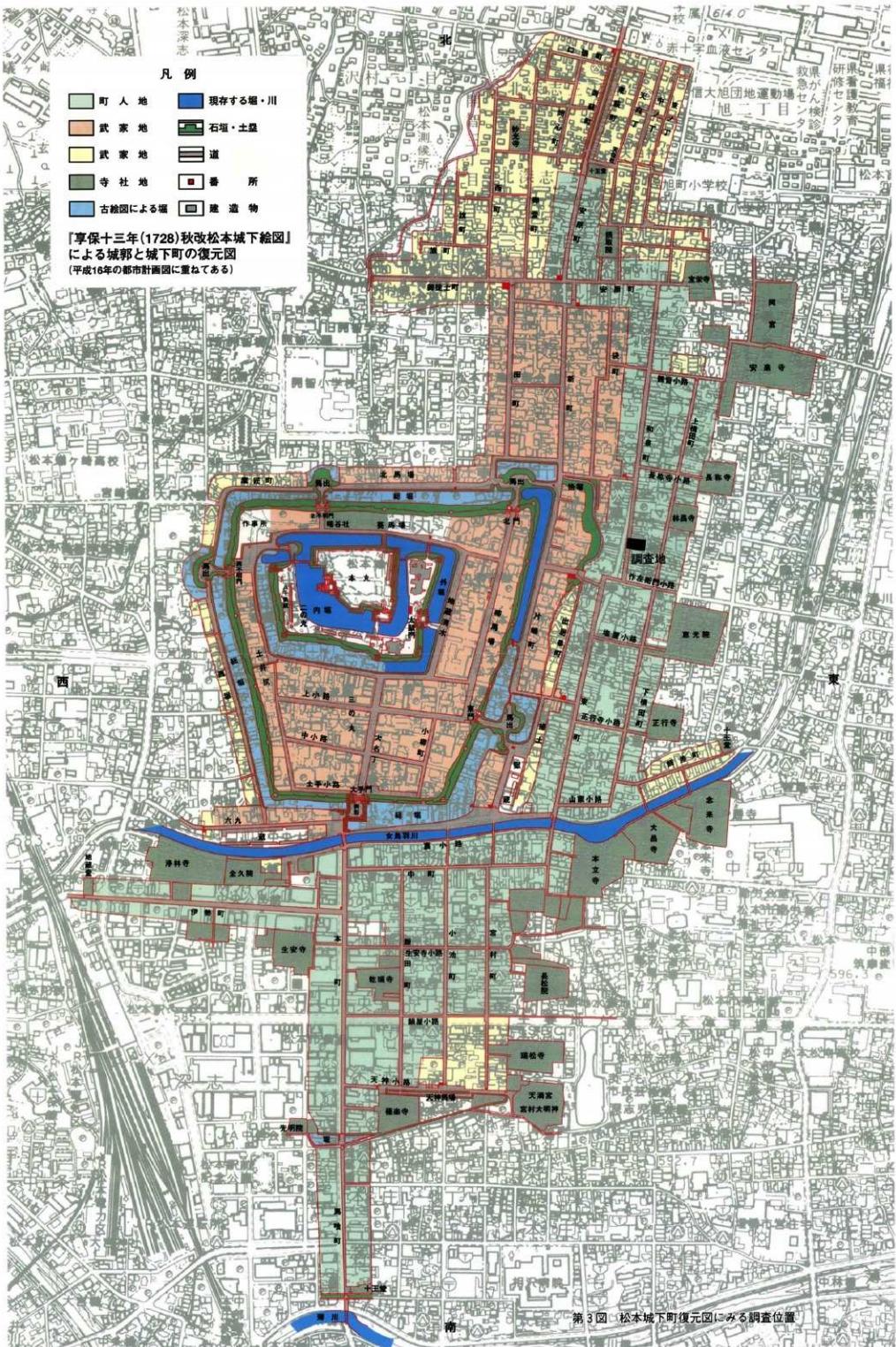
調査員：今村克、森義直、竹原久子

協力者：浅輪敬二、石川光男、入山正男、海老原千津子、小林芳郎、清水陽子、中村恵子、本木修二、渡辺順子

事務局：松本市教育委員会教育部文化財保護課(～H17年3月31日)、文化財課(H17年4月1日～)、  
池田英俊(課長～H17年3月31日)、宮島吉秀(課長 H17年4月1日～)、熊谷康治(課長補佐)、  
川上百合子(埋蔵文化財担当係長～H17年3月31日)、直井雅尚(主査)、小山高志(主事)、  
櫻井了(主事)、渡邊陽子(嘱託)、花村かほり(嘱託 H17年4月1日～)



第2図 絵図にみる調査地周辺

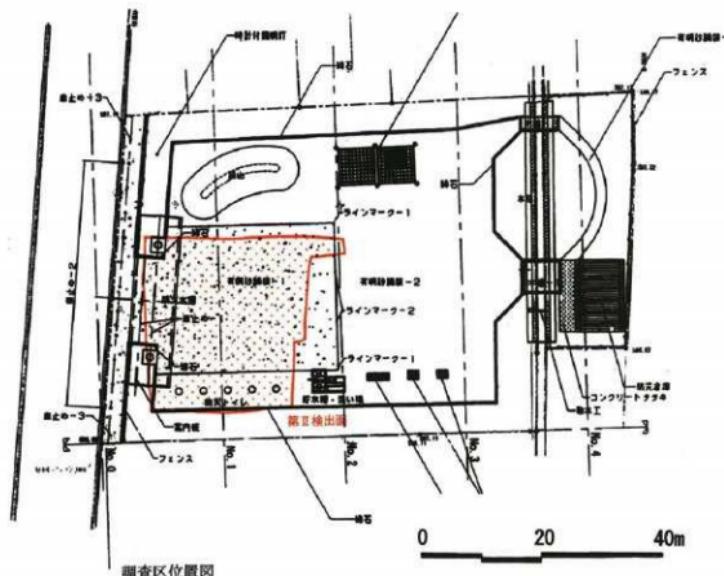


第3図 松本城下町復元図にみる調査位置

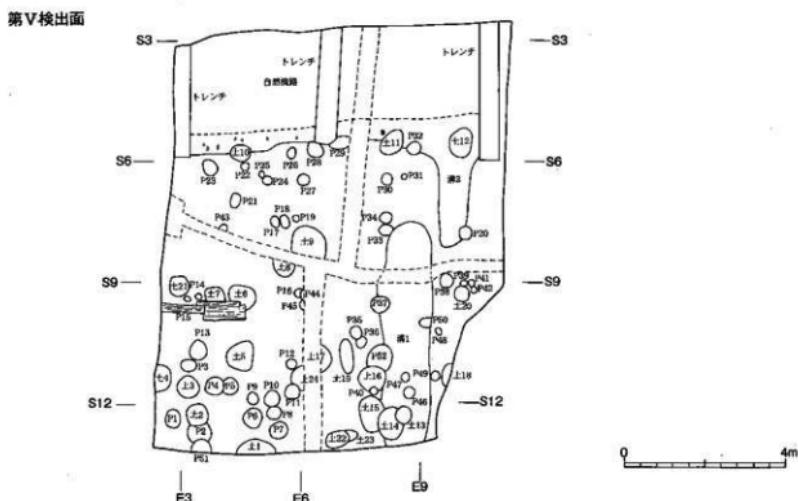
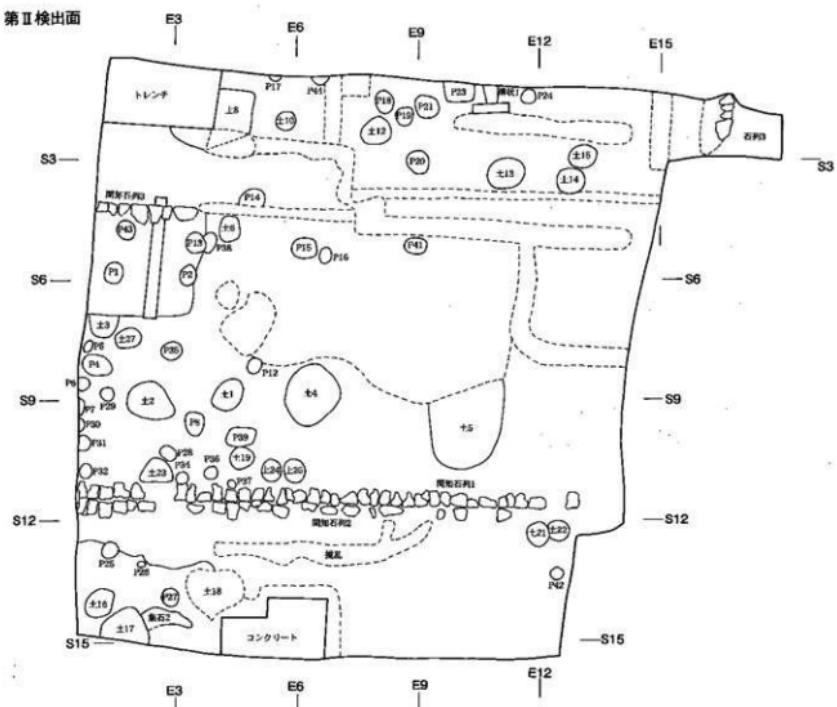


防災広場事業計画地

s=1/2,500

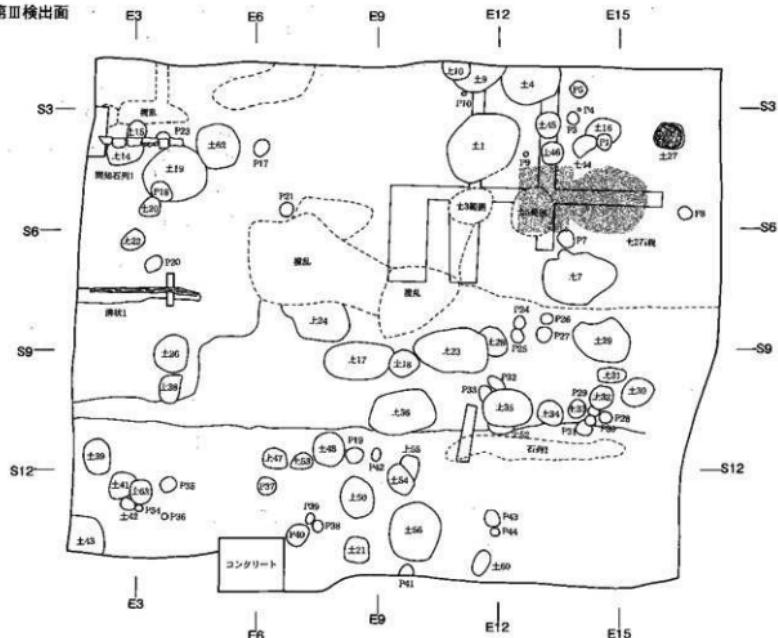


第4図 事業計画地と調査位置

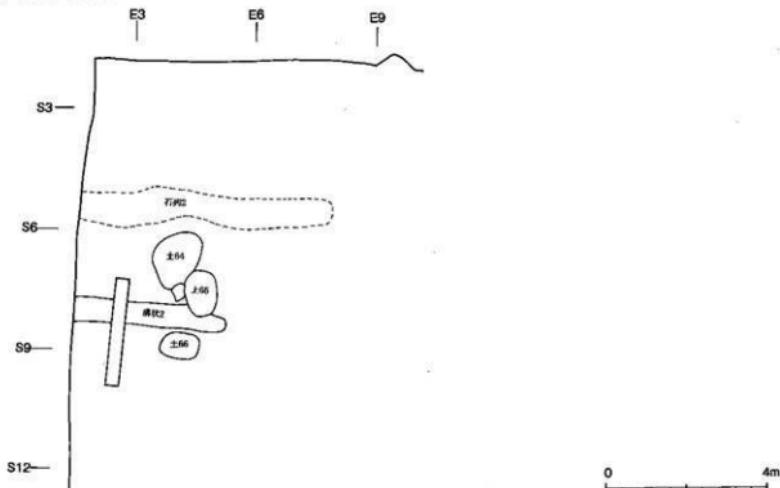


第5図 第II・V検出面遺構配置図

第III検出面



第III検出面北西部下層



第6図 第III検出面造構配置図

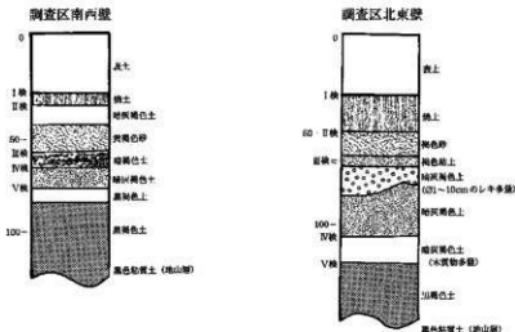
## 2. 調査地の環境

### 1 地理的環境

今回の調査地点は松本城天守閣の東約600m、北約100mに位置しており、調査地東約350mには女鳥羽川が流れている。松本市街地周辺では、洪積世後期後半ごろから局部的・構造的な松本盆地の誕生が始まる。このころ西側の城山が傾動しながら隆起をはじめ、それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は次第に南西から東へ押しされ、洪積世末ごろ第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層を載せて山地化し、隆起の進行と共に右岸に三段の段丘面を形成しながら市街地東部を流れるにいたった。この結果、女鳥羽川は、筑摩山地の三才山峠(1500m)から流れ出し、幾つもの沢と合しながら西に向かって流れ、稻倉から120°向きを変えて市街地に向かって南流し、流路の首振りを繰り返して扇状地を形成した。調査地はこの女鳥羽川水系の扇状地に属することとなる。周囲の地盤は比較的軟弱なものであり、ある程度の地盤沈下が起きている。これまでの発掘調査では伊勢町付近で年約1.6～1.7mmの速さで沈下していることが判明しているが、調査地点ではそれより遅い年約2.0～2.7mmの速さで地盤沈下している。

調査区の基本的な土層構成は、第6図の基本土層図のとおりである。第1層は、近代～現代の造成土である。第I検出面は①第2層の焼土層上面である。恐らく大規模な火災があった後、整地されたものであろう。第II検出面は暗褐色土、及び褐色砂の上面である。暗褐色土層中には焼土粒・炭化物が多量に含まれていた。また、褐色砂中には女鳥羽川水系の礫が多量に含まれていること等から、この層は洪水等の流れ込みがあつた後、人為的に整地されたと考えられる。第III検出面は暗灰褐色土層の上面である。③第4層等は褐色で鉄分を多く含む非常に粘性の強い粘質土層であり、主に調査区北東部に集中していた。暗灰褐色土層中には第II検出面と同じく褐色砂や礫の層が混入していた。ここでも洪水があった後整地していることが伺える。また、鉄分を含む粘質土も混入しており、土層中に $\text{Fe(OH)}_2$ (水酸化第一鉄)を多量に含んでいた。第IV検出面としたのは暗灰褐色～黒褐色土上面であるがこの層は炭化物や焼土、木片等を大量に含み、遺構も確認できなかった。第V検出面は②第6層などにみられる黒色～黒褐色土である。一部灰色土塊が混入しており、アシ・ヨシ等の植物遺存体が多量に含まれていた。

黒色土以下は地山となる。黒色土の下には灰色土、黒色粘質土、灰色砂と続いている。灰色砂は女鳥羽川の源流が近くを流れていた頃に堆積したと考えられる。その後女鳥羽川の源流が離れると黒色の粘質土が堆積していくと考えられるが、これは松本城下町を形成するにあたって、人為的に女鳥羽川の流れを変えたことが要因であると思われる。



東町 III次調査基本地層図

## 2 歴史的環境

国宝の一つに数えられ、現在までその姿を留める松本城。その周囲に広がる松本城下町は小笠原長時が三男、小笠原貞慶より以後徐々に整備され、進展していったとされている。天正10年(1582年)3月、松本城の前身となる深志城の城主であった武田氏が滅亡し、6月に織田信長が本能寺に倒れるとそれを好機と小笠原貞慶は深志城を攻め、旧地を回復した。天正10年(1582年)貞慶は深志城を松本城と改め、天正13年(1585年)より大普請を始めた。貞慶はこの際市辻・泥町(後の地蔵清水から大柳町付近)にあった町屋を本町に移転し、親町・枝町の地割をした。やがて貞慶にかわって石川数正・康長親子の代になると、城下町の整備は大幅に進むこととなった。数正是天正19年(1591年)に松本城へ入封すると城普請に取り掛かった。しかし、志半ばにして数正が亡くなると康長が父数正の遺志を継ぎ、城普請を行った。康長は本丸に大天守・乾小天守を築造すると同時に城下町の整備を続け、枝町を繋げて形を整え、三の丸や片端町などに武家屋敷を集中させた。小笠原貞慶の頃は家もまばらで村のようであった城下町もこの21年に及ぶ大普請によって町並みは整えられ、その後の城下町形成の基礎となつた。康長による普請の後は慶長18年(1613年)に入封した小笠原秀政、元和3年(1617年)に入封した戸田康長、松平直政、堀田正盛、水野氏等によって少しづつ整えられていき、17世紀半ば頃には一応の完成に至つたと言われている。

松本城下町は善光寺街道に沿っている本町・中町・東町を親町とし、親町から枝分かれする枝町10町の計13町を中心としている。東町は「松本市中記」によれば長さ10丁59間、町幅3間7寸、家数163軒であったとされており、和泉町・安原町・上横田町・下横田町・山家小路の5町の枝町が伸びる町である。女鳥羽川にかかる東町大橋から北に伸びる東町は、小笠原貞慶が松本城下町の町割りを行つた当初から置かれており、北に向かって下ノ丁、中ノ丁、上ノ丁と分けられている。

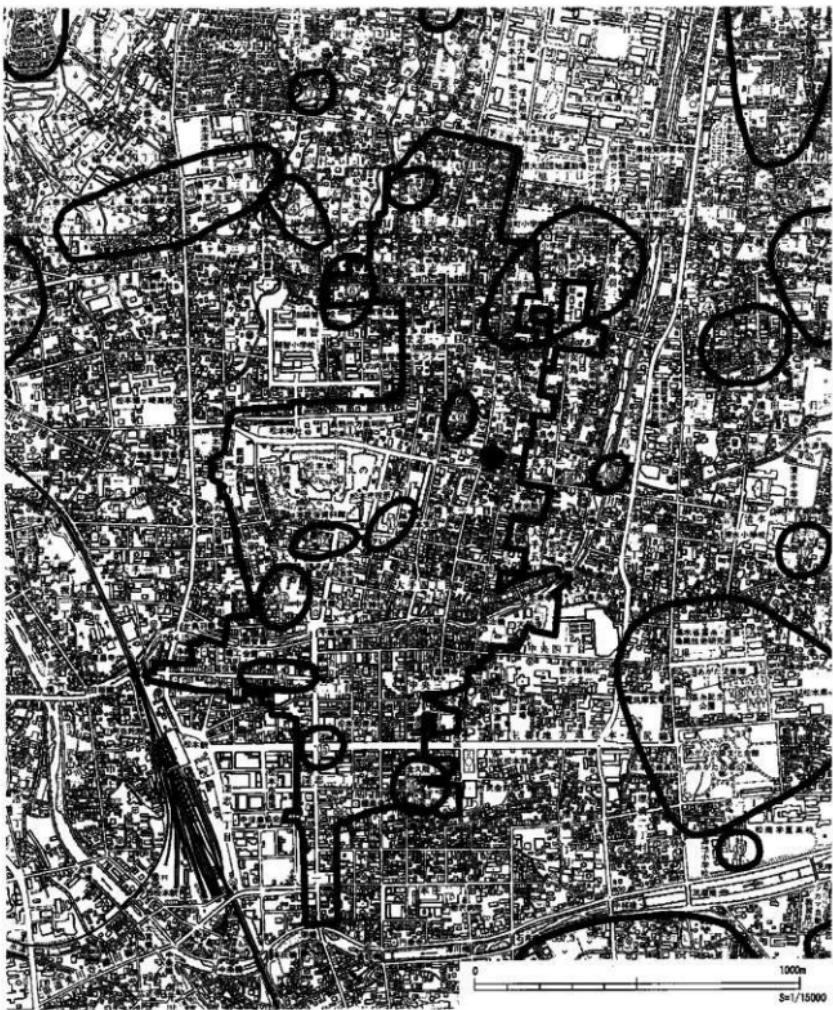
### 旅籠の町東町

松本城下町の親町三町は総じて善光寺街道に面しており、主に宿場町の機能を有していたとされている。東町には『松本大略往来』に「東町ハ諸國之旅人木戸宿、旅籠屋、商人、定飛脚之泊屋ニて、家毎ニ軒端ニ家名ヲ記シ門ニ立」とあるように、領内の遠方にある村々から出張する際に使う郷宿や旅行者が宿泊する旅籠などが置かれていたようである。元禄10年(1697年)頃にはこの様な旅籠は下ノ丁を中心に13軒あったとされている。一方中ノ丁・上ノ丁には主に商人や職人が住んでおり、桶屋7軒、油屋5軒、大工4人、酒屋4軒、酒頭御3人、豆腐屋3軒、綿打屋3軒、紺屋3軒に加えて鉛屋、差物屋、塗師屋、塗師、鍛冶屋、鐵砲台屋、穢屋、鞍打屋などの職種の人々が暮らしていた。

今回の調査地は東町の北端近くにあたる。この場所は元禄10(1697)年頃の史料によれば穢屋が営まれていたとされる場所である。間口5間の穢屋であり、徳左衛門という名前が見える。北隣には塗師屋・半右衛門、南隣には鉛屋・喜右衛門が住んでいたとされている。また、この頃には東町町内にはもう1軒の穢屋があつたとされている。

### 災害と城下町

松本城下町では数多くの災害に見舞われている。中でも特に火災の被害は甚大であり、東町に関するものだけでも延宝5年(1677年)12月、貞享4年(1687年)1月、寛延3年(1750年)、安永5年(1776年)12月、享和3年(1803年)1月、享和4年(1804年)8月、文化元年8月、明治19年(1886年)、明治21年(1888年)と度重なる火災に見舞われていたことが分かる。特に安永5年の大火の被害は大きく、本町・中町・伊勢町・小池町・飯田町・東町・安原町・大名町・柳町・地蔵清水まで焼失したとされている。また、松本城下町は北から女鳥羽川、東から薄川、南から田川が集まつくるという地形から、水害においても多大な被害を受けている。中でも享保13年(1728年)の洪水は大規模であり、女鳥羽川は御堀と合水し、一面海のようになったと伝えられている。



● 今回調査地

- |          |          |           |
|----------|----------|-----------|
| ① 松本城址   | ⑥ 四の宮遺跡  | ⑩ 本町南遺跡   |
| ② 松本城下町跡 | ⑦ 片崎遺跡   | ⑪ 天神西遺跡   |
| ③ 鳥ヶ崎遺跡  | ⑧ 女鳥羽川遺跡 | ⑫ 四ッ谷遺跡   |
| ④ 砕村遺跡   | ⑨ 丸の内遺跡  | ⑬ 川町遺跡    |
| ⑤ 堂町遺跡   | ⑩ 大名町遺跡  | ⑭ 墓横遺跡    |
| ⑥ 田町遺跡   | ⑪ 土居尻遺跡  | ⑮ 横田古里敷遺跡 |
| ⑦ 泽村北遺跡  | ⑫ 伊勢町遺跡  |           |

第7図 周辺遺跡図

### 3. 調査結果

#### 1 過去の調査

東町では過去に2度の発掘調査が行われており、今回は3度目の調査となる。

第1次調査はH14年度に行われ、 $27.74\text{m}^2$ の面積を調査している。調査地は東町南端近くに位置し、屋敷地奥の年貢地にあたるとされている場所である。16c末～幕末にかけての計3面を調査し、ゴミ穴とされる竪穴状遺構などが検出された。

第2次調査はH15年度に行われた。幅1mのトレンチ調査であり、近世以降の陶磁器が数点出土したのみである。遺構もほとんどみられず、土坑が1基出土したのみであった。

#### 2 調査概要

今回の調査は当該地に東部地区コミュニティ防災広場整備事業が計画されたため、行ったものである。調査区は防火水槽及び構造物の基礎などにより掘削が行われる調査区南西部を中心に設定した。調査を始めるにあたって、まず調査区北西に確認トレンチを設定し、土層観察を行った。この結果、5面の整地層が確認できたため、各面において検出面を設定し、調査を行った。各検出面の調査面積は第I・II検出面 $193\text{m}^2$ 、第III検出面 $182\text{m}^2$ 、第IV・V検出面 $91\text{m}^2$ である。遺構番号は検出面毎に1から付した。各面の遺構の測量は、調査区北西の任意の点に設置した基準点を中心に3mグリッドを設定し、それを基準として行った。基準点には後に国家座標(X=26781.250 : Y= - 47166.300 : Z=597.079)を移設した。測量図面は1/20の縮尺で作成した。

第I検出面では大型建設機械により検出面までの表土除去を行った後、人力により遺構検出作業を行った。検出の結果、出土遺物等から明治期以降の火災処理層であることが判明した。調査期間の制限等の理由から第I検出面では遺物回収及び写真での記録のみ行う事とし、第II検出面へと移行した。第II検出面は大型建設機械を使わず人力により掘削及び検出作業を行った。第I検出面の整地層を除去していったところ、調査区南部は間知石列を境として若干低くなっていた。そのため第II検出面は北部と南部で高低差が生じることとなった。この段差は後に第I検出面が整地された際南側が深く削られたためと思われる。

第II検出面調査終了後、大型建設機械で整地層を除去し、人力で第III検出面の検出作業を行った。検出の結果、調査区西部は薄く暗灰色土と褐色砂が堆積しており、周囲に比べ若干高くなっていることが判明した。そのためこの箇所においては上層面の調査を行った後、大型建設機械で掘削して周囲とレベルを揃え再度検出を行った。調査区北東部には鉄分を多量に含む粘土が広がっており、調査区南部には第II検出面と同じく若干の段差がみられた。第III検出面調査終了の後ラジコンヘリコプターにより航空写真を撮影した。この第III検出面から出土した耗電は城下町研究の上で貴重な構造物であり、周辺住民から保存して欲しいとの要望も多数寄せられたこともあって調査終了時の状態で埋設保存することとした。耗電の保存は第V検出面調査終了時に実行された。保存に際しては構築材の崩落を防ぐため、内部に土嚢を詰めて固定した上で埋め戻しを行った。

第IV検出面以降はより深くまで掘削される防火水槽建設範囲(調査区西半)を中心に調査を行った。第IV検出面は大型建設機械で検出面まで掘削した後、人力にて検出を試みた。検出作業時多量の遺物と木質物が出土したが遺構はみられなかったため、遺物を回収するのみに留めた。第V検出面も同じく大型建設機械による掘削後、人力で検出作業を行った。検出面は地盤が軟弱なうえ湧水もあったため調査区内に排水溝を掘り、排水を行いながら調査を進めることとした。第V検出面調査後航空写真の撮影を行い、防火水槽建設範囲について地山面を掘り下げて遺構の有無を確認した。その結果地山面下層には遺構等は見られなかっただため、

調査区の埋め戻しを行った。その後調査区東に東部トレンチを設定し土層確認、屋敷の範囲確認などを行ったが残存状態が悪く、ほぼ搅乱のみであったため東部トレンチを埋め戻し調査を終了した。

### 3 調査成果

調査期間：H15年5月17日～11月16日

調査面積：総面積750m<sup>2</sup> (I・II検：193m<sup>2</sup> III検：182m<sup>2</sup> IV・V検：91m<sup>2</sup>)

検出遺構：土坑・118基	出土遺物：土器・陶磁器（生活雑器・茶器・玩具など）
ビット・141基	土製品（土鈴・面撲）
溝・2本	木製品（下駄・箸・櫛・漆碗など）
溝状遺構・3本	石製品（砥石・硯・搗臼・斧・碁石など）
集石・3基	骨角製品（双六駒）
石列・5本	金属製品（釘・鉄・煙管など）
間知石列・4本	自然遺物（動物骨・貝殻）

### 4 出土遺構

今回の調査では計5面の検出面で数多くの遺構が検出された。しかしながら、第I検出面は明治期以降の火災処理層であり、第IV検出面は検出を試みたものの遺構が存在せず生活面ではないことが判明したため、検出面において出土遺物の回収に留め、第II・III・V検出面でのみ遺構掘り下げを行った。調査地内には明治期以降の搅乱が多く入り、検出作業も困難を極めた。また、遺構検出時に上下の整地層の一部や上層の遺構を重複して捉えてしまったものもあった。そのため当初遺構として捉えたものの、掘り下げ時に搅乱であると判別されたものや遺構であることが疑わしきものに関しては欠番とすることとした。

遺構については検出作業時に命名したので、検出段階で長軸40cm以上のものを土坑、それ以下のものをビットとした。ただし、遺構掘り下げ中に範囲が広がったものも多々あるので、完掘状況が必ずしもこれにあたっていないことを了承して頂きたい。第II検出面北西部にある土間状の遺構に関しては便宜上土間状遺構と呼ぶこととする。第V検出面北に広がる礫層は人為的に掘られた形跡がみられなかつたので自然流路として調査を行った。

また、第V検出面調査終了後調査区東側で屋敷の範囲や土層等を確認するために東部トレンチを設定した。しかしながら搅乱がひとく一部で第III検出面の整地層が確認できたのみであったため、出土した遺物を掲載するに留めさせて頂いた。

以下各検出面について詳細を述べていく。

#### 第I検出面

一部遺構を確認したため検出作業を行ったが遺物等から明治期以降の火災による火災処理層であることが判明した。このため調査は遺物の回収のみに留めることとなった。文献資料によれば東町では明治19年(1886年)、明治21年(1888年)などに大火の記録が見られるので、恐らくどちらかに該当すると思われる。

#### 第II検出面

上層からの搅乱がひとく、調査区中央付近と南部は遺構がほとんど残存していなかったが、その周辺からは遺構を検出することができた。

調査区南部・北部に計3本の間知石列が見つかったが、文献などの記録からこの間知石列は屋敷境である可能性が高い。また北側の間知3に接するように硬く叩き締められた土間状の遺構がみられた。

南西隅には黒色土が集中しており、鍛冶炉と思われる石組みが出土している。この石組みの周囲は若干低くなっているが、これは恐らく後の整地時に削られたものと思われる。

出土遺物等の様相から18c中葉～後葉に属すると思われる。

#### ア)土坑・ピット

第II検出面では29基の土坑と44基のピットが検出された。内土7・9・11・20・26・28・29、P3・9・10・11・22・40は欠番とした。土坑・ピットのほとんどは出土遺物も少なく、帰属時期、用途共に不明である。

##### 土1

調査区中央に位置する。長軸89cm、深さ5cmとかなり浅い遺構である。中には多量の礫がみられる。これらの礫に挟まれる形で轆の羽口が出土していることから鍛冶炉であると思われる。

##### 土2

土1の西に位置しており、長軸120cmと大型の土坑であった。土坑底部には多量の礫が見られ、礫の間に焼土と灰が層状に入っていた。礫にも若干の被熱が認められたため土坑内部で火を用いていた可能性が考えられる。

##### 土4

調査区中央、攪乱にはほぼ接するように残されていた。土坑底部からは多少の礫が出土し、覆土中には多量の焼土が見られた。

##### 土5

北部を攪乱に切られる大型の土坑である。長軸は約200cmあり、底部中央には窪みが見られた。覆土中からは伊万里皿や段重、釘などが出土しているためゴミ穴である可能性が考えられる。出土遺物から18c後葉～19c初頭の土坑であろうと思われる。

##### 土15

底面には大量の礫がみられ、一部に粘土が張られていた。出土状況から柱穴である可能性も考えられる。

##### 土17・集石2

調査区南西隅に位置する。南部が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、長軸190cmと大型で深さ7cmほどの遺構である。土坑の縁には礫が並べられており、覆土中には焼土が含まれていた。北東部で集石2に接している。

集石2は長さ12cm程で若干弧状にカーブする遺構である。覆土中には多量の礫が組まれるようにみられたが、中心部のみ礫は認められなかった。サブトレンチを入れて確認したところ礫の下には瓦が敷かれていた。中心の礫が出土していない部分からはそれに組み込まれるような形で轆の羽口が出土しているため鍛冶炉であると思われる。

##### 土18

調査区南西、集石2に隣接して出土した。土坑東部は攪乱により切られているが、長軸150cm程の範囲で礫が集中していた。中央付近には金床石と思われる扁平な石があり、周囲は小礫で固められていた。また、隣接するように荷車の車輪と思われる木製品がみられ、同様に周囲を小礫で固めていた。一部に粘土が集中していることや、覆土中に多量の鉄滓が含まれていたことも合わせて何らかの鍛冶遺構であった可能性が高いと思われる。

##### P27

集石2に接するように検出された。径45cm、深さ17cmの遺構である。覆土は鉄分を多く含んでおり、多量の鉄滓が含まれていたため、土17・集石2と関連して鍛冶遺構の一部である可能性が考えられる。

調査区西側で検出された。径約40cm程の円形を呈する。覆土中から柱材が出土しているため柱穴であると考えられる。

#### イ)石列・間知石列

第II検出面では石列が3列、間知石列が3列みられた。石列1・2は掘り下げ時に搅乱であることが判明したため欠番とした。間知石列は縦じて東西方向に伸びていた。

#### 石列3

調査区北東隅でみられた。南北約1mにわたって2～3段の石が積まれる石垣状の遺構である。石は東側で面が揃えられており、西側には裏込め石が入れられていた。何らかの建物の基礎である可能性も考えられるが、周囲が搅乱に切られているため詳細は不明である。

#### 間知1・2

調査区の南部にみられた。両者ほぼ接するような形で出土しており、北側が間知1、南側が間知2となる。間知1が間知2を切る形であるので、両者には若干の時期差が認められ、間知1のほうが新しいものと思われる。

間知1は調査区西端から東端まで続いている。石列の下及び北側には5～30cm程度の礫が集中していた。悉く石列を固定するための裏込め石であると思われる。間知石の面は南側に向けて揃えられているため北側の屋敷に関わるものであると言えよう。

間知2は間知1より若干下がった位置から見つかった。調査区西端から中央付近まで続いているが、石列はところどころ抜けている。間知石の南部には裏込め石がみられ、西側の一部には間知石の下に刷木と思われる木材が横たわっていた。間知石の面は北側で揃えられていたが、周辺の搅乱がひとく詳細は不明である。悉く南側の屋敷に関わるものであろう。

#### 間知3

調査区北西に位置する。土間状遺構に接して、東西方向に7個程の間知石が並べられていた。石は北側に面を向けて並べられており、南部には裏込め石が詰められていた。間知石列東部は搅乱に切られてしまっているため詳細は判断しがたいが、土間状遺構に接していることから屋敷境である可能性も考えられる。

#### ウ)溝状遺構

調査区北端に位置する。北側が調査区外となるため全容は不明である。覆土中には鉄分が多量に含まれ、両脇には礫が並べられていた。

#### エ)土間状遺構・P1・2・13・43

調査区西、間知3に接して硬化した土が集中している箇所がみられたため、便宜上土間状遺構として調査を行った。土間状遺構は2.5m×2.5mの正方形を呈しており、若干焼土が含まれていた。この土間状遺構の範囲内からはP1・2・13・43が検出された。この4つのピットは東西約2m、南北約1mで長方形に並んでいる。柱痕等良好にはみられなかつたが柱穴となる可能性も考えられる。

この土間状遺構は旧善光寺街道にほぼ面する位置であり、間知石列にも接しているため家屋の入り口であると思われる。

#### 第III検出面

調査区西側は周囲より一段高くなっていた。サブトレンチをいれて確認したところ、段の上面と下部にほぼ同質の整地層がみられ、それぞれに遺構も確認されたため、この西側部分については一旦上層で調査を行い、その後掘削して下面の調査を行った。この上面と下面の遺構には当然の事ながら時期差が認められるであろうが、遺物等も少なくどの程度の時期差であるかは確認できなかった。

調査区北東部には鉄分を多く含む粘土が広がっていた。この粘土の範囲内で検出された土2掘り下げ中に粘土下に石組みが広がっていることが確認された。そのため粘土範囲内にある遺構を調査した後、土2を中心としトレンチを入れて確認作業を行った。結果トレンチ東部に位置する土5に切られる形で大規模な掘り込みとそれに伴う石組みが認められ、土2はこれが露出したものであることが判明した。そこで、この掘り込みを土2と改め、トレンチによる確認作業の後、周囲の粘土剥ぎ取り及び土2掘り下げを行った。結果土2は大型の石組み状遺構であることが判明した。

また、間知石はみられなかったものの、第II検出面間知1・2とほぼ同位置に段差がみられた。一段下がった南側は直上まで第II検出面の土層がみられたため同一検出面として調査を行ったが、この段差を境に多少の時期差が生じることも考えられる。

#### ア) 土坑・ピット

第III検出面からは66基の土坑と44基のピットが検出された。上層の第II検出面でみられた攪乱が一部残っており、検出後攪乱であると判断された土6・8・11・12・13・25・37・40・49・51・57・58・59・61、P2・6・11・12・13・14・15・16・22は欠番とすることとした。

#### 土1

長軸200cmと大型の土坑であるが、深さは5cmと浅かった。調査区北東部の粘土を切るように入っていた。底面からは土2の一部であると思われる石組みがみられた。

#### 土2

調査区北東部に位置する。先述の通り、当初土1に隣接する土坑であると捉えていたが、最終的に石組み状の遺構となつた。石組みは径約2m40cmの円形を呈する部分と長辺2m60cm、短辺2mの方形部分とを組み合わせて形成されている。深さは1m40cm程であったが、方形部分の石組みは1mまでしかみられなかつた。方形石組み中心部底面には杭が1本みられた。杭は太さ約20cmあり、途中で切断されていた。また石組み北西隅と南西隅にはこれより一回り小さな杭が打ち込まれていた。これらの杭は頭がほぼ同レベルで揃えられており、何らかの関連性があると思われる。

円形部の石組みは全体的に強く被熱しているようで、構築礫は赤色化し非常ににもろくなつていて。底面には扁平な石が敷かれていた。この石は非常に大きなものであり、北と南には1段上がるような形でほぼ同じ長さの角柱状の石が隣接していた。底面直上には炭化物が多量に残されており、石にも一部付着していた。全体的な様相からこの円形石組み内で火が使用されていたことが窺える。

方形部と円形部は連結部分で石が途切れしており、この連結部分には両側に三個づつ立石が立てられていた。このような石組みは兵庫県伊丹市伊丹郷町遺跡と東京都品川区仙台坂遺跡などで類例が見られ、共に酒や味噌の製造に関わる石組み竈であるとされている。今回出土した石組みも円形部で火の使用が認められるため同様の石組み竈であると考えられ、文献資料では調査地は糀屋であったとされていることから糀の製造に関わる糀竈ではないかと推察できる。

覆土は方形石組み部分には暗緑褐色土がみられ、円形石組み部には多量の礫とともに粘土がみられた。この粘土は調査区北東部にも広く広がっているため、恐らく廃絶時に竈を崩しながら埋めていき、周囲も整地したのではないかと思われる。このようなことから竈は石組みを粘土で補強して構築されていたと推察できる。また、覆土中からは津洲窯産の皿や甕、漆碗など多数の遺物がみられたため、廃絶時ゴミ穴として利用された可能性も考えられるであろう。出土遺物から17C後半から18C中葉のものと思われる。

#### 土3

土1の南に位置する。非常に浅く深さは10cm程度であるが、覆土中には鉄分を多量に含んでいた。底面からは石組みの一部が露出している。

## 土5

土1南東に位置し、25cmの深さで粘土が入っていた。壁面には土2の石組みが露出している。土2の石組み方形部分とほぼ同位置にあたる。

## 土7

調査区東から見つかった。北東部に広がる粘土を切っている。長軸183cmの梢円形を呈しているが深さ5cm程の浅い遺構である。底面には焼けた石が組まれており、その周囲には粘土が貼られていた。出土状況から鍛冶炉である可能性も考えられるが、土2に近接していることから土2に関連した施設である可能性もあると思われる。

## 土19

間知1に接して確認された。長軸160cmと大型ですり鉢状を呈しており、南部壁面には粘土が集中していた。

## 土24

中央部やや西から検出された。北部上面を搅乱に切られるが、底面は残存していた。底面には組まれたようすに石が並んでいる。西側には粘土が貼られており、何らかの目的で石を組んでいる可能性が考えられる。覆土中からは多量の陶磁器とともに多くの鉄製品が出土した。また、鉄滓も少量みられたが遺構に鍛冶を行っていた痕跡がみられない為、恐らく埋没中に混入したものと思われる。

## 土27

調査区北東隅から出土した。土坑内には桶が入っていた。桶は下半のみしか残されておらず、整地面より上部は削られて残されていなかった。側面には特に孔なども見られず、用途は不明である。周囲には礫や北東部の粘土が広がっていたが、それらを切るように桶が設置されていた。帰属時期などは不明である。

## 土29

調査区東に位置する。長軸146cmの土坑の底面に石列がみられた。出土遺物等から17C後半から18C初頭のものと思われる。

## 土39

調査区南西部で見つかった。長軸90cmの梢円形を呈する。覆土中には柱材が残存しており、周囲は礫で固められていた。柱穴であると思われる。

## 土48

調査区南部で検出された。長軸80cm程の土坑である。覆土中からは伊万里産の皿や寛永通寶が多量にみられた。寛永通寶は7枚みられたが全て一箇所に固まっており、内6枚は重なった状態で出土した。土坑内には柱材も依存し柱穴であると思われるため埋納鉄とは考えがたいが、少なくとも錢貨を連ねた状態で埋められたことは確かであろうと思われる。

## 土54

調査区南部に位置する土坑である。長軸80cmの梢円形を呈する。覆土西側には土48と同様錢貨が重なってみられた。錢貨は8枚あり、元豊通寶、政和通寶、乾元通寶、聖宋通寶、祥符元寶と全てが宋錢であった。出土状況から備蓄錢である可能性も考えられる。

## 土62

調査区北西に位置し、径1m前後の円形を呈している。底面及び壁面には一面に礫が貼り付けられていた。礫は意図的に貼り付けられたと思われるが用途等は不明である。

## P4・9・10

調査区の北部から分布している。径約10cm程の範囲に鉄分が集中していた。掘り下げたところ筒状に鉄分が入っていることが判明。杭等が抜けた跡に鉄分が堆積した可能性も考えられる。

調査区中央やや東に方形に並んでいた。総じて径約35cmほどの円形で、柱材が残存している。柱穴としての用途が想定されるであろう。

P43

調査区南東から出土。覆土中には杭が並んでいた。恐らく遺構埋没後に打たれたものと考えられるが、出土遺物等もなく、詳細は不明である。

イ)石列・間知石列

第Ⅲ検出面からは2本の石列と1本の間知石列が検出された。総じて出土遺物もなく帰属時期は不明である。

石列1

調査区やや南よりにみられる段差付近から出土している。第Ⅱ検出面間知2と出土位置がほぼ一致するため、第Ⅱ検出面間知2の裏込め石である可能性も考えられる。

石列2

調査区西の段状部分を除去した後に検出された。東西方向4m50cmに渡って礫が並んでいた。掘り方等もみられるが、東部を擾乱で切られているため詳細は不明である。

間知1

調査区北西に230cmの長さで並んでいた。石は北向きに面がそろえられていた。間知石南部及び直下には裏込め石もみることができた。一部のみの出土であるため詳細は不明であるが、屋敷境となる可能性も考えられるであろう。

ウ)溝状遺構

2条の溝状遺構が検出された。双方とも調査区西部段状部分から検出されている。

溝状1

調査区西にあって東西方向に伸びている。幅34cm×長さ3mの溝状を呈しているが、西部は調査区外に伸びる可能性も考えられる。遺構覆土中には木材が横たわっていた。木材は長さ2m80cm程の角材で北壁に押し付けられるような形で設置されていた。そのためこの溝状遺構は木材を設置するための掘り方である可能性が高い。

溝状2

約4mに渡って東西方向に伸びているが、西側が調査区外にあたるため全容は不明である。深さ10cm程度の浅い掘り込みであった。遺物等はなく帰属時期・用途共に不明である。

第IV検出面

第Ⅲ検出面下層に整地面の存在が確認できたため、これを第IV検出面として検出を試みた。多量の遺物や木片等の有機物が出土したが遺構はみられなかつたため、生活面ではないと判断し遺物の回収のみ行った。恐らく整地を行った際に多量の遺物が混入したものであると思われる。

第V検出面

第IV検出面に引き続き91m<sup>2</sup>の範囲で検出を行った。地盤が軟弱であり湧水もあったため、調査区内に排水溝を切り、排水を行いながらの検出作業となった。

調査区北側には礫が集中している箇所がみられ、多量の鉄滓と動物骨が見つかった。また、調査区東には南北方向に溝のがびていた。恐らく区画のための溝であると思われるが、そうであるとすれば第Ⅱ・Ⅲ検出面の地割とは異なることとなる。以下各遺構の概要を述べていくこととする。

### ア) 土坑・ピット

第V検出面からは24基の土坑と53基のピットが検出された。第V検出面は比較的有機物の残存状態がよく、柱材が残存しているものが多くみられた。

#### 土5

調査区南西で検出された。長軸約80cmの不整円形をしている。底面中心部には礎石状の石があり、その周囲には根固め石が入れられている。悉く柱穴であると思われる。

#### 土13、24、P12、30、37、46、47

土13、24、P12、30、37、46、47は柱穴である。総じて柱材の残存状態がよく、柱材の一部が依存していた。P37の柱材はスギ材を使用しており、扁平な角柱状を呈している。

#### P4

調査区南西で検出された。径50cmのピットである。P5を切っており、覆土中には柱材が依存していた。柱材はマツ材で下端は台形状に削られていた。径10cm弱の柱であり、下端から27cm上にはホゾ穴らしき切込みの一部がみられた。

#### P5

P4に切られる。径45cmとP4より一回り小さなピットである。柱材こそ依存していなかったものの底面には礎石がみられたため柱穴であるといえよう。

### イ) 溝

#### 溝1

調査区東側で検出された。南北方向に約5m50cm続く溝である。南部は調査区外にあたるため全長は不明である。幅約1m、深さ55cmと大型の溝であり、断面は台形を呈している。流水の痕跡等がみられなかつたので区画のための溝である可能性が高い。仮に区画溝であるならば、第II・III検出面の地割とは異なり南北方向に伸びているのは注目すべき点であろう。

#### 溝2

流路から南に伸びるように検出された。長さ2m14cm、深さ11cmと非常に浅い溝であった。溝1との切り合ひ関係は判別し難く、造構北部も不明瞭であったため、自然流路の一部である可能性が高いと思われる。

### ウ) 自然流路

調査区北部にみられた。東西方向に伸びる自然流路であると思われる。流路は調査区外まで伸びており、北部も調査区外にあたるため正確な規模は不明である。

流路内には多量の礫とともに鉄滓や動物の骨などが含まれていた。礫は北部を中心に含まれており、南端付近で途切れていった。礫のない部分には東西方向に10数本の杭が打たれている。杭は径5cm前後の円柱形であり、下端は4方向から削られている。材質はスギ材を使用しているようである。

動物骨はシカ、ウマ、イノシシ、イヌ等の骨である。腐食の度合いや欠損の仕方等からこの場に捨てられたものではなく、流されてきたものである可能性が高い。

鉄滓は総重量4931.7g出土したが特に集中する箇所もなく、周囲に焼土等もみられなかった。動物骨同様流されてきたものである可能性が高いように思われる。大量にみられた礫には打ち欠かれた痕跡も認められず、断面にも人為的に掘られた形跡は認められないが、南部に杭が打たれることから、ある程度人為的に手が加わえた自然流路が洪水等で流された可能性が高いと思われる。

第1表 出土遺構一覧表

測定番号	種類	測量			特徴	備考
		南北	東西	高さ		
II検	土坑	1	89	67	5	鍛冶炉か?
II検	土坑	2	120	80	15	焼上灰が層になっている
II検	土坑	3	80	40	10	土間状遺構に切られる
II検	土坑	4	156	129	46	焼土多量
II検	土坑	5	202	198	7	搅乱に切られる
II検	土坑	6	66	48	8	
II検	土坑	7				欠番
II検	土坑	8	(105)	(81)	12	搅乱に切られる
II検	土坑	9				欠番
II検	土坑	10	50	45	10	
II検	土坑	11				欠番
II検	土坑	12	88	70	11	
II検	土坑	13	90	78	16	
II検	土坑	14	68	67	20	
II検	土坑	15	72	59	17	柱穴か?
II検	土坑	16	84	60	16	
II検	土坑	17	190	75	7	南部調査区外 集石2に接する 集石2含めて鍛冶炉か?
II検	土坑	18	145	100	30	粘土・繊集中 作業場か?
II検	土坑	19	65	60	10	上層に粘土が貼られている
II検	土坑	20				欠番
II検	土坑	21	62	55	23	土22を切る
II検	土坑	22	51	(12)	26	土21に切られる
II検	土坑	23	79	60	10	間知石列1に切られる
II検	土坑	24	48	53	6	
II検	土坑	25	60	56	10	
II検	土坑	26				欠番
II検	土坑	27	64	47	11	
II検	土坑	28				欠番
II検	土坑	29				欠番
II検	ピット	1	54	45	8	土割状遺構内
II検	ピット	2	60	43	14	土間状遺構内
II検	ピット	3				欠番
II検	ピット	4	72	53	7	
II検	ピット	5	31	(21)	10	
II検	ピット	6	45	(30)	18	西部調査区外
II検	ピット	7	40	(15)	10	西部調査区外
II検	ピット	8	60	47	13	
II検	ピット	9				欠番
II検	ピット	10				欠番
II検	ピット	11				欠番
II検	ピット	12	40	40	20	
II検	ピット	13	54	50	13	P38を切る 土間状遺構内
II検	ピット	14	63	(39)	8	搅乱に切られる
II検	ピット	15	63	53	14	
II検	ピット	16	40	30	6	
II検	ピット	17	30	(17)	13	北半調査区外
II検	ピット	18	55	44	9	
II検	ピット	19	49	47	15	
II検	ピット	20	60	54	15	
II検	ピット	21	65	54	9	
II検	ピット	22				欠番
II検	ピット	23	75	54	13	北部調査区外
II検	ピット	24	39	37	13	木片が横たわる 鉄分集中箇所あり

検出面	種類	高さ	深度			時期	備考
			上端	中端	下端		
II 検	ピット	25	40	39	13		木質物（丸板？）が敷かれている
II 検	ピット	26	20	19	10		
II 検	ピット	27	45	43	11		鉄分集中
II 検	ピット	28	41	35	17		底面粘土あり
II 検	ピット	29	34	35	13		
II 検	ピット	30	40	(15)	8		西半調査区外
II 検	ピット	31	40	(30)	10		柱残存 西半調査区外
II 検	ピット	32	32	30	15		柱残存 バイブル材か？
II 検	ピット	33					欠番
II 検	ピット	34	32	29	20		間知石列1に接する
II 検	ピット	35	50	48	10		
II 検	ピット	36	33	32	5		
II 検	ピット	37	27	26	8		間知石列1に接する
II 検	ピット	38	53	(26)	14		P13に切られる
II 検	ピット	39	80	45	19		
II 検	ピット	40					欠番
II 検	ピット	41	55	45	24		
II 検	ピット	42	32	31	13		
II 検	ピット	43	50	45	5		土間状遺構内
II 検	ピット	44	44	(22)	14		北部調査区外
III 検	土坑	1	200	156	5		一部石組み露出
III 検	土坑	2					蛇窓
III 検	土坑	3	117	84	10		鉄分集中 石組み窓!!
III 検	土坑	4	150	(101)	11		土坑9に切られる 北半調査区外
III 検	土坑	5	118	105	25		鉄分含む粘土集中 一部窓竈露出
III 検	土坑	6					欠番
III 検	土坑	7	183	129	5		粘土を切るように入る 鋼冶炉か？
III 検	土坑	8					欠番
III 検	土坑	9	(75)		5		土坑10に切られる 土坑4を切る 北部調査区外
III 検	土坑	10	70	(45)			土坑9を切る 北部調査区外
III 検	土坑	11					欠番
III 検	土坑	12					欠番
III 検	土坑	13					欠番
III 検	土坑	14	204	(67)	14		北部間知石列1に切られる
III 検	土坑	15	(43)	46	17		南部間知石列1に切られる
III 検	土坑	16	88	76	14		上面に粘土が貼られている 土坑44・P1に切られる
III 検	土坑	17	174	95	23		底面に焼土が広がる 土坑18に切られる
III 検	土坑	18	66	75	10		底面に焼土が広がる 土坑17を切る 土坑23に接する
III 検	土坑	19	160	142	26		P18に切られる 土坑20に接する 粘土集中箇所あり
III 検	土坑	20	55	48	13		土坑19・P18に接する
III 検	土坑	21	60		29		
III 検	土坑	22	67	54	19		
III 検	土坑	23	184	109	28		
III 検	土坑	24	175	(116)	13		土坑28を切る 土坑18に接する
III 検	土坑						右組み状に礫出土 西部一部粘土が貼られている 北部表面擾乱に切られる
III 検	土坑	25					欠番
III 検	土坑	26	94	86	27		上面に粘土が貼られている
III 検	土坑	27	76	65	22		桶出土
III 検	土坑	28	79	63	17		土坑23に切られる
III 検	土坑	29	146	110	19		底面に石列のような疊あり
III 検	土坑	30	81	65	17		
III 検	土坑	31	69	38	26		
III 検	土坑	32	61	55	14		P29を切る
III 検	土坑	33	45	42	10		柱残存 柱穴

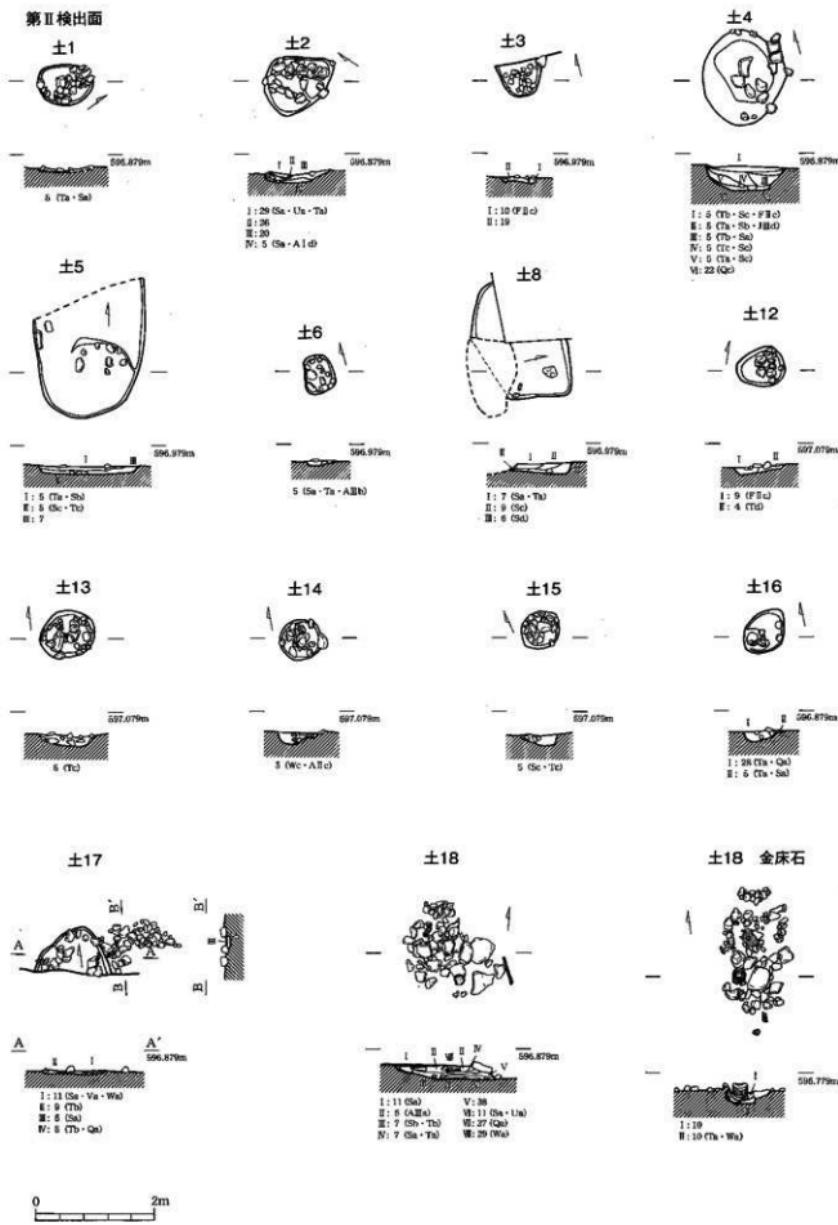
検出面	種別	番号	深度			時期	備考
			長軸	短軸	深さ		
III検	土坑	34	69	58	17		
III検	上坑	35	126	93	19		土坑52・P32・33を切る
III検	土坑	36	71	58	12		土坑37に切られる
III検	土坑	37					欠番
III検	土坑	38	74	54	24		上面に粘土が貼られている
III検	土坑	39	90	70	18		柱残存 柱穴 底面礫出土
III検	土坑	40					欠番
III検	土坑	41	73	64	21		土坑63に切られる 土坑42に接する
III検	上坑	42	40	(40)	20		土坑63・41 P34に接する
III検	土坑	43	(90)	(85)	30		西部南部調査区外
III検	土坑	44	64	41	20		P2を内包する 上坑16を切る P1に接する
III検	土坑	45	64	63	11		
III検	土坑	46	57	55	18		上面に粘土が貼られている
III検	土坑	47	66	53	33		土坑53に接する 底面礫出土 石列1の延長か?
III検	下坑	48	87	80	38		土坑47・19に接する 底面礫出土 石列1の延長か?
III検	土坑	49					欠番
III検	土坑	50	103	83	19		
III検	土坑	51					欠番
III検	土坑	52	62	(22)	12		土坑35に切られる
III検	土坑	53	57	42	36		上坑47・48に接する
III検	土坑	54	80	59	16		土坑66を切る
III検	上坑	55	(38)	52	17		上坑54に切られる
III検	土坑	56	146	126	22		
III検	土坑	57					欠番
III検	土坑	58					欠番
III検	土坑	59					欠番
III検	土坑	60	62	41	32		
III検	土坑	61					欠番
III検	土坑	62	111	103	27		底面礫が貼り付けられている
III検	土坑	63	60	53	28		土坑41を切る 土坑42・P34に接する
III検	土坑	64	140	109	18		土坑65に接する
III検	土坑	65	129	124	18		底面礫出土 溝状2を切る
III検	土坑	66	104	65	26		溝状2に接する
III検	ピット	1	40	43	21		土坑16を切る 土坑44に接する
III検	ピット	2					欠番
III検	ピット	3	32	28	18		上面に粘質土堆積
III検	ピット	4	9	9			簡状に鉄分集中
III検	ピット	5	43	40	21		
III検	ピット	6					欠番
III検	ピット	7	42	39	10		上面に粘土が貼られている
III検	ピット	8	36	30			
III検	ピット	9	13	12			簡状に鉄分集中
III検	ピット	10	10	9			簡状に鉄分集中
III検	ピット	11					欠番
III検	ピット	12					欠番
III検	ピット	13					欠番
III検	ピット	14					欠番
III検	ピット	15					欠番
III検	ピット	16					欠番
III検	ピット	17	43	33	18		
III検	ピット	18	57	44	14		土坑19を切る 底面粘土出土 (粘土は土坑19のものか?)
III検	ピット	19	46	40	28		土坑48に接する
III検	ピット	20	50	33	17		

検出番号	測定	測定	測定			測定	測定
			測定	測定	測定		
III検	ピット	21	36	35	17		
III検	ピット	22				欠番	
III検	ピット	23	35	(17)	14	間石列1に切られる	
III検	ピット	24	34	29	38	P25に接する 柱穴	
III検	ピット	25	32	30	38	P24に接する 柱穴	
III検	ピット	26	31	29	27	P27に接する 柱穴	
III検	ピット	27	40	37	34	P26に接する 柱穴	
III検	ピット	28	33	32	13	土坑32・P29に接する	
III検	ピット	29	28	(20)	7	土坑32に切られる P28・30に接する	
III検	ピット	30	25	25	10	P31を切る P29に接する	
III検	ピット	31	40	34	11	P30に切られる 柱穴	
III検	ピット	32	50	27	12	土坑35に切られる P33に接する	
III検	ピット	33	35	(27)	15	土坑35に切られる P32に接する	
III検	ピット	34	(16)	17	29	土坑42・63に接する	
III検	ピット	35	43	37	27		
III検	ピット	36	18	18	11	柱残存 柱穴	
III検	ピット	37	47	45	26		
III検	ピット	38	30	26	17	P39に接する	
III検	ピット	39	29	21	11	P38に接する	
III検	ピット	40	59	51	35		
III検	ピット	41	(28)	37	14	南部調査区外	
III検	ピット	42	34	21	23		
III検	ピット	43	41	35	31	杭が並んでいる P44に接する 北部に繰集中	
III検	ピット	44	24	20	11	P43に接する	
V検	土坑	1	97		13	南部調査区外	
V検	土坑	2	56	55	10	P2を切る	
V検	土坑	3	62	56	7		
V検	土坑	4	69	(44)	7	西部調査区外 柱残存 柱穴	
V検	土坑	5	79	74	6	中心に礎石状の石あり 柱穴か?	
V検	土坑	6	71	62	23	木材の下に入っている	
V検	土坑	7	53	45	13	木材の下に入っている	
V検	土坑	8	58		8	排水溝に切られる	
V検	土坑	9	96	89	12	排水溝に切られる	
V検	土坑	10	50	45	10	流路を切る	
V検	土坑	11	60	45	10	流路を切る	
V検	土坑	12	70	53	10	流路を切る	
V検	土坑	13	43	40	5	土坑14・渠1を切る 柱残存 柱穴	
V検	土坑	14	81	62	15	土坑13に切られる 土坑15・渠1を切る	
V検	土坑	15	90	67	9	土坑14に切られる 渠1を切る	
V検	土坑	16	70	62	9	P40に切られる P52を切る	
V検	土坑	17	66		11	西部排水溝に切られる	
V検	土坑	18	56		14	東部調査区外	
V検	土坑	19	83	34	23		
V検	土坑	20	43	38	30		
V検	土坑	21	50	49	32		
V検	土坑	22	61	40	14	土坑23を切る	
V検	土坑	23	26	(21)	9	土坑22に切られる	
V検	土坑	24	60		9	P11に切られる 東部排水溝に切られる 柱残存 柱穴	
V検	ピット	1	45	38	9		
V検	ピット	2	60	59	13	土坑2・P51に切られる	
V検	ピット	3	39	31	8		
V検	ピット	4	50	45	17	P5を切る 柱残存 柱穴	
V検	ピット	5	45	43	28	P4に切られる 柱残存 柱穴	

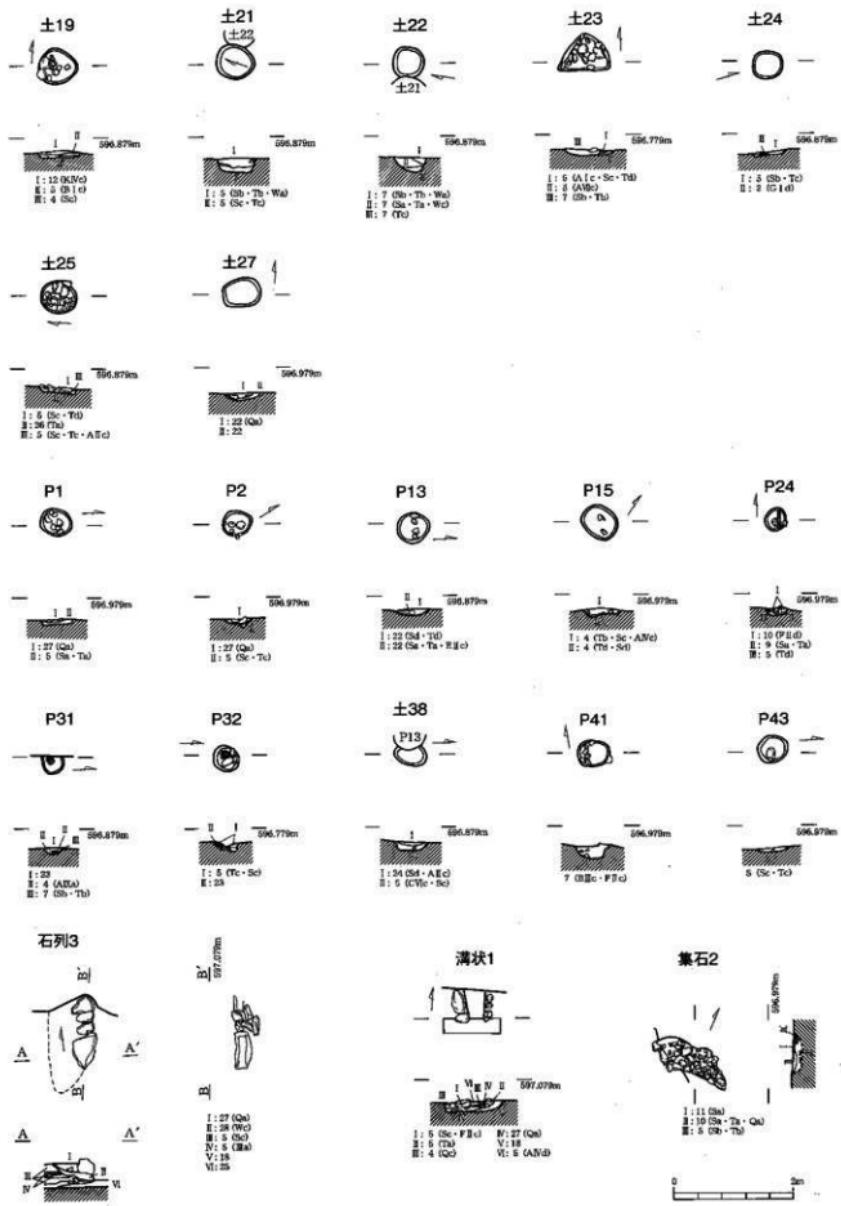
検査番号	井別	井名	測定	測定	測定	備考
V検	ピット	6	49	46	10	
V検	ピット	7	46	41	6	
V検	ピット	8	35	33	15	
V検	ピット	9	34	30	10	
V検	ピット	10	41	40	10	
V検	ピット	11	40	34	10	上坑24を切る
V検	ピット	12	27	26	45	柱穴か?
V検	ピット	13	50	43	20	
V検	ピット	14	17	17	6	
V検	ピット	15	20	15	5	
V検	ピット	16	23	28	7	P44に切られる
V検	ピット	17	27	23	11	
V検	ピット	18	33	24	13	
V検	ピット	19	17	19	18	
V検	ピット	20	33	33	10	溝2を切る
V検	ピット	21	35	25	10	
V検	ピット	22	23	23	11	
V検	ピット	23	42	32	20	
V検	ピット	24	26	24	11	P25に接する
V検	ピット	25	13	13	11	P24に接する
V検	ピット	26	31	23	7	
V検	ピット	27	32	30	9	
V検	ピット	28	45	40	21	流路に接する
V検	ピット	29	52	30	6	流路を切る 東部排水溝に切られる
V検	ピット	30	28	28	30	柱残存 柱穴
V検	ピット	31	15	15	7	
V検	ピット	32	35	30	15	流路を切る
V検	ピット	33	33	30	13	溝1・P33に接する
V検	ピット	34	33	30	14	P33に接する
V検	ピット	35	30	29	23	P36に接する
V検	ピット	36	30	21	11	P35に接する
V検	ピット	37	48	38	16	溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	38	34	34	23	
V検	ピット	39	17	17	8	土坑20・P41に接する
V検	ピット	40	15	15	8	土坑16を切る
V検	ピット	41	17	15	8	土坑20・P39・P42に接する
V検	ピット	42	16	15	16	土坑20・P41に接する
V検	ピット	43	20		13	南部排水溝に切られる
V検	ピット	44	26		13	P16を切る P45に接する 東部排水溝に切られる
V検	ピット	45	25		18	P44に接する
V検	ピット	46	33	32	11	溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	47	23	23	5	溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	48	19	14	21	
V検	ピット	49	21	20	8	溝1に接する
V検	ピット	50	31	26	20	溝1を切る
V検	ピット	51	50	48	18	P2を切る 南部調査区外
V検	ピット	52	63	62	23	土坑16に切られる 溝1を切る
V検	ピット	53				欠番

II検	集石	1			欠番
II検	集石	2			土坑17に接する 鋼治炉か?
II検	集石	3			欠番
II検	石列	1			欠番
II検	石列	2			欠番

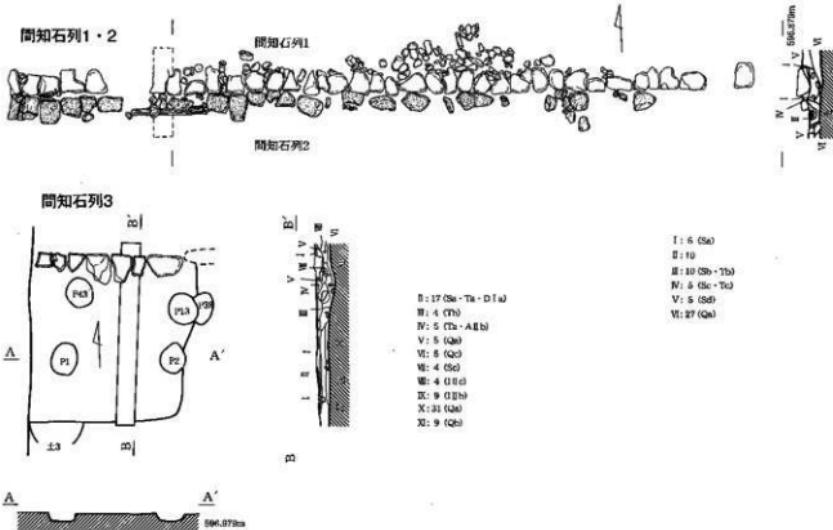
検査番	種別	番号	規格			特徴	備考
			高さ	幅員	厚さ		
II 檢	石列	3	111	80	43		
II 檢	溝状	1	62	63	5		
II 檢	間知石列	1	1241	80	19	間知石列2を切る	
II 檢	間知石列	2	1073	40	12	間知石列1に切られる	
II 檢	間知石列	3	248	48	16		
III 檢	石列	1	422	50	5		
III 檢	石列	2	450	68	20		
III 檢	間知石列	1	230	20	20		
III 檢	溝状	1	303	34	19		
III 檢	溝状	2	392	56	10		
V 檢	溝	1	551	110	55		土坑13・14・15・P37・46・47・50・52に切られる P33・49に接する
V 檢	溝	2	214	72	11		土坑12・P20に切られる



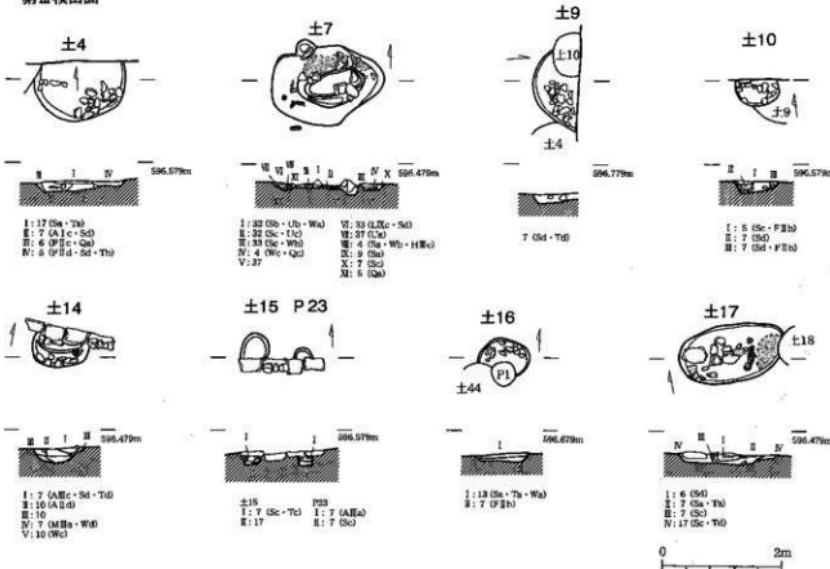
第8図 遺構(1)



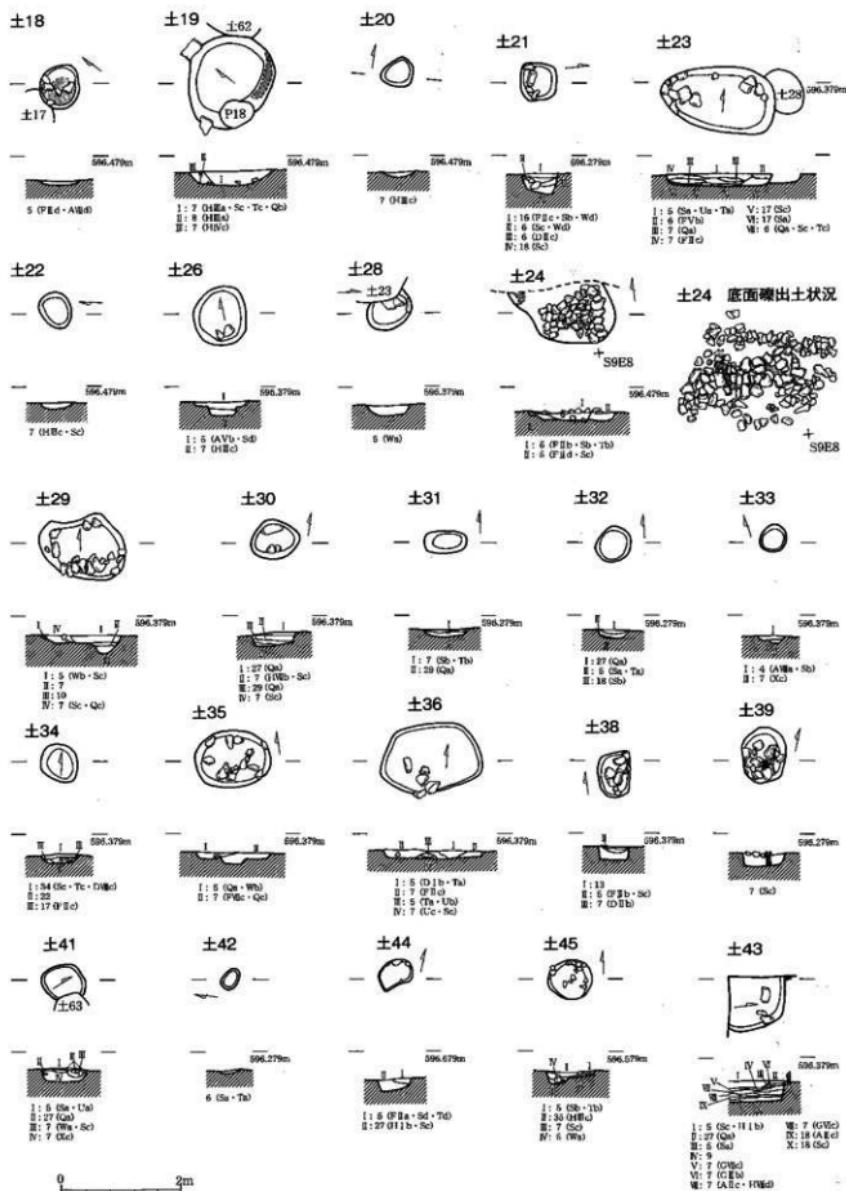
第9図 遺構(2)



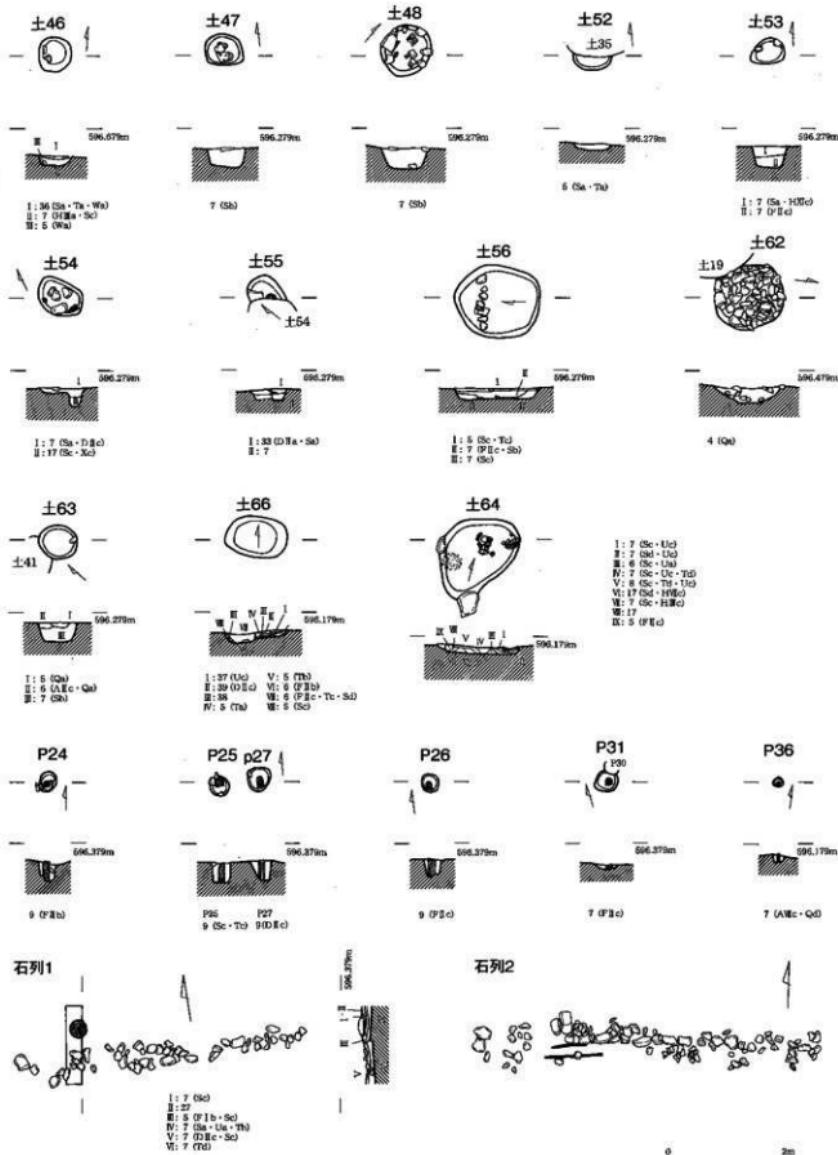
### 第Ⅲ検出面



第10図 遺構(3)

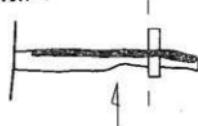


第 11 図 遺構(4)



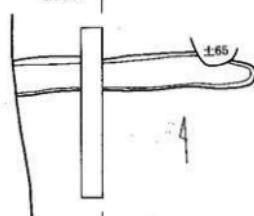
第12図 遺構(5)

満状1



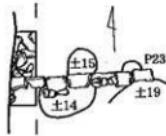
満状1  
I : 16 (Sc - Td)  
II : 8 (Tc IIc)  
III : 5 (Sc - Sc)  
IV : 5 (H 15 - Sc)  
V : 17 (A,B)  
VI : 7 (Glc - FeC)  
VII : 7 (Sc - Td)

満状2



満状2  
I : 13 (H IIc - FeC - Wd)  
II : 13 (O IIc)  
III : 34 (Sc)  
IV : 7 (FeC - Sc)  
V : 17 (A,B)  
VI : 7 (Tc - Vc)  
VII : 7 (Sc - Td)  
VIII : 7 (Sc - Td)  
IX : 37  
X : 6 (Sc - FeC)  
XI : 5 (Wd - Sc)  
XII : 17 (H IIc - Sc - FeC)  
XIII : 6 (Tc IIb - Wa)  
XIV : 7 (H IIc - Sc - FeC)  
XV : 7 (Sc - Td)  
XVI : 10 (O IIc - Xd)  
XVII : 9 (G IIa)  
XVIII : 5 (Wa)  
XIX : 10 (Sc - Sc)  
XX : 7 (Sc - Xd)  
XXI : 9 (H IIc - Sc)

間知石列1

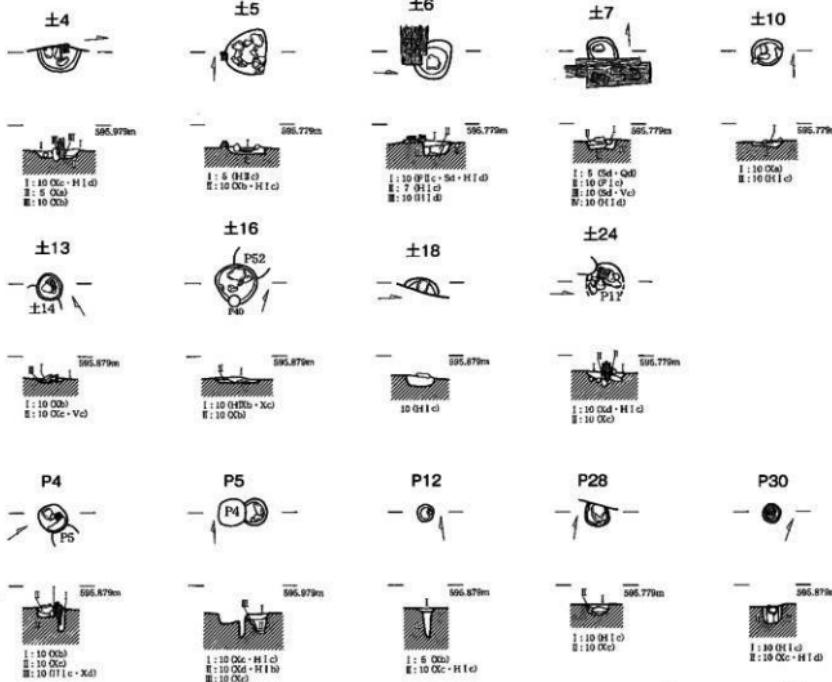


間知石列1  
I : 16 (Sc)  
II : 17 (Sc - A IIc)  
III : 17 (A,B)  
IV : 17 (Sc)

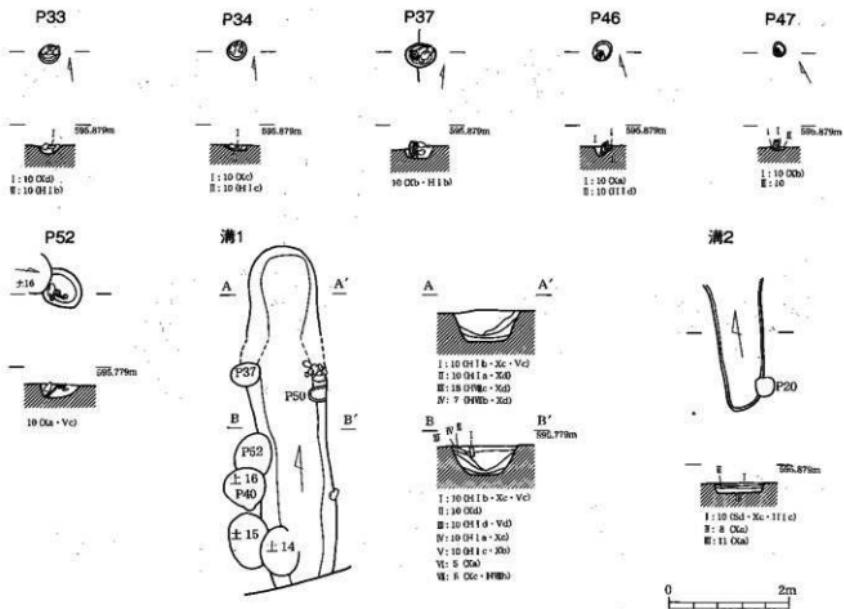
I : 13 (H IIc - FeC - Wd)  
II : 13 (O IIc)  
III : 34 (Sc)  
IV : 7 (FeC - Sc)  
V : 17 (A,B)  
VI : 7 (Tc - Vc)  
VII : 7 (Sc - Td)  
VIII : 7 (Sc - Td)  
IX : 37  
X : 6 (Sc - FeC)  
XI : 5 (Wd - Sc)  
XII : 17 (H IIc - Sc - FeC)  
XIII : 6 (Tc IIb - Wa)  
XIV : 7 (H IIc - Sc - FeC)  
XV : 7 (Sc - Td)  
XVI : 10 (O IIc - Xd)  
XVII : 9 (G IIa)  
XVIII : 5 (Wa)  
XIX : 10 (Sc - Sc)  
XX : 7 (Sc - Xd)  
XXI : 9 (H IIc - Sc)

I : 37  
II : 6 (FeC)  
III : 5 (Wa - Sc)  
IV : 17 (H IIc - Sc - FeC)  
V : 6 (Tc IIb - Wa)  
VI : 7 (H IIc - Sc - FeC)  
VII : 7 (Sc - Td)  
VIII : 7 (Sc - Td)  
IX : 10 (O IIc - Xd)  
X : 9 (G IIa)  
XI : 5 (Wa)  
XII : 10 (Sc - Sc)  
XIII : 7 (Sc - Xd)  
XIV : 10

第V検出面



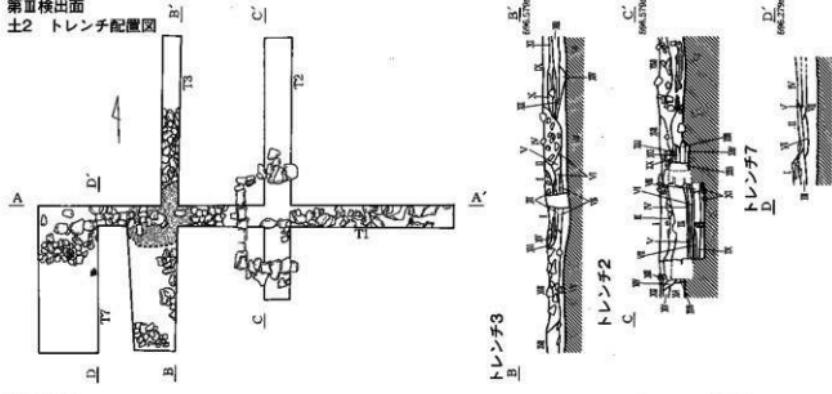
第13図 造構(6)



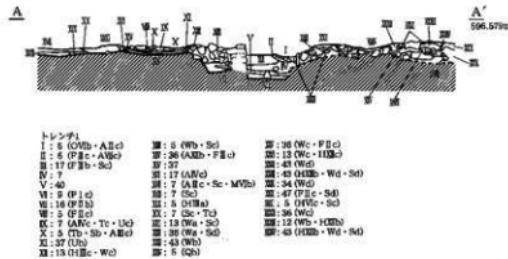
第14図 遺構(7)

第Ⅲ検出面

土2 トレチ配置図

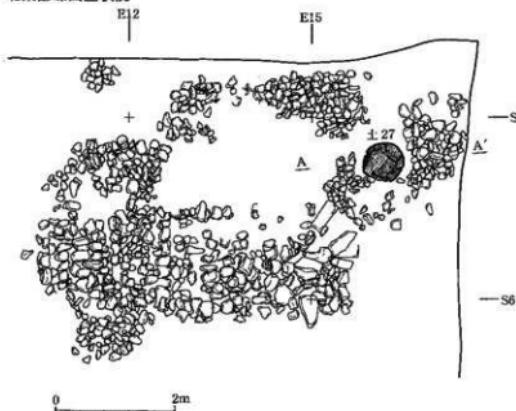


トレチ1



トレチ2	
I : 5 (Wa - Qd)	
II : 5 (Mdc - Bd - Tb)	
III : 40	
IV : 42	
V : 37	
VI : 7 (Fdc - Sc)	
VII : 7 (Pdc - Sc)	
VIII : 7 (Sd - Hdc)	
IX : 8	
X : 10	
XI : 8 (Wa - Fdc)	
XII : 8 (Wa)	
XIII : 5 (Wa)	
XIV : 7 (Abc - Sc - Fdc)	
XV : 17	
XVI : 10 (Tdc - Sc)	
XVII : 5 (Abc - Sc - Tb)	
XVIII : 15 (Abc - Sc - Hdc)	
XIX : 7 (Odc)	
XX : 37	
XXI : 17 (Abc)	
XXII : 18	
XXIII : 37	
XXIV : 11	
XXV : 7 (Wa - Fdc)	
XXVI : 7 (Wa)	
XXVII : 7 (Abc - Sc - Fdc)	
XXVIII : 9 (Abc - Sc - Tb)	
XXIX : 7 (Abc - Sc - Hdc)	
XX : 9	

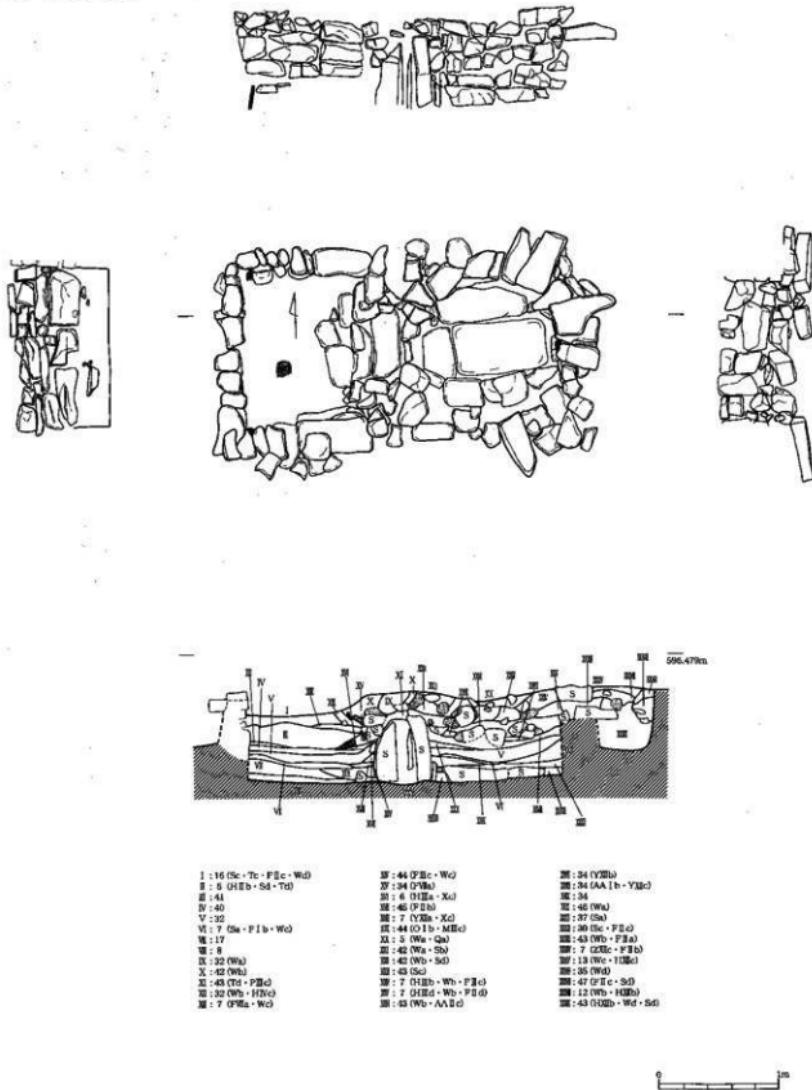
北東部出土状況



トレチ7	
I : 5 (Fdc - Sc)	II : 49
II : 22 (Sc)	III : 7 (Sc - Tb)
III : 7	IV : 49 (Abc - Qd)
IV : 5 (Sc - Tb - Wb - Qd)	V : 7 (Sc)
V : 32 (Wb)	VI : 49 (Wa)
VI : 49 (Wa)	VII : 6 (Wb)
VII : 49 (Abc - Sc)	VIII : 6 (Sc)
VIII : 16 (Wa - Sc - Udc)	IX : 6 (Sc)
IX : 5 (Sc - Wc - Qd)	X : 9 (Sc - Fdc)
X : 7 (Pdc)	XI : 7 (Sc - Qd)

トレチ7	
I : 5 (Fdc - Sc)	II : 49
II : 22 (Sc)	III : 7 (Sc - Tb)
III : 7	IV : 49 (Abc - Qd)
IV : 5 (Sc - Tb - Wb - Qd)	V : 7 (Sc)
V : 32 (Wb)	VI : 49 (Wa)
VI : 49 (Wa)	VII : 6 (Wb)
VII : 49 (Abc - Sc)	VIII : 6 (Sc)
VIII : 16 (Wa - Sc - Udc)	IX : 6 (Sc)
IX : 5 (Sc - Wc - Qd)	X : 9 (Sc - Fdc)
X : 7 (Pdc)	XI : 7 (Sc - Qd)

第15図 遺構(8)



第16図 遺構(9)

## 4 出土遺物

### 1 土器・陶磁器・瓦・土製品

今回の調査では非常に多数の遺物が出土した。そのうち図化可能なものとして484点掲載した。種別としては土器・陶器・磁器・土製品・瓦がみられ、器種・器形も多岐にわたっている。これらの出土遺物はほぼ全てが戦国時代末～近代のものである。以下検出面毎に概要及び器種・器形の傾向等を述べていく。

#### (1) 器種分類

##### ア) 磁器

磁器は91点図化した。産地を見ると肥前産81点(89.0%)、瀬戸美濃産6点(6.5%)、中国漳州窯産3点(3.2%)、と肥前産が大多数を占めている。これは江戸時代後期に瀬戸美濃地方で磁器生産が始まるまでは磁器流通の主体が肥前地方にあったことを示していると思われる。

器種は多様であるため、形状を中心にお碗類・皿類・鉢類・壺類・瓶類・蓋類・その他に大別した。さらにその中で用途別に碗類は碗・小杯・猪口・薔薇猪口・皿類は皿・段皿・鉢類は鉢・段重・瓶類は瓶・徳利・神酒徳利に細分した。また、その他として向付・紅猪口・人形水滴などがみられた。器種別にみると生活雑器と考えられるものとして碗、小杯、猪口、薔薇猪口、皿、段皿、鉢、段重、徳利、神酒徳利、壺類、蓋が出土している。中でも碗、皿が圧倒的に多く、碗は36点(39.5%)、皿は29点(31.8%)みられた。やはり生活の道具として碗や皿が身近にあったのであろう。また、生活雑器以外では人形水滴・向付・紅猪口等がみられるが、点数はごくわずかなものであった。

##### イ) 陶器

陶器は磁器に比べ点数が多く、265点図化することができた。産地もバラエティに富んでおり、瀬戸美濃産、肥前産、京・信楽産、常滑産などがみられる。比率は瀬戸美濃産219点(82.6%)、次いで肥前産28点(10.5%)、京・信楽産13点(4.9%)であり、瀬戸美濃産が極端に多くなっている。磁器では肥前産が大多数を占めていたことを考慮すると、磁器は肥前産、陶器は瀬戸美濃産が主体的に流通していた事が推察できる。

器種は碗類・皿類・鉢類・蓋類・壺類・瓶類・甕類・その他に分類した。さらに磁器と同じく用途別に碗類は碗・小杯・皿類は皿・灯明皿・灯明受け皿・鉢類は鉢・擂鉢・捏鉢・植木鉢・蓋類は蓋・壺類は壺・四耳壺・瓶類は瓶・徳利・神酒徳利・甕類は甕というように細分化した。

器種については碗59点(22.2%)、皿82点(30.9%)、鉢16点(6.0%)、すり鉢15点(5.6%)、蓋9点(3.3%)が特に多く、磁器と同じく生活雑器が多く出土しているといえる。また、磁器に比べてより多様な器種がみられる事も大きな特徴であり、より身近な道具として陶器があったことが窺える。もう一つ大きな特徴として天目茶碗8点、向付10点、茶入2点と商人地にしては茶器が多く出土していることが挙げられる。特に天目茶碗と向付は多く出土しているため、当該地の住人が茶の湯を嗜んでいたことが推察できる。その他、特殊な品として仏花瓶、仏飯具、神酒徳利などの神仏用品や煙管の雁首・飼猪口・秉燭・醤油壺・甕等がみられた。

##### ウ) 土器

本遺跡では土師質のものを土器として区分した。これらは総じて無釉のものである。土器はどの検出面でも普遍的にみられ、総計113点図化することができた。陶磁器とは違い、器種はごく限られており、皿79点(68.1%)、内耳鍋23点(19.8%)がほとんどである。その他のものとしては蓋・植木鉢・焙烙鍋・火鉢が少数あるのみであった。土器皿のほとんどには灯明皿として使用された痕跡がみられるが、中には底面に墨書きのあるものも確認できた。墨書き土器は4点出土しており総じて底面に墨書きが書かれていた。墨書きは「三」が1点、「〇」が3点であった。

また、数点ではあるが瓦質陶器も出土している。瓦質陶器は3点の内2点が火鉢であり、残る1点は壺類であった。総じて残存状態が悪く、詳細は不明である。

## エ)瓦

瓦は破片での出土が多く、出土点数は多いものの図化できたものは3点のみであった。2点が丸瓦であり、1点が五七桐紋の軒丸瓦であった。

## オ)土製品

土製の出土物の中でも土器・陶磁器にあたらない製品を土製品として区分した。土製品は非常に少なく、9点を図化したのみである。9点のうちのほとんどは輪の羽口であり、計6点出土している。残る3点は土鉢2点と面模1点である。共に遊戯具であると考えられる。

## (2)各検出面の様相

### 第I検出面

第I検出面では近世に属する遺物を中心に29点の土器・陶磁器を図化した。出土量は磁器4点(13.8%)、陶器24点(82.8%)、土器1点(3.4%)と陶器が多い。陶器磁器共に瀬戸美濃産が圧倒的に多く、実に90%以上が瀬戸美濃産である。これは当該期の陶磁器流通においては瀬戸美濃が中心であったことを示していると思われる。

全体的な遺物の様相から第I検出面は19c以降、明治期であると思われる。

#### ア)磁器

出土点数は多くはないが、瀬戸美濃産が2点、肥前産が2点の計4点出土している。器種は3点が碗、残る1点が壺であった。

2は染付の筒型碗である。器面はほぼ直に立ち上がり、外面には青海波に植物が描かれている。肥前産で18c中ごろに比定されるであろう。

#### イ)陶器

陶器は総じて瀬戸美濃産のものであった。器種は多岐に渡っており、碗・徳利・壺・鉢・灯明受け皿等の生活用品に加え、植木鉢や水滴等も出土している。中でも碗3点、皿3点、徳利4点が若干多いように見受けられるが、点数的な差異が大きいわけではないため各器種が普遍的に出土しているといえよう。

22~24はいわゆる貧乏徳利である。やや灰色の胎土に鉄釉で文字が書かれている。総じて破片での出土となるため文字は読みとり難いが、23には「本」の字が認められる。5は鍔手茶碗である。内面と外面口縁部に鉄釉がかけられ、外面には回転施文具による連続沈線が施されている。

#### ウ)土器

土器は17の1点のみ図化した。植木鉢の底部と思われ、中心と思われる箇所には穿孔がみられる。帰属時期等は不明である。

### 第II検出面

第II検出面では134点の遺物を図化した。磁器59点(44.0%)、陶器64点(47.7%)、土器6点(4.4%)、土製品5点(3.7%)と他の検出面に比べて磁器が多く見受けられる。産地では瀬戸美濃産49点、肥前産61点と肥前産が多く出土しており、特に磁器は59点中55点が肥前産である。これは当該期に於いては瀬戸美濃地方での磁器生産が行われていないことに起因すると思われる。第III検出面に比べると磁器の出土点数が3倍近く増加していることを踏まえると、この頃から肥前産磁器の流通量が増加したと考えられるであろう。陶器は64点中45点が瀬戸美濃産であり、次いで京・信濃産が10点、肥前産が6点みられる。のことから陶器は瀬

戸美濃が流通の主流を占めていたことが分かる。

器種構成としては碗類36点、皿類38点など生活雑器である碗皿類が多数を占めている。また、少数ではあるが仏花瓶、仏飯具、神酒德利など信仰に関わるものや向付なども出土している。

上層からの混入品も多数あると思われるが、全体的な様相からこの面は18c中葉～後葉に属すると考えられる。

#### ア)磁器

磁器は59点を図化した。先に触れた通り59点中55点が肥前産である。残る4点は瀬戸美濃産であるがこれらは上層からの混入遺物であると考えられるものであるため、磁器は肥前産のみが出土していると考えてもよいであろう。

器種構成は碗類19点(32.2%)、蕎麦猪口3点、段重3点、皿類23点(38.9%)、瓶類2点、徳利2点、神酒徳利2点、蓋3点、人形水滴1点であり、やはり碗皿類が多く出土している。

36は染付の碗である。外面には斜格子文の中に菊花文が描かれている。器形はやや丸みを帯びて立ち上がる碗であるが、内面口縁付近の釉が削り取られている。18c中葉のものであろう。41は肥前産の段重である。外面は恐らく8分割され、宝文と蛸唐草文が交互に配置されている。器形はほぼ垂直に立ち上がり、内面口縁部付近は釉が削り取られている。18c中葉～後葉のものであろうと思われる。45はやや斜めに立ち上がる蕎麦猪口である。外面には冰裂地に菊花様の花が描かれている。18c後半～19c初頭のものであろう。62は染付の蓋である。上面には連弁文がみられる。内面には中心に向けて5つの文字が書かれているが、読み取りづらく何の字であるかは不明である。64はやや口径が広い碗である。外面には蛸唐草文、内面には四方擣がみられる。蛸唐草文はやや省略されたものであり、四方擣も崩れている。恐らく18c中葉～後葉のものであると思われる。68・72は染付碗である。外面を3単位に区画し、区画内に紅葉の葉を描いている。内面見込みには「寿」の字が記されている。双方共に17c後半から18c初頭であろうと思われる。76は斜格子に菊花文が描かれた筒型碗である。胸部のみの出土であるが、やや薄手で垂直に立ち上がる碗であると思われる。78は染付の輪花碗である。外面には矢羽状の区画の間に井桁様の文様が施されており、口縁部の一部を窪ませて輪花状に成形している。全面被熱しており、やや白色化している。80・81はやや薄手の蕎麦猪口である。双方共に底径がほぼ同じで外面に同様の風景文が描かれているため同製品であると考えられる。18c中葉～後葉に比定されるであろう。106は口径18cmの大皿である。内外面ともに具須染付が施されており、外面は唐草文、内面は花唐草文が描かれている。高台が低く緩やかに立ち上がる皿で口縁部には口鉗が施されている。18c中葉の皿であろうと思われる。110は肥前産の段皿である。内面には梅花文、外面には唐草文が描かれている。口縁部付近で若干の段がつき、口縁は輪花状に成形されている。また、口縁部に口鉗がみられる。159は人型の水滴である。欠片での出土であるため詳細は判断しがたいが、右手に飼を抱えた恵比寿様であると思われる。外面は透明釉を施釉した後金や赤で上絵付けされているが、絵付けのほとんどは剥落してしまっており詳細は分からぬ。また、右手の肩部には穿孔がみられる。

#### イ)陶器

陶器は64点を図化した。産地をみると45点が瀬戸美濃産、10点が京・信楽産、6点が肥前産であり、瀬戸美濃産が70%を占めている。瀬戸美濃産陶器には多数の器種が見受けられるが、中でも碗類、皿類、鉢、瓶類などの食膳具や兼燭、擂鉢、灯明受け皿などの生活雑器が多く出土している。また、その他の器種でも水滴、仏花瓶、仏飯具、神酒徳利など恒常に使用するものが多くみられるため、瀬戸美濃産陶器はより身近に使用されていたと考えられる。京・信楽産陶器はほぼ碗で構成されている。碗の多くは灰釉に上絵付けを施されたものであり、京焼と考えられる。肥前産もやはり碗、皿、雪平鍋などと食膳具が多く見受けられるが、向付が1点出土している事も特徴の一つとされるであろう。

34は鉄絵皿である。器高が低くやや厚みのある皿で、中央には鉄釉で樹木のような絵付けが施されている。見込みには3箇所トチ痕がみられる。18c初頭～中葉の瀬戸美濃産であろう。44は唐津向付の一部と思われる。中央付近から若干段を持ち、外側に大きく聞く形状であり、口縁部は恐らく輪花状に成形されていると思われる。内面は鉄釉で絵付けが施されており、やや薄い長石釉が施釉されている。16c末～17c初頭のものであろう。47は肥前産の大皿である。全面が被熱してしまっているため釉調が判別し難いが、具須と鉄釉で絵付けされた後透明釉が施釉されていると思われる。17c後半～18c前葉のものであろう。48の蓋は無釉陶器の蓋である。外面は同心円状にハケ目がみられ、内面には窯印と思われる印刻がみられる。内面には一面にベンガラが付着している。ベンガラは器面に塗布してあるわけではなく付着している程度であるので、おそらくベンガラ容器として使用されていたものであると思われる。51は灰釉・鉄釉掛け分けの仏花瓶である。扁平な脚からふくらみを帯びた胴部の上端に耳が付き、口縁が大きく広がる形状であり、上半は灰釉下半は鉄釉が施釉されている。瀬戸美濃産18c中葉のものであろうと思われる。

82は京焼の丸碗である。全体的に丸みを帯びた形状をしており、灰釉が施釉されている。外面には銅線釉で唐草様の模様が上絵付けされている。18c前半代であろうと思われる。83は厚みのある丸碗である。外面は具須と鉄釉で樹木が絵付けされている。肥前産であると思われるが帰属時期は不明である。85・89は共に京焼の碗である。85は口縁端部が外側に反る丸碗、89は胴部が垂直に立ち上がる筒型碗である。双方共に鉄絵付けされており、同様の松文が描かれている。共に透明釉施釉であるが被熱して若干白色化している。18c中ごろに帰属するであろう。91の皿は摺絵皿である。全面が被熱しているため詳細がつかみにくいか型紙摺りで桜花が描かれていると考えられる。17c後半～18c前半の肥前産であろう。92は底部の一部のみの出土であるが、恐らく碗であると思われる。外面には灰釉が施釉されており、高台には錯が塗布されている。底面高台内には墨書きがみられる。何らかの文字であると思われるが、破片のみの出土であるため全容は不明である。120から123は灯明受け皿である。123は受けが低く、それ以外は受けの高い皿で、121が鉄釉施釉である以外は総じて灰釉が施釉されている。また、122の受け皿は油口が穿孔により設けられた。140の鉢は京焼であると思われる。やや低い高台から丸みを帯びて立ち上がり、外面を輪花状に成形した鉢である。胴部中央には鉄釉で花卉文が絵付けされている。18c末に帰属するであろう。154・155は陶胎染付の仏具である。155の方が口径がやや大きいが双方共に斜格子に菊花文が描かれているため同製品であると考えられる。18c後半に帰属するであろう。160は総織部の水滴であると思われる。上部の1/4程度の破片であるため詳細は不明であるが、型押し成形で菊花弁様の切り込みの上部に葉が表現されている。穿孔は上部外側よりに空けられており、中央部にも穿孔の一部と思われる箇所がみられる。

#### ウ)土器

土器は6点出土した。器種ごとの内訳は皿3点・焙烙鍋2点・火鉢1点である。

125・126の皿にはススが付着しているため、灯明皿としての使用が推定される。124はカワラケであると思われる。器高は低く、底面には回転糸切り痕がみられる。口径は16.8cmと広く、スス等の痕跡はみられないため灯明皿としてではなく、地鎮や抱衣皿など他の用途が想定できるであろう。147は口径13.8cmとやや小ぶりの焙烙鍋である。内外面ともに丁寧なミガキがかけられていた。143は一部のみの出土であるため詳細は図りかねるが、恐らく火鉢の口縁部であると考えられる。外面はほぼ直に立ち上がっており、「田」と思われる刻印がみられた。器面はナブ調整の後外面のみミガキがかけられている。

#### エ)土製品

5点の土製品が出土している。総じて輪の羽口であった。大きさはおおよそ同じであると思われ、口径は約6～8cmの範囲でまとまっている。中でも58は胴部外面に鉄滓が付着していた。また、49は外面に被熱痕が認められた。

### 第III検出面

第III検出面からは167点の遺物が出土している。種別ごとの内訳をみると、磁器19点(11.3%)、陶器91点(54.4%)、土器52点(31.1%)、瓦2点(1.1%)、土製品3点(1.7%)であった。磁器が若干出土しているがやはり陶器の割合が多く、実に半数以上が陶器であった。また、これら陶器の中に2点のみ瓦質陶器がみられた。土器は陶器に次いで出土量が多く、全体の約30%が土器である。土器のほとんどは皿であり、スヌが付着しているものが多いため、灯明皿としての用途が示唆される。土製品は3点のみ出土した。

器種別の様相では碗26%、皿15.5%、鉢16%とやはり食膳器が多数出土している。鉢類は鉢と擂鉢がほぼ半数ずつ出土している。擂鉢はほぼ陶器であったが1点のみ土製の擂鉢が出土している。また、その出土数こそ少ないが、内耳鍋、焙烙鍋など多種多様な器種がみられることも特徴の一つといえよう。その他特殊品として陶器製のキセルや面模、土製の鈴、茶器とされるものなども出土している。特に茶器においては、調査地が町屋であるとされている場所であることを踏まえると、注目すべき特徴であると言えよう。

産地別では瀬戸美濃産79点(47.3%)、肥前産24点(14.4%)、京・信楽産2点(1.2%)、常滑産1点(0.5%)、中国産3点(1.8%)、在地産47点(28.1%)、産地不明品11点(6.6%)と瀬戸美濃産が約半数を占めている。瀬戸美濃産は全てが陶器であり磁器はみられない。反対に肥前産は陶器8点、磁器15点と磁器が多い。これは当該期には瀬戸美濃地方における磁器生産が行われていないことに起因すると思われ、陶器は瀬戸美濃産、磁器は肥前産が占めるという流通の様相が見受けられる。

出土遺物からおおよそ17c 中葉～18c 前葉に帰属すると思われる。

#### A) 磁器

18点の磁器が出土している。産地別にみると、3点のみ中国産磁器が出土している他は全て肥前産磁器である。器種は碗8点、皿6点、鉢1点、向付1点、小杯1点、猪口1点とほとんどが染付の碗・皿であったが、1点のみ波佐見産の向付が出土している。

碗は8点出土している。181は筒型碗であるが、それ以外のものは丸碗となる。全てに染付がみられ、226は山水文、235・236・265は草花文が描かれていた。263には漆継ぎ痕がみられる。外面には草花文の中に屏風が描かれている。181は筒型碗である。高台端部及び底面には砂が付着していた。

213は猪口である。底部のみの出土であるが見込みには菊花、底面には「福」の銘がみられる。211は小杯である。灰白色の胎土に透明釉がかけられており、全面が若干被熱している。

皿は6点みられた。内177・204・227・279の4点が肥前産、169・217の2点が中国産である。279は染付皿の胴部である。見込みには草花文と思われる文様が描かれている。177は段皿である。見込みには雲文が描かれ、その下には菊花文が描かれている。204・227は同形の皿である。ロクロで成形された後内面口縁部に型打ちで捻花状の模様が入れられている。227はほぼ完形で出土しており、見込みには染付で山水文に鳥が描かれている。双方とも17c 中葉の伊万里製品であろう。204は口縁部のみの出土である。断面の一部には漆継ぎ痕がみられる。

169は中国漳州窯産の皿である。外面は雲文で充填され、見込みには雲間に龍が描かれている。217も同じく漳州窯産の皿である。17c 前葉のものであろう。169に比べてやや小ぶりな皿であり、見込みには鳳凰が描かれている。底面には銘が描かれており、恐らく「長」であると思われるが一部しかみられず詳細は不明である。17c 中葉のものと思われる。

鉢は237の1点のみ出土している。高台の低い鉢であり、見込みには草花文が描かれている。17c 中葉に帰属するであろう。241は波佐見産青磁の向付である。型打ち成形で見込みには花文と思われる印刻がみられる。口縁部には口錫が施されている。17c 中頃のものであろうと思われる。

## イ) 陶器

94点の陶器が出土している。内2点は瓦質陶器である。陶器は瀬戸美濃産が最も多く、79点(84.0%)出土している。次いで肥前産9点、京・信楽産2点、常滑産1点が出土している。数量としては瀬戸美濃産が突出して多く、ほぼ瀬戸美濃産によって占められているといつてもよいだろう。

器種は実に多種多様なものが出土しており、碗、小杯、皿、灯明受け皿、鉢、擂鉢、捏鉢、香炉、壺類、四耳臺、神酒器、急須、鬱型、キセル、向付、茶入、天目茶碗などがみられる。中でも食膳具である碗皿は多くみられ、擂鉢も若干多く見受けられる。また、向付・天目茶碗・茶入等の茶器がみられることも特徴であるといえよう。

192は錆釉の碗である。口縁部の一部のみ残存しており、口縁端部にはキザミがみられた。このキザミが意図的に付けられたかは不明である。17c中葉から後葉に帰属するであろう。200は器高約8cmとやや大型の碗である。内外ともに黄緑色の釉がかけられており、胎土はやや褐色である。一部に漆継ぎ痕がみられる。産地は特定しがたいが恐らく唐津産であると思われる。274は唐津の碗である。錆釉の碗の外面には白泥が刷毛塗りされていた。17cのものと思われる。276は京焼風肥前陶器の碗である。外面には鉄絵で山水流水文が描かれ、鉄絵付け後に灰釉が施釉されている。底面中央には刻印がみられるが文字等の詳細は判別できなかった。168・180は京・信楽系の碗である。168の碗には鉄釉・銅緑釉により草が描かれていた。施釉は透明釉であり鉄絵付け後に施釉されている。18c中葉のものであろう。180は錆釉の湯呑碗である。錆釉施釉後に赤・白の顔料で梅が上絵付けされていた。一部には焼き繼ぎ痕がみられ、底面には何らかの墨書きがみられる。249は志野の皿である。器高は低く口縁部がやや外反する皿で、全面に長石釉がかけられていた。底面には墨書きがみられた。墨書きは一部残存しているのみではあるが、恐らく「春」の字であろうと思われる。248も志野の皿である。やや深めの皿であり全面被熱していた。口縁端部にはタールが付着していたため灯明皿として使われていた可能性が考えられる。283・284は志野の菊皿である。双方とも破片での出土であるが、型打ちによる成形後へラ状の工具により切れ込みが入れられている。313・314は美濃産の笠原鉢であると思われる。双方ともに灰釉施釉後に銅緑釉を流し掛けしており、313の一部には漆継ぎ痕がみられた。これらは特徴が酷似している為同一個体である可能性も考えられる。また、1点のみ特殊品として織部の陶製キセルの雁首(327)が出土している。火皿のみの出土であるが、鉄釉により絵付けされた後透明釉がかけられている。17c前葉のものであろうと思われる。

## 茶器

第III検出面出土の陶器の中には茶器として使用されたものとして天目茶碗2点(190・191)、茶入2点(186・326)、向付3点(173・310・311)、沓茶碗1点(207)がみられた。天目茶碗はともに瀬戸美濃産の鉄釉天目茶碗である。口縁部やや下で屈曲し、ほぼ直に立ち上がる。口縁部はやや外反していた。16c末～17c初頭のものであろう。186・326は茶入である。326は胴部しか残存していないが恐らく双方とも肩衝茶入であると思われる。ともに鉄釉の茶入であり、17c中葉の瀬戸美濃産であると思われる。向付は173・310が唐津、311が織部であった。唐津向付はともに鉄絵付け後長石釉がかけられている。16c後半から17cのものであろう。311はロクロによる成形の後口縁部のみ押圧成形されていた。器面は灰釉施釉後銅緑釉が流し掛けされており、一部に鉄絵付けが施されている。207は唐津の沓茶碗である。小片のみの出土であるため詳細は定かではないが、ケズリの施された胴部に灰釉がかけられている。16c末～17c初頭に帰属するであろう。これらの茶器は出土量としては決して多くはないが、調査地が商人地であることを考慮すると一考すべき特徴であろうと思われる。

## ウ) 土器

土器は50点出土している。産地はほぼ在地産であると思われるが、不明とせざるを得ないものも多い。

器種は皿が38点、擂鉢1点、鍋1点、内耳鍋7点、焰烙鍋1点、蓋1点、不明品1点である。他の検出面同様皿が圧倒的多数を占めるが、内耳鍋などの鍋類が9点出土していることは特徴的であるといえる。皿は31点にススの付着が確認できるため、ほとんどが灯明皿として使用されていると思われるが、内3点には底面に墨書きられるなど灯明皿以外の用途も想定されるところである。

171・251・256は墨書のある皿である。総じて底面に墨書きがみられ、171・251は「〇」の墨書きが書かれていた。171には内外面ともにススの付着がみられるため灯明皿としての用途も想定できるであろう。256は底面にススが多量に付着しており文字は判別できなかった。皿は口径に対して器高がやや高く、他と違って精製された土で焼成されている。

#### エ)土製品

3点出土している。2点は土鉢、1点は面模であると考えられる。

土鉢は185・198である。185は径3cm程の球状を呈しており、下端には直線状の切れ込みが確認できる。上面には少々長めのつまみが捻り出されており、切れ込みとは直交する方向で穿孔がなされている。帰属時期については不明である。

328は半分程度欠損していると考えられるため詳細は不明であるが、土製の小皿のような製品の見込み部分に人面乃至は鬼の顔のような模様が凸型に施されている。皿の口縁にあたる部分はある程度の角度を持って平坦に整えられている。このような形状から何らかの型であると推定し、泥面を作成する際に使用する面模であると判断した。このような面模は東京都東大構内遺跡工学部14号館地点等でも出土している。

#### オ)瓦

合計2点の瓦が出土している。482は丸瓦、483は軒丸瓦である。483は被熱しており、多量のススが付着していた。瓦当面には五七桐紋がみられる。これは豊臣秀吉が特定の家臣に使用を許したもので、松本城においては石川氏が使用を許されている。そのため石川氏が在城していた天正18(1590)年～慶長18(1612)年のものであると考えられる。

### 第IV検出面

第IV検出面では36点図化することができた。種別ごとにみると磁器4点(11.1%)、陶器28点(77.8%)、土器4点(11.1%)とほぼ陶器で構成されていることが分かる。

器種構成は皿が全体の63.9%を占めており、突出して皿が多く出土している事がわかる。そのような中、茶器として使用される天目茶碗と向付が合わせて4点(11.1%)出土している。遺構に伴わないのであるため詳細は不明であると言わざるを得ないが、注目すべきことである。

産地はほぼ瀬戸美濃産で占められており、瀬戸美濃産22点(61.1%)、肥前産9点(25%)である。これら以外のものは在地産か産地不明品である。

出土遺物の様相から17c前葉～中葉に帰属すると考えられる。

#### ア)磁器

磁器は4点図化した。3点が碗、残る1点が鉢であり、ほぼ碗で占められるといえる。これらの磁器は全て肥前産である。331は染付碗である。やや丸みを帯びており口縁付近で若干外反している。外面には染付で草花文が描かれている。

#### イ)陶器

陶器は28点出土している。内1点は瓦質陶器である。産地はほぼ全てが瀬戸美濃産であり、5点のみ肥前産が見受けられる。特に皿は全てが瀬戸美濃産であり、中でも志野皿が多数を占めている。肥前産陶器は天目茶碗、向付、灯明皿に限られており、全て唐津であると思われる。

341・344～349・351は志野の皿である。全て長石釉がかけられており、法量もほぼ一定している。一部には被熟したものや内面にススが付着したものがみられるため、灯明皿に転用された可能性も考えられる。總じて16c末～17c中葉のものであろう。356は総織部の皿である。口縁部には同心円状の沈線が入れられ、口縁端部は切込みによって波状に成形されている。恐らく17c初頭に帰属するであろう。354・355は恐らく同一個体の灯明皿である。双方とも暗灰色の胎土にややすくすんだ鉄釉がかけられている。355の内面には灯芯を固定するために中央に切れ込みを持つ突帯が付けられている。333・334は共に天目茶碗である。特に334は歪みの大きい天目茶碗である。腰部で緩やかに折れ、口縁付近で屈曲しながら立ち上がる。施釉は鉄釉であり、胎土は暗灰色を呈している。恐らく唐津であろうが、初山産である可能性も考えられる。

#### ウ)土器

土器は4点のみ図化した。3点が皿、1点が器種不明品である。皿は總じて内外面にススが付着しており、灯明皿としての用途が想定できる。364は器種不明品である。その形状から火鉢等の脚部である可能性が高いと思われるが、小破片のみの出土であり断定はできない。帰属時期等も不明である。

### 第V検出面

第V検出面では45点の土器を図化した。種別は磁器2点(4.4%)、陶器23点(51.1%)、土器18点(40%)、瓦1点(2.2%)、土製品1点(2.2%)である。III・IV検と同様にして陶器が多く出土しているが、並んで土器が多く出土しているのは特徴的である。土器の多くは皿であるが、内耳鍋も多数出土しており、皿11点(61.1%)、内耳鍋7点(38.9%)であった。特に内耳鍋は一部集中して出土した箇所も存在するため注目すべきであろう。

産地は瀬戸美濃産17点(37.8%)、肥前産7点(15.6%)、中国産1点(2.2%)と瀬戸美濃産が若干多く出土している。特に皿・碗などの食器具は瀬戸美濃産が多く、向付などの茶器は肥前産が多いという傾向がみられ、生活雑器は瀬戸美濃産が多く流通しているという様相が窺える。

出土遺物から16c末～17c前葉であると思われる。

#### ア)磁器

磁器は2点のみの出土である。破片のみの出土であるため時期産地とともに特定しがたいが、恐らく1点は肥前産、1点は中国産(405)であると思われる。405は壺類の底部である。白色の胎土で成形されており、外面にはやや長石釉の混じった透明釉がかけられている。調部及び高台の付け根には青色の横線がみられるが、非常に不明瞭であり、染付ではなく釉が厚くたまつたものである可能性も考えられる。

#### イ)陶器

陶器は23点図化した。産地はやはり瀬戸美濃産が多く、17点(73.9%)が瀬戸美濃産、6点(26.1%)が肥前産である。器種は皿が多く9点が皿、5点が碗である。他には鉢1点、壺類2点、天目茶碗2点、向付3点が出土している。

373は唐津の碗である。全体的に被熟しており、外面にはススが付着している。暗灰褐色の胎土で成形され、施釉は錫釉である。16c後半のものであろうと思われる。372はいわゆる瀬戸黒である。調部からあまり外反せず立ち上がる碗であり、漆黒に近い黒色を呈している。16c中葉から後葉に比定されるであろう。384は灰釉折縁菊皿である。口径約12cm、器高約2cmを計る皿であり、内面は丸ノミ彫がみられる。調部付近で屈折し、口縁部がわずかに立ち上がる。施釉はやや白濁した灰釉で、内面にはススが付着していた。16c後半から17c初頭の瀬戸美濃産であると思われる。368は錫釉・灰釉二度掛けの皿である。高台が低く器高も低めの皿であり、全面錫釉を施釉したのち中心から放射状に灰釉を塗り掛けしている。内外面共に口縁部付近にタール状のススが付着しているため灯明皿としての用途が想定できる。370は耳付の壺である。やや丸みを帯びて立ち上がり口縁部付近で屈曲する壺で、調部には貼り付けで把手が付けられている。内外面

共に灰釉を施釉したのち鉄釉が掛けられており、内面のくびれ部は釉が拭き取られている。また、把手部先端には砂粒が軋着していた。

#### ウ)土器

土器は18点出土している。皿が11点、内耳鍋が7点であり皿が多数を占めている。皿はほぼ全てにススが付着しており、灯明皿としての用途が想定される。内耳鍋は総じて器高が高く内面に工具ナデ、外面に縱方向の工具ナデにより成形している。

#### 調査区外・廃土

調査の中で調査区外の壁面や重機掘削中の廃土などからも多数の遺物が出土した。いずれも出土位置が特定できないが、調査地内からの出土品であることは明確であるため参考資料として67点の遺物を掲載した。

417は志野の碗であると思われる。底部は残されていなかったが、丸みを帯びた碗であることが分かる。内外面ともに長石釉が施釉されており、全面に被熟度が認められる。口縁部と思われる部分は水平に削られたように破損しており、摩滅も認められる。この破損が意図的に行われたものであるかは不明であるが、口縁部破損の後に二次利用されている事は明白である。時期は18c中葉であると思われる。420は鉄釉の天目茶碗である。高台のほとんどが欠損てしまっているが、割と緩やかに立ち上がり口縁部付近でなだらかに折れる形状である。胴の一部には漆継ぎ痕がみられる。その形状から17c前葉～中葉であると考えられる。415は碗の底部であると思われる。高台は高く、外面にヘラケズリ痕がみられる。内面見込みには呉須で十字の花文が描かれている。肥前産18c代の碗であろうと思われる。419は陶器焼綺めの筒型碗であると思われる。胎土は暗灰色で非常に硬く締まっており、内面は茶色に変色している。外面には染付で風景文と思われる模様が描かれている。恐らく肥前産で18c代のものであろう。459は唐津の茶入である。灰褐色の胎土にやや縁がかった灰釉がかけられている。恐らく17c代のものであろう。467は志野菊皿である。ロクロ成形の後内面を型打ち成形し、口縁部を菊弁状に削っている。全体長石釉が施釉されているが、若干被熟しており多少黒ずんでいる。479は脚付きの香炉である。胴部中央で折れる形状の香炉であり、脚は3単位付けられていたと考えられる。器面は鉄釉施釉の後うのふ釉がかけられている。18c末～19cに瀬戸美濃地方で焼かれたものであろう。480は内耳鍋の胴部である。やや外反しながら立ち上がり口縁付近で真っ直ぐ立ち上がる。内外面共にススが付着している。胴部口縁下には穿孔がみられるが、鍋という性質上使用中に穿孔されたとは考え難いので恐らく使用後に空けられたものであろうと思われる。472は土器皿である。器高2.8cm、口径10.5cmを測る皿で、内面に若干のスス付着がみられる。底面には墨書きがあり、「三」の字が書かれているように見える。460は灰釉天目茶碗である。底部は欠損てしまっているが深めの天目で、口縁部下から急に立ち上がる。瀬戸美濃産17c前葉のものであろう。

#### 東部トレーナー

調査区東部に設定した東部トレーナー内からも少數ではあるが遺物が出土している。その中で図化できるものを6点掲載した。414は紅猪口であると思われる。内面は透明釉が施釉されており、外面は無釉で蛸唐草文が彫られている。

第2表 出土土器・陶器器一覧表

番号	検出面	出土場所	性別	種類	主な寸法(φ)	形状	特徴	目次	説明	参考文献	資料番号	参考文献	番号		
口幅	底幅	高さ													
1	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (9.2)	口: 1/6	白	外腹面草文か?			丸付		肥前		
2	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (7.5)	口: 1/6	白	外腹面横帯に模様 内腹口縁四方彫			丸付	18c 中	肥前		
3	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (9.4)	口: 一部残	白	口縁部斜面 全面被熱			丸付	18c 第一四 26	肥戸美濃		
4	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (9.2)	口: 1/6	灰黒白	陶器表面 外腹文草文か?			丸付	18c 第一四 27	肥戸美濃		
5	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (2.9)	底: 1/4	灰	丸手柄 外腹斜入式焼火具による連続沈痕 内底、外腹口縁部に斜跡			丸付	18c 中	肥川大波		
6	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (0.8)	口: 1/4	乳白					18c 中	肥戸美濃		
7	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (11.4)	口: 1/12	灰灰	寺野織部			墨石跡	16c 後-17c 初	肥戸美濃		
8	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (4.8)	底: 2/3	灰灰	陶器身台 内底見込み草花文 全面被熱			丸付	18c 中	肥戸美濃		
9	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (9.4)	底: 1/6	黄白	高台部斜面口縁部斜面			丸付	17c 中	肥戸美濃		
10	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	灯明受皿 (9.5)	(4.0)	口: 1/8 底: 1/4	淡黄灰			灰輪	18c 後	肥戸美濃		
11	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	灯明受皿 (8.8)	(1.1)	口: 1/4	灰			乳白輪	18c 後	肥戸美濃?		
12	1 梁	検出面	【検-001】	磁器	青 (6.5)	口: 1/4	白	青釉上絞付け 天井網目紋 内底口縁部無地 天井部一側に触面あり			青轮	18c 中	肥戸美濃		
13	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (6.0)	底: 1/6	乳白					18c 後	肥戸美濃		
14	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (0.9)	口: 1/6	米白					灰輪	18c 中	肥戸美濃	
15	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	縦 (28.2)	口: 1/8	暗灰					灰輪	18c 第一四 28	肥戸美濃	
16	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (9.5)	口: 1/6	灰白	蓋台 鋼締部 内底口縁部、外底網目紋			附締輪	18c 第一四 29	肥戸美濃		
17	1 梁	検出面	【検-001】	土器	木林 (6.5)	底: 1/6	白					18c 後	肥戸美濃		
18	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (6.6)	底: 1/4	灰黄灰					灰輪	18c 中	肥戸美濃	
19	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (7.0)	底: 1/4	淡黄白					附締輪	18c 中	肥戸美濃	
20	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (11.0)	底: 1/6	灰	底部トランク底あり			铁輪	不明	肥戸美濃		
21	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (11.7)	底: 1/6	淡黄灰	底部トランク底あり			墨石跡	18c 後	肥戸美濃		
22	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (14.6)	底: 1/6	灰灰	底部トランク底あり			铁輪	18c 第一四 29	肥戸美濃		
23	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (2.8)	口: 1/2	底: 1/6	灰白	鉄輪付け 内底縁部ねじり巻形			附締輪	18c 第一四 30	肥戸美濃	
24	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (16.2)	底: 1/6	灰灰	鉄輪付け			附締輪	18c 第一四 31	肥戸美濃		
25	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (9.2)	口: 1/6	灰黄灰					18c 後	肥戸美濃		
26	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (10.2)	口: 1/8	淡黄白					附締輪	18c 中	肥戸美濃	
27	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	普皆 (2.6)	4.5	5.5	口: 1/4 底: 亮	乳白		灰輪	18c 後	肥戸美濃		
28	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	仏具 (6.1)	3.8	5.9	口: 1/3 底: ほぼ平	乳白	陶器身台 刻字子母に寄文	灰輪	18c 後	肥戸美濃		
29	1 梁	検出面	【検-001】	陶器	木林 (8.2)	口: 1/4	底: 1/6	淡黄白			附締輪	17c 中	肥戸美濃		
30	1 梁	土器	土1-0003	陶器	木林 (8.6)	口: 1/4	底: 1/6	灰灰	底部トランク底あり		丸付	18c 後	肥戸美濃		
31	1 梁	土器	土1-0002	陶器	木林 (8.5)	口: 1/4	底: 1/6	灰灰	底部トランク底あり		丸付	18c 後	肥戸美濃		
32	1 梁	土器	土1-0001	土器品	木の口 (6.6)	6.6	6.6	埋蔵-二重			附締輪	18c 後	肥戸美濃		
33	1 梁	土器	土4-0006	陶器	木の口 (9.0)	3.4	5.1	口: 1/6 底: 1/3	灰灰	陶器身台 内底斜面丸み 基台縁部スズ付	丸付	18c 後	肥戸美濃		
34	1 梁	土器	土4-0006	陶器	木の口 (11.5)	4.7	3.2	口: 1/6 底: 1/6	乳白	陶器身台 内底見込みトランク底あり	附締輪	18c 第一四 32	肥戸美濃		
35	1 梁	土器	土4-0006	陶器	木の口 (4.6)	3.6	4.5	口: 1/6 底: 1/6	白	全周被熱している	不規	18c 第一四 33	肥戸美濃		
36	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (9.1)	口: 1/2	白	底付輪、斜縁子地に寄文、内底口縁部斜面			丸付	18c 中	肥戸美濃		
37	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (6.1)	1/4	1/4	底付輪、斜縁子地に寄文			丸付	18c 中	肥戸美濃		
38	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (5.2)	1/2	1/2	底付輪、斜縁子地に寄文			丸付	18c 中	肥戸美濃		
39	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (21.1)	13.2	3.0	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み草花文-寄文、口縁 黒斑-84と四一か?	丸付	18c 第一四 34	肥戸美濃		
40	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (14.4)	9.9	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 35	肥戸美濃		
41	1 梁	土器	土5-0114	陶器	木の口 (14.4)	9.7	1/2	口: 1/6 底: 1/3	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 36	肥戸美濃		
42	1 梁	土器	土5-0115	磁器	神押町 (7.5)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文、外腹口縁部斜面	丸付	18c 第一四 37	肥戸美濃		
43	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (16.8)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 38	肥戸美濃		
44	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (16.8)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 39	肥戸美濃		
45	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (5.9)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 40	肥戸美濃		
46	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (6.8)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 41	肥戸美濃		
47	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (12.3)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 42	肥戸美濃		
48	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (6.0)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 43	肥戸美濃		
49	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (6.9)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 44	肥戸美濃		
50	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (6.9)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 45	肥戸美濃		
51	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (16.8)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 46	肥戸美濃		
52	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (8.6)	1/2	1/2	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 47	肥戸美濃		
53	1 梁	土器	土7-0115	磁器	神押町 (9.4)	14.6	14.6	口: 1/6 底: 1/6	白	外底被熱、内底見込み山水文	丸付	18c 第一四 48	肥戸美濃		

番号	種出	出土地点	年	器形	表面	寸法(cm)	底質	底質の特徴	断面・底面	断面・底面の特徴	地質	地質年代	地質	
横幅	縦幅	厚さ	横幅	縦幅	厚さ	横幅	縦幅	厚さ	横幅	縦幅	厚さ	横幅	縦幅	地質
52	日焼	P20-007	磁器	馬	(4.0)	底: 1/3	灰白	内面見込み五点火文 全面被熱	束付	16 c 前	肥前			
53	日焼	F36-139	Pm-015	陶器	瓶	3.2	高台: 1/6 底: 黒	黄灰	赤鉄、鈷鉄による部分着色不明	束付	16 c 中	肥前		
54	日焼	P42-017	磁器	皿か?			一型板	白	内面見込み火文	束付	16 c	肥前		
55	日焼	集石1-001	磁器	瓶	(5.7)	口: 1/3	白	糊付継 有田産水文	束付	16 c 初	肥前			
56	日焼	集石1-001	陶器	碗			糊	内面見込みトチノケ文あり	束付	16 c 初	肥前			
57	日焼	集石1-001	磁器	瓶	(9.4) (4.9)	2.0	口: 1/8	白	糊付継り コハルト長颈 口瓶	束付	16 c 中-1	肥前		
58	日焼	集石1-009	上乳口	罐	8.0	(3.6)		糊物一長瓶	側付	16 c	不明			
59	日焼	石塚1-504	土製品	罐の羽口	7.2	(7.2)		糊物一長瓶	側付	16 c	不明			
60	日焼	西加古川 1-2	陶器	瓶			糊	一部糊	白	外曲調火文 一部被熱か?	束付	17 c 後-18 c	肥前	
61	日焼	西加古川 1-2	陶器	瓶	(10.10)		口: 1/3	白	外面見込み火文 内面見込み輪火文	束付	18 c 後	肥前		
62	日焼	西加古川 1-2	陶器	瓶	(4.4)		口: 1/6 握み: 1/4	白	火井付連合火文	束付	18 c	肥前		
63	日焼	西加古川 1-2	陶器	瓶			糊	黄灰	糊継続 靖西沈波、印伝式輪火文による連續模様 一部断離点欠損復原城	側付	18 c	撫民美濃		
64	日焼	日出田	日出田-014	更級	瓶	(11.1)	口: 1/6	白	外所用家文 内面口部近因方縁	束付	18 c 後-19 c	肥前		
65	日焼	日出田	日出田-014	更級	瓶	(6.1)	口: 1/12	白	外所用家文	束付	18 c 後	肥前		
66	日焼	日出田	日出田-014	更級	瓶	(10.6)	口: 1/8	台	外曲調火文	束付	18 c 後-19 c	肥前		
67	日焼	日出田	日出田-020	更級	瓶	(6.0)	口: 1/10	台	外曲調火文	束付	18 c 後	肥前		
68	日焼	日出田	日出田-020	更級	瓶	(6.4)	口: 1/12	灰白	外曲調火文 内面火文か?	束付	17 c 後-18 c	肥前		
69	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	(6.0)	口: 1/12	灰白	外曲調火文 全面被熱	束付	18 c 後	肥前		
70	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(7.6)	口: 1/6	灰白	外曲調火文 全面被熱	束付	17 c 後	肥前		
71	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(3.8)	底: 1/4	白	外曲調火文 内面見込みに「書」	束付	17 c 後-18 c	肥前		
72	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(9.8) 3.1	口: 1/7 底: 1/3	灰白	外曲調火文 内面見込みに「書」	束付	17 c 後-18 c	肥前		
73	日焼	日出田	日出田-012	更級	瓶	(6.3)	底: 1/4	白	西古窯遮蔽底造りきり 断面に深緑色痕あり	束付	18 c 後	肥前		
74	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	(4.1)	底: 1/3	白	内面見込み五点火文(コソンチャク形判別) 高台付被物あり 全面被熱	束付	18 c 後	肥前		
75	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(8.5)	口: 1/8	白	木炭焼付 断面に火花火文	束付	18 c	肥前		
76	日焼	日出田	日出田-012	更級	瓶	(7.3)	口: 1/6	白	糊型瓶 斜格子子地に火花火文	束付	18 c 中	肥前		
77	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	(4.1)	底: 1/6	白	外曲調火文? 深緑色痕あり	束付	18 c 中	肥前		
78	日焼	日出田	日出田-008	更級	瓶	(7.6)	口: 1/8	白	糊型瓶 外面失火区画、区画内升片縁の破缺 全面被熱	束付	18 c 中	肥前		
79	日焼	日出田	日出田-012	更級	瓶	(4.2)	底: 1/4	暗灰	糊型瓶	束付	18 c 中	肥前		
80	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(5.6) (4.8)	5.5 口: 1/8 底: 1/4	一部被	外曲調火文? 二段火と一部瓶足か?	束付	18 c 中-後	肥前		
81	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	4.9	底: 5/6	白	外曲調火文 灰段火と一部瓶足か?	束付	18 c 中-後	肥前		
82	日焼	日出田	日出田-009	更級	瓶	(9.0)	口: 1-部	淡灰灰	灰段 瓶付付近分離火文	束付	18 c 前半	京・信濃		
83	日焼	日出田	日出田-012	更級	瓶	(5.1)	口: 1/14	灰	糊付継合(真珠と鉛鉢) 長文	束付	18 c	京・信濃		
84	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	(3.6)	高台: 1/6 底: 1/3	糊型瓶	灰段 瓶付付近分離火文不明	束付	18 c 中	京・信濃		
85	日焼	日出田	日出田-017	更級	瓶	(10.6)	口: 1/12	灰白	家紋 圓窓型 瓶形、短文 一部被熱 石子被熱	束付	18 c 中	信濃		
86	日焼	日出田	日出田-008	更級	瓶	(6.0)	口: 1/3	白	陶軸付 瓶形 瓶形 短文 一部被熱	束付	18 c 中	信濃		
87	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	3.2	底: 空	白	灰段	束付	18 c 中	信濃		
88	日焼	日出田	日出田-004	更級	瓶	(9.5)	口: 1/4	黄灰	糊手牌 外面印伝式輪火文による連續模様 内面、外曲口縁部に敷熱	束付	18 c 中	信濃		
89	日焼	日出田	日出田-014	更級	瓶	(7.9)	口: 一型板	灰	糊手牌、環形火文、灰子被熱	束付	18 c 中	信濃		
90	日焼	日出田	日出田-006	更級	瓶	(3.8)	高台: 3/4 底: 空	淡灰灰	骨灰	束付	18 c 中	信濃		
91	日焼	津山市	津山市-006	陶器	瓶	(6.5)	底: 1/4	灰	糊焼 内面見込み火文底文 全面被熱	束付	18 c 中-18 c 初	肥前		
92	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(6.0)	口: 1/6	糊-一灰灰	糊底文? 灰被熱 各邊 並施剥落 内面も剥落している可能性あり	束付	18 c	肥前		
93	日焼	津山市	津山市-012	陶器	瓶	(13.4)	口: 1/6	白	外曲調火文 内面花火文	束付	18 c 初-18 c 初	肥前		
94	日焼	津山市	津山市-014	陶器	瓶	(6.2)	底: 1/4	灰白	内面見込み雲文	束付	17 c 初-18 c 初	肥前		
95	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(5.7)	底: 1/2	白	内面見込み火文 一部被熱 全面被熱 目物-1と同一個体か?	束付	18 c	肥前		
96	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(4.9)	底: 1/6	白	内面見込み火文 内面見込み底文? 全面被熱 目物-1と同一個体か?	束付	17 c 初	肥前		
97	日焼	津山市	津山市-017	陶器	瓶	(14.2) (8.6)	3.6 口: 1-部 底: 1/16	灰白	内面見込み火文?	束付	18 c 中	肥前		
98	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(9.1)	底: 1/10	灰白	被佐見山 ハリ文 瓶内見込み火文 瓶底「山」か?	束付	18 c 中-中	肥前		
99	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(9.7)	底: 1/4	白	外曲調火文? 瓶内見込み火文? 全面被熱 1段-7段と同一個体か?	束付	18 c 中	肥前		
100	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(9.8)	底: 1/6	白	土餘量 内面見込み火文? 全面被熱 1段-8段と同一個体か?	束付	18 c 中	肥前		
101	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(5.4)	底: 1/6	黄白	内面底文?	束付	18 c 初	肥前		
102	日焼	津山市	津山市-012	陶器	瓶	(7.6)	底: 1/10	黃白	内面底文?	束付	18 c 初	肥前		
103	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(6.6)	底: 1/5	白	内面見込み火文	束付	18 c	肥前		
104	日焼	津山市	津山市-014	陶器	瓶	(6.2)	底: 1/4	白	内面見込み火文	束付	18 c	肥前		
105	日焼	津山市	津山市-016	陶器	瓶	(7.9)	底: 1/4	白	瓶の目物前高 内面見込み山水文	束付	18 c 中-後	肥前		
106	日焼	津山市	津山市-014	陶器	瓶	(18.8) (10.3)	3.2 底: 1/10	白	外曲調火文 内面見込み山水文 山脚 土块5-4と同一個体か?	束付	18 c 中	肥前		
107	日焼	津山市	津山市-009	陶器	瓶	(12.6)	底: 1/6	白	内面見込み火文 内面見込み火文?	束付	17 c 中	肥前		

番号	地名	詳細地名	標識	位置(度)	高さ(m)	被写体	被写体	被写体		被写体		被写体	被写体	被写体	被写体
								北緯	東経	高さ(m)	北緯	東経	高さ(m)	北緯	東経
106	日向	日向市	日向	日向	(13.2)	高:	1/6	白	ハリヌキ	外海西岸斜面被写体を眺む 外海東側文 内海見込み黒文字	津付	17°c 中	肥前		
109	日向	日向市	日向	日向		白:	1/6	白色	黒打成形		津付	17°c 後~18°c 前	肥前		
110	日向	日向市	日向	日向		白:	1/6	白	外海東文 内海見込み黒文字か?口綴	津付	17°c	肥前			
111	日向	日向市	日向	日向		白:	1/6	洪灰	会津鉄塔	西岸斜面	西岸	18°c 中~後	肥前		
112	日向	日向市	日向	日向	12.0	白:	1/6	洪灰	会津鉄塔	西岸斜面	西岸	18°c 中~後	肥前		
113	日向	日向市	日向	日向	(12.0)	白:	1/6	洪灰	会津鉄塔 内海見込み黒文字か?	津付	18°c 初	肥前			
114	日向	日向市	日向	日向	(13.2)	白:	1/6	黄白	陶器焼物 内海見込み黒文字?	津付	18°c 初	肥前			
116	日向	日向市	日向	日向	(13.1)	白:	1/6	黄白	陶器焼物 内海見込み黒文字?	津付	19°c	肥前			
117	日向	日向市	日向	日向	(0.7)	白:	1/12	灰	内海見込み黒文字か?全吉武鉄	津付	19°c 初	肥前			
118	日向	日向市	日向	日向	(0.0)	白:	1/3	灰	内海見込み黒文字か?全吉武鉄	津付	19°c 初	肥前			
119	日向	日向市	日向	日向	9.2	白:	3.8	1.9	白:ほぼ光 灰:光	津付	19°c 初	肥前			
120	日向	日向市	日向	日向	(13.5)	白:	6.2	3.6	白:1/6 灰:1/2	津付	19°c 初	肥前			
121	日向	日向市	日向	日向	10.4	白:	6.3	2.0	白:光 灰:光	津付	19°c 初	肥前			
122	日向	日向市	日向	日向	(10.4)	白:	5.0	1.6	白:2/6 灰:3/5	津付	19°c 初	肥前			
123	日向	日向市	日向	日向	10.0	白:	1/2	洪灰	洪灰	津付	19°c 中	肥前			
124	日向	日向市	日向	日向	9.2	白:	3.6	1.9	白:7/6 灰:光	津付	19°c 中	肥前			
125	日向	日向市	日向	日向	(13.0)	白:	1.0	1.9	白:一館 店: 鮎	津付	19°c 中	肥前			
126	日向	日向市	日向	日向	(10.6)	白:	6.2	2.7	白:1/6 灰:1/4	津付	19°c 中	肥前			
127	日向	日向市	日向	日向	(9.6)	白:	6.5	2.7	白:2/6 灰:4/6	津付	19°c 中	肥前			
128	日向	日向市	日向	日向	(9.6)	白:	6.3	1/4	白	津付	19°c 中	肥前			
129	日向	日向市	日向	日向	(10.6)	白:	6.0	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
130	日向	日向市	日向	日向	(12.7)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
131	日向	日向市	日向	日向	(16.1)	白:	1/10	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
132	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
133	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
134	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
135	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
136	日向	日向市	日向	日向	(9.3)	白:	6.3	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
137	日向	日向市	日向	日向	(7.9)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
138	日向	日向市	日向	日向	(7.9)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
139	日向	日向市	日向	日向	(7.9)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
140	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
141	日向	日向市	日向	日向	(6.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
142	日向	日向市	日向	日向	(38.2)	白:	11.0	13.3	白:1/6 灰:1/2	津付	19°c 中	肥前			
143	日向	日向市	日向	日向	(32.2)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
144	日向	日向市	日向	日向	(20.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
145	日向	日向市	日向	日向	(6.6)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
146	日向	日向市	日向	日向	(3.6)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
147	日向	日向市	日向	日向	(13.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
148	日向	日向市	日向	日向	(3.4)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
149	日向	日向市	日向	日向	(4.4)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
150	日向	日向市	日向	日向	(4.4)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
151	日向	日向市	日向	日向	(4.4)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
152	日向	日向市	日向	日向	(2.2)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
153	日向	日向市	日向	日向	(2.2)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
154	日向	日向市	日向	日向	(2.4)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
155	日向	日向市	日向	日向	(6.6)	白:	5.2	5.4	白:1/6 灰:1/2	津付	19°c 中	肥前			
156	日向	日向市	日向	日向	(5.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
157	日向	日向市	日向	日向	4.4	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
158	日向	日向市	日向	日向	4.4	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
159	日向	日向市	日向	日向	5.7	白:	3.2	5.3	白:1/6 灰:1/2	津付	19°c 中	肥前			
160	日向	日向市	日向	日向	—	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
161	日向	日向市	日向	日向	—	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
162	日向	日向市	日向	日向	—	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中	肥前			
163	日向	日向市	日向	日向	(6.1)	(6.0)	(4.4)	白:	1/6 灰:1/2	津付	19°c 中~後	肥前			
164	日向	日向市	日向	日向	(12.0)	白:	1/6	1/6	白	津付	19°c 中~後	肥前			

番号	地出	出土品名	記號	種別	形態	測定値(cm)	測定部	測定部底面の状態	測定部、裏面、裏面の状態		測定部	測定年代	裏地		
									口径	底径					
165	■後	土2	土2-011	陶器	壺	φ(6.0)	3.0	6.2	口：1/8	底：3/4	灰白	縫隙後縫物底に剥け	縫隙・新 18 c 中	鹿戸美濃	
166	■後	土2	土2-013	陶器	壺	φ(5.2)			口：1/4		灰		縫隙・新 17 c 後-18 c 前	鹿戸美濃	
167	三後	土2	土2-016	陶器	壺	5.1			底：浅		灰白	全面被熱	縫隙・新 18 c 中	鹿戸美濃	
168	三後	土2	土2-017	陶器	壺	(11.0)			口：1/4		灰白	立脚、鉢脚、側脚部による縫付け	縫隙・新 18 c 中	京・仙毫	
169	三後	土2	土2-003	陶器	壺	6.1			口：1/2	高台：少	白	深腹度	内面見込み成文 外面墨文	縫隙・新 18 c 中	中国
170	三後	土2	土2-014	陶器	灯籠形状	φ(8.2)	(4.7)	3.0	口：1/6	底：1/6	灰白	立脚山？跡に「氣久ミツ」	縫隙・新 16 c 前-17 c 前±?	不明	
171	三後	土2	土2-015	土器	壺	φ(5.5)	5.9	2.3	口：1/4	底：浅	灰白	底部 ○」の墨書きあり 内外面スヌ付着	縫隙・新 17 c 後±?	鹿戸美濃	
172	三後	土2	土2-017	土器	壺	φ(6.0)			口：1/4		灰白	縫隙	縫隙・新 16 c 前-17 c 前±?	不明	
173	三後	土2-V層	土2-012	陶器	向付				口：一端挽		灰=黄白	動植物 内面花唐草か？一部被熱	吳石鈴 16 c 晩	肥前	
174	三後	土2	土2-001	陶器	横貫	(33.4)	(12.4)	13.1	口：1/3	底：一部	灰白	縫隙底に剥け 番縫引き取るか？	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
175	三後	土2	土2-008	陶器	横貫	(6.6)			口：1/3		灰白		縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
176	三後	土2	土2-006	陶器	盤型	11.7	3.7	3.6	口：一部	底：浅	黄灰	縫隙花文 内外面墨文物あり	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
177	三後	土2	土2-020	陶器	壺	(20.0)			口：1/10		白	内面底込み間に菊文	縫隙・新 18 c 前-中	肥前	
178	三後	土2	土2-020	陶器	壺	不明			口：一段挽		灰白	型打も成形か？縫前縫物 全周被熱	縫隙・新 18 c 前-中	不明	
179	三後	土2	土2-023	土器	壺	(10.2)	(6.0)	(2.2)	口：1/3	底：1/6	暗鷺	内面スヌ付着	縫隙・新 18 c 前-中	18 c	
180	三後	土2	土2-024	陶器	壺	(9.1)	(4.1)	(5.9)	口：1/3	底：1/2	灰	縫隙縫付け 向付け 一部被熱により剝離 継縫引きあり 底面墨書きあり	縫隙・新 18 c 前-中	反・肥東	
181	三後	土2	土2-032	陶器	壺	(6.8)			底：1/4		灰白	外削れ太か？底面凹凸有り	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
182	三後	土2	土2-031	陶器	壺	11.0			口：1/2		灰白	縫隙引き	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
183	三後	土2	土2-031	土器	壺	(13.0)	(9.2)	2.6	口：1/4	底：1/3	黑	内面スヌ付着 袋縫によると思	縫隙・新 18 c 前-中	18 c	
184	三後	土2	土2-029	土器	壺	9.2	5.6	2.0	口：浅	底：浅	暗鷺	内面スヌ付着	縫隙・新 18 c 前-中	18 c	
185	三後	土2	土2-028	土器	壺	3.0	3.1	3.5	口：浅		灰白	つまみあひねり出し痕跡	縫隙・新 18 c 前-中	18 c	
186	三後	土2	土2-031	土器	壺	4.0			底：2/3		灰白	縫隙	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
187	三後	土2	土2-034	陶器	膏面飾付筒	2.0			口：3/4		灰		内面スヌ付着 V縫歎-毛と同一か？	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
188	三後	土2	土2-034	陶器	膏面				解：一部		灰白			縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
189	三後	土2	土2-054	土器	壺	(3.9)			口：1/8		灰白			縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
190	三後	土2	土2-042	陶器	天井茶碗	(11.4)			口：1/6		灰白			縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
191	三後	土2	土2-041	陶器	天井茶碗	(10.7)		3.9	底：浅		灰白	外削れはきみ高さ有り	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
192	三後	土2	土2-042	陶器	碗	(11.0)			口：1/6		灰白	縫隙底にキザミアリ 全周被熱	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
193	三後	土2	土2-043	陶器	碗	(8.0)			口：1/6		灰白	外削れ	長脚脚付筒脚有りか？	長脚・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
194	三後	土2	土2-043	陶器	碗	(6.5)	(7.2)	(17.5)	口：1/3	底：1/3	灰白	底面一端脚付 内面底込み、底面にビントテン痕あり	長脚・新 17 c 初	鹿戸美濃	
195	三後	土2	土2-049	土器	壺	φ(6.6)	6.1	2.4	口：浅	底：浅	灰	内面スヌ付着	縫隙・新 18 c 前-中	18 c	
196	三後	土2	土2-059	土器	壺	(10.2)	(6.2)	5.3	口：1/3	底：1/2	灰	外周スヌ付着	縫隙・新 18 c 前-中	18 c ?	
197	三後	土2	土2-059	土器	壺	(9.2)	(6.0)	(2.1)	口：1/4	底：一部	暗鷺	縫隙	縫隙・新 18 c 前-中	18 c ?	
198	三後	土2	土2-059	土器	壺	(3.6)	(5.2)	(1.4)鷲			粉白			縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
199	三後	土2	土2-045	陶器	壺	(0.8)			口：1/4		灰白			縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃
200	三後	土2	土2-045	陶器	壺	(14.6)	5.3	8.3	口：1/8	底：浅	黑	底面脚か？内面見込みはさみ具底あり	縫隙・新 18 c 前-中	鹿戸美濃	
201	三後	土2	土2-044	陶器	外	(10.6)			口：1/6		灰	底付茶 内面底込み、両台脚部にはさみ具底あり	縫隙・新 18 c 後-17 c 細か？	肥前	
202	三後	土2	土2-047	土器	壺	(14.6)			口：1/8		黒灰	底面不規不整（骨・茎・茶・火消し要か？）解剖ロクロナゾ 口縫様ナゾか？	縫隙・新 18 c 後-17 c 細か？	鹿戸美濃	
203	三後	土2	土2-046	陶器	兔毫	2.5			2.6 細部：底		灰白	手のひら肉残		鹿戸美濃	
204	三後	土2	土2-049	陶器	壺	(13.2)			口：1/8		白	口打形成 形態が異なり	縫隙・新 17 c 中	肥前	
205	三後	土2	土2-049	陶器	壺	(12.3)			口：1/6		灰白	口野： 口縫頭部輪ハキか？	長脚・新 17 c 中	鹿戸美濃	
206	三後	土2	土2-049	陶器	壺	2.5			底：浅		灰白	火鉢の頭部輪か？	縫隙・新 18 c 中-17 c 中	鹿戸美濃	
207	三後	土2	土2-049	瓦質容器	火鉢か？	2.5			底：浅		灰白	火鉢の頭部輪	縫隙・新 18 c 中	鹿戸美濃	
208	三後	土2	土2-051	陶器	杯	(26.6)			口：1/12		灰白		火鉢後脚部	縫隙・新 17 c 中	肥前
209	三後	土2	土2-054	土器	壺	(12.4)	(7.2)	2.6	口：1/6	底：1/8	灰白	内面スヌ付着	縫隙・新 18 c 中-17 c 中	鹿戸美濃	
210	三後	土2	土2-052	土器	壺	(25.7)	(17.8)	5.1	口：1/10		暗鷺	外周スヌ付着	縫隙・新 18 c 中-17 c 中	鹿戸美濃	
211	三後	土2	土2-054	陶器	小杯	(6.2)			口：1/2		灰白	全面被熱か？	縫隙・新 18 c 中-17 c 中	肥前	
212	三後	土2	土2-053	陶器	碗	(11.2)			口：1/10		灰白	火鉢の頭部輪ハキか？	縫隙・新 17 c 中	鹿戸美濃	
213	三後	土2	土2-054	陶器	碗	(11.2)			口：1/8		灰白	火鉢の頭部輪	縫隙・新 17 c 中	鹿戸美濃	
214	三後	土2	土2-054	陶器	四耳壺	(6.4)			底：一部		灰	内面脇部に火薬付着（火薬後付着か？）火鉢後脚部	縫隙・新 18 c 中-後	鹿戸美濃	
215	三後	土2	土2-057	陶器	壺				解：一部		灰	火鉢後脚部	縫隙・新 17 c 後-18 c 初	鹿戸美濃	
216	三後	土2	土2-059	陶器	横貫	(35.2)			口：一端		灰白	縫隙引きあり	縫隙・新 17 c 中	鹿戸美濃	
217	三後	土2	土2-062	土器	堆積物	(7.5)			底：1/3		白	露袋陶瓶 内面底込み墨風、底面「良」純	縫隙・新 18 c 中	中国	
218	三後	土2	土2-061	陶器	解	(4.5)			底：1/4		白	全面被熱か？	縫隙・新 17 c 中	肥前	
219	三後	土2	土2-063	陶器	碗	(11.2)			口：1/10		灰白	志野焼絵紋付盖、輪文 内面見込みトチ痕あり	縫隙・新 17 c 中	鹿戸美濃	
220	三後	土2	土2-064	陶器	碗	(10.2)			口：1/12	底：1/6	暗鷺	内面スヌ付着	縫隙・新 17 c 後-1	鹿戸美濃	

番号	地名	施設	類別	用件	測量点	測量点の 名前・座標・標高	測量点の 高さ	測量点の 傾斜	測量点の 傾斜	測量・丈標・専門の特徴		施設	施設の 特徴	施設	
										内面	外側				
221	施設	土	43-061	土壌	黒 (11.4) (7.2)	2.6	口：1/6 底：1/4	底	底	内面スス付管			17c		
222	施設	土	43-061	瓦礫層	黒(11.4) (9.4)			底	底	外部瓦礫ケメリ調査				不明	
223	施設	土	47-063	樹根	黒 (9.4)			底	底				17c 初	廻戸山遺	
224	施設	土	47-063	樹根	木 (14.0)			底	底				17c 初	廻戸山遺	
225	施設	土	47-063	土壠	黒 (6.2)			口：1/6	底	内面スス付管 外面一語ス付管			17c ?		
226	施設	土	48-066	樹根	黒 (13.4)			口：1/6	底	内面山本文			17c	近鉄	
227	施設	土	48-066	樹根	黒 (13.7) (5.2)	2.2	口：1/6 底：1/2 底：底	口	底	内面見え山本文に旨 型打ち成形			17c	近鉄	
228	施設	土	48-066	樹根	黒 (11.0) (6.0)	18.5	口：1/6 底：1/2 底：底	底	底	内面瓦礫文か?			17c 中	肥前	
229	施設	土	50-160	樹根	黒 (6.4)			底	底	内面瓦礫文か?			17c 初	廻戸山遺	
230	施設	土	51-169	樹根	木 (6.5)			底	底	内面瓦礫文と樹根か?			17c 初	廻戸山遺	
231	施設	土	51-169	樹根	木 (11.2)			底	底	内面瓦礫文と樹根か?			17c 前	廻戸山遺	
232	施設	土	52-062	土壠	黒 (6.4)			底	底	内面瓦礫文と樹根か?			17c 前	廻戸山遺	
233	施設	土	55-072	樹根	木 (8.6)			底	底	内面瓦礫文と樹根か?			17c 中	肥前	
234	施設	土	56-074	樹根	木 (27.2)			口：1/2	底	内面瓦礫文と樹根か?			17c 中	肥前	
235	施設	土	56-075	樹根	木 (4.1)			底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
236	施設	土	56-075	樹根	木 (6.0)			底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
237	施設	土	56-075	樹根	木 (9.2)			底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
238	施設	土	56-075	樹根	木 (9.0)			口：1/6	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
239	施設	土	56-076	樹根	木 (10.7) (5.6)	1.9	口：1/6 底：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
240	施設	土	56-076	土壠	木 (4.7)			底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
241	施設	土	56-076	樹根	木 (6.2)	(5.9)	口：一部 底：1/4	口	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
242	施設	土	56-078	土壠	木 (31.0) (23.4)	(6.9)	口：一部 底：1/12	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
243	施設	土	56-078	土壠	木 (29.6)		口：1/4	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
244	施設	土	56-078	土壠	木 (24.5)		底	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
245	施設	P17	P17-000	樹根	木 (11.6) (6.0)	(2.2)	口：1/10 底：一部	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
246	施設	P27	P27-016	土壠	木 (6.4)		底	1/3	底	内面スス付管			17c 中	肥前	
247	施設	P43	P43-013	樹根	木 (10.0)		底	1/4	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
248	施設	T3	T3-002	樹根	木 (13.2) (7.0)	2.3	口：1/6 底：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
249	施設	T4	T4-005	樹根	木 (6.8) (3.8)	3.6	口：一部 底：1/8	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
250	施設	T4	T4-005	土壠	木 (30.4)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
251	施設	T7	T7-007	土壠	木 (31.0) (7.6)	2.6	口：1/4 底：1/3	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
252	施設	T7	T7-008	樹根	木 (34.6)		口：1/10	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
253	施設	T8	T8-010	樹根	木 (2.3)		底	1/2	白	内面見込み草花文			17c 中	肥前	
254	施設	T8	T8-010	樹根	木 (13.6)		口：1/10	底	底	内面瓦礫文			17c 中	肥前	
255	施設	T10	T10-012	樹根	木 (4.8)		底	ほぼ底	底	内面瓦礫文			17c 中	肥前	
256	施設	T10	T10-013	土壠	木 (10.9) (6.2)	3.5	口：1/6 底：1/10	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
257	施設	T11	T11-015	土壠	木 (16.0)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文			17c 中	肥前	
258	施設	T11	T11-015	土壠	木 (11.2)		口：1/9	底	底	内面瓦礫文			17c 中	肥前	
259	施設	T11	T11-019	土壠	木 (15.6)		口：1/10	底	底	内面瓦礫文			17c 中	肥前	
260	施設	T11	T11-019	樹根	木 (22.4)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
261	施設	T11	T11-017	土壠	木 (28.4)		底	1/4	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	在地	
262	施設	T13	T13-020	樹根	木 (8.7)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
263	施設	壁出井	壁出井-018	樹根	木 (13.2)		口：1/10	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
264	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (11.0)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
265	施設	壁出井	壁出井-014	樹根	木 (9.0)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
266	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (4.6)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
267	施設	壁出井	壁出井-018	樹根	木 (1.0)		口：1/10	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
268	施設	壁出井	壁出井-019	樹根	木 (10.0)		口：1/4	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
269	施設	壁出井	壁出井-019	樹根	木 (10.5)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
270	施設	壁出井	壁出井-014	樹根	木 (9.2)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
271	施設	壁出井	壁出井-014	樹根	木 (12.3)		口：1/6	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
272	施設	壁出井	壁出井-018	樹根	木 (11.4)		口：1/5	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
273	施設	壁出井	壁出井-018	樹根	木 (7.0) (3.6)	3.0	口：1/6 底：2/3	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
274	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (4.2)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
275	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (5.0)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
276	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (5.5)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
277	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (4.1)		底	1/2	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	
278	施設	壁出井	壁出井-015	樹根	木 (6.2)	(6.0)	底	底	底	内面瓦礫文と樹根			17c 中	肥前	

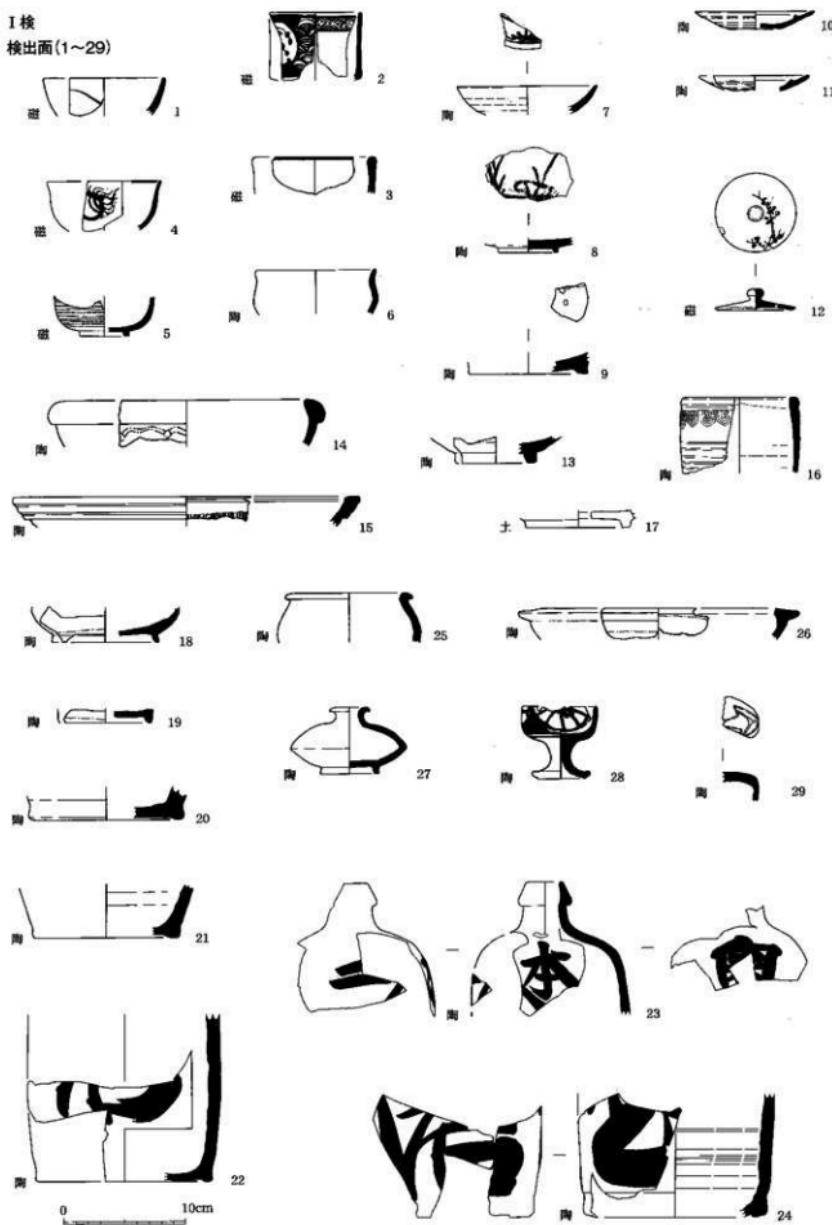
番号	検出箇所	出土地点	測定	測定	標高	法線(cm)	標高	測定	出土地点	測定	標高	法線(cm)	標高	柱法・太様・形状の特徴		地質	推定年代	墓地	
														柱高	底				
278	横	横山前	墓石-017	西	底	(18.6)	底	口:一部残	灰白	内面見込み草木か?							灰岩	17c-中-後	肥前
280	三横	横山前	墓石-007	西	底	(12.6)	(7.8)	口: 1/6 底: 1/6	灰白	北山野跡鉱山 内面見込み縦文							灰岩	17c-前-中	肥前
281	三横	横山前	墓石-026	西	底	(11.2)		口: 1/6	灰灰							灰岩	17c-前	肥前	
282	三横	横山前	墓石-020	西	底	(11.0)		口: 1/10	灰灰	野跡						灰岩	18c-前	肥前	
283	四横	横山前	墓石-012	西	底	(12.2)	(6.4)	口: 1/6 底: 1/6	灰灰	美里 壁打ち山城後口部郷部へラ吹上部によると切り込み 内外面被熱 外面トランシットあり						灰岩	17c-前	肥前	
284	四横	横山前	墓石-015	西	底			口: 一部残	灰灰	美里 壁打ち山城後口部郷部へラ吹上部によると切り込み						灰岩	17c-前	肥前	
285	五横	横山前	墓石-001	西	底	13.0	6.9	3.1 口: 6/6 底: 3/6	灰灰	印花瓦 内面見込み縦文						印花瓦 内面見込み縦文	16c-末-17c 初	肥前	
286	五横	横山前	墓石-013	西	底			口: 1/4	灰白	印花瓦 内面見込み縦文						印花瓦 内面見込み縦文	16c-末-17c 初	肥前	
287	三横	横山前	墓石-019	西	底	(13.8)		口: 1/4	灰灰	印花瓦						印花瓦	17c-前	肥前	
288	三横	横山前	墓石-014	西	底	(14.2)		口: 1/4	灰灰	外袖 二段階施墨書き取り						外袖 二段階施墨書き取り	16c-末-17c 初	肥前	
289	三横	横山前	墓石-018	西	底	(10.6)	(6.4)	2.4 口: 1/6 底: 1/6	灰灰	古野 全面被熱						古野 全面被熱	16c-末-17c 初	肥前	
290	三横	横山前	墓石-015	西	底			口: 一部残	白	灰灰 燃焼痕が分け						灰灰 燃焼痕が分け	18c	肥前 興味なし	
291	夏横	横山前	墓石-018	上野	底	(10.2)		口: 1/9	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c か?		
292	夏横	横山前	墓石-019	上野	底	(9.8)		口: 1/10	暗褐色	内外面スス付垂	灯明瓦					内外面スス付垂 灯明瓦	18c 中		
293	三横	横山前	墓石-017	上野	底	(9.8)		口: 1/8	暗褐色	内外面スス付垂	灯明瓦					内外面スス付垂 灯明瓦	18c 後		
294	三横	横山前	墓石-015	上野	底	(10.2)	(5.2)	(2.0) 口: 1/6 底: 1/6	白	底: 部残						内外面スス付垂	18c 中?		
295	三横	横山前	墓石-016	上野	底	(10.4)	(6.6)	(2.2) 口: 1/6 底: 1/6	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 中?		
296	三横	横山前	墓石-018	上野	底	9.7	8.4	9.2 口: 一部残 底: 1/6	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 中?		
297	夏横	横山前	墓石-017	上野	底	(9.4)	(5.4)	(2.1) 口: 1/6 底: 1/6	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 後		
298	夏横	横山前	墓石-008	上野	底	10.4	6.6	2.1 口: 3/6 底: 1/6	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 中?		
299	三横	横山前	墓石-018	上野	底	(10.2)	(6.2)	(5.5) 口: 1/6 底: 1/6	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 中?		
300	三横	横山前	墓石-014	上野	底	(10.8)	(7.1)	2.8 口: 1/6 底: 1/6	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	17c-末-18c 初		
301	三横	横山前	墓石-015	上野	底	(9.4)		口: 1/8	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c 後		
302	夏横	横山前	墓石-019	土器	底	(10.4)	(5.4)	(2.7) 口: 1/6 底: 1/4	灰白	内外面スス付垂	灯明瓦					内外面スス付垂 灯明瓦	18c 初		
303	夏横	横山前	墓石-018	土器	底	6.5	6.6	2.9 口: 1/3 底: 2/3	暗褐色	内外面スス付垂	灯明瓦					内外面スス付垂 灯明瓦	17c か?		
304	三横	横山前	墓石-018	土器	底	(11.1)	(6.8)	2.2 口: 一部残 底: 1/3	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c		
305	三横	横山前	墓石-017	土器	底	(10.8)	(6.8)	2.2 口: 1/4 底: 1/3	白	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c		
306	三横	横山前	墓石-018	土器	底	(6.6)		底: 1/6	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c か?		
307	三横	横山前	墓石-018	土器	底	(12.2)	(6.4)	2.8 口: 一部残 底: 1/4	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c		
308	三横	横山前	墓石-019	土器	底	(14.4)		口: 1/12	暗褐色	内外面スス付垂						内外面スス付垂	18c か?		
309	三横	横山前	墓石-005	土器	底	(15.0)	(9.0)	2.8 口: 1/5 底: 1/3	暗褐色	内外面スス付垂	灯明瓦か?						内外面スス付垂 灯明瓦か?	19c か?	
310	夏横	横山前	墓石-005	向井	底	(5.2)		底: 1/2	暗褐色	内外面スス付垂	灯明瓦						内外面スス付垂 灯明瓦	16c-末-17c 初	肥前
311	三横	横山前	墓石-014	向井	向井			口: 一部残	灰灰	鐵輪 口クロナラ複数根一括状正葉形 鋼輪被熱し掛け						鐵輪 口クロナラ複数根一括状正葉形 鋼輪被熱し掛け	17c 後	肥前 向井	
312	三横	横山前	墓石-015	向井	向井	(12.0)		口: 1/6	灰白	鐵輪曳舟 級の真右衛門か?						鐵輪 曳舟	18c	肥前 向井	
313	三横	横山前	墓石-016	向井	向井		(11.0)	底: 1/6	白	鐵輪曳舟 内外面被熱後鉛錠被熱し掛け 内面トランシットあり 底鉛錠被熱ぎ集あり 條-10と同一ですか?						鐵輪 曳舟鉛錠被熱後鉛錠被熱し掛け 條-10と同一ですか?	17c-末-18c 初	肥前 向井	
314	三横	横山前	墓石-017	向井	向井			口: 一部残	白	鐵輪 曳舟 内外面被熱後鉛錠被熱し掛け 條-10と同一ですか?						鐵輪 曳舟	17c-末-18c 初	肥前 向井	
315	三横	横山前	墓石-015	向井	向井	(10.0)		口: 1/12	白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	18c 後	肥前 向井	
316	三横	横山前	墓石-018	向井	向井	(27.0)		口: 一部残	白	鐵輪 曳舟 全面被熱						鐵輪 曳舟 全面被熱	18c 後	肥前 向井	
317	三横	横山前	墓石-014	向井	向井			口: 一部残	灰灰	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	18c	肥前 向井	
318	三横	横山前	墓石-016	向井	向井	(26.0)		口: 1/8	灰白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	18c	肥前 向井	
319	三横	横山前	墓石-017	向井	向井	(26.0)		口: 1/2	灰白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	18c-末-19c 初	肥前 向井	
320	三横	横山前	墓石-016	向井	向井	(11.0)		口: 1/10	灰灰	外筒うらの輪						外筒うらの輪	17c-末-18c 初	肥前 向井	
321	三横	横山前	墓石-018	向井	向井	(11.0)		口: 1/10	灰灰	鐵輪後鉛錠						鐵輪後鉛錠	18c 初-中	肥前 向井	
322	三横	横山前	墓石-015	向井	向井	(12.4)		口: 1/6	灰灰	鐵輪後鉛錠						鐵輪後鉛錠	18c 初-中	肥前 向井	
323	三横	横山前	墓石-015	土器	底	(10.0)		底: 1/4	白	内面見込みに櫛目のような波線があり						内面見込みに櫛目のような波線あり	不規		
324	三横	横山前	墓石-020	土器	底	(20.0)		底: 1/2	白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	不規		
325	三横	横山前	墓石-014	土器	底	(19.6)	7.4	口: 1/6 底: 1/6	暗褐色	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	17c-前		
326	三横	横山前	墓石-014	土器	底	(3.0)		口: 1/2	白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	不明		
327	三横	横山前	墓石-023	土器	底	(1.1)		口: 1/2	白	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	不明		
328	三横	横山前	墓石-023	土器	底	(2.6)	(9.0)	口: 1/8	白	鐵輪 曳舟 鐵輪付け						鐵輪 曳舟 鐵輪付け	17c-前		
329	三横	横山前	墓石-020	土器	底	(26.0)		口: 1/2	白	内面見込みに櫛目のような波線あり						内面見込みに櫛目のような波線あり	不規		
330	三横	横山前	墓石-023	土器	底	(24.1)		口: 1/6 底: 1/6	暗褐色	鐵輪 曳舟						鐵輪 曳舟	17c-前		
331	三横	横山前	墓石-023	土器	底	9.0		口: 1/6	白	内面見込みに櫛目						内面見込みに櫛目	肥前		
332	IV横	横山前	墓石-002	向井	向井	5.2		底: 1/6	白	内面被熱鉛錠組	内面見込みトランシットあり					内面被熱鉛錠組	17c-前	肥前 向井	
333	IV横	横山前	墓石-002	向井	向井	(11.2)		口: 1/8	灰白	内面被熱鉛錠組	内面見込みトランシットあり					内面被熱鉛錠組	17c-後	肥前 向井	



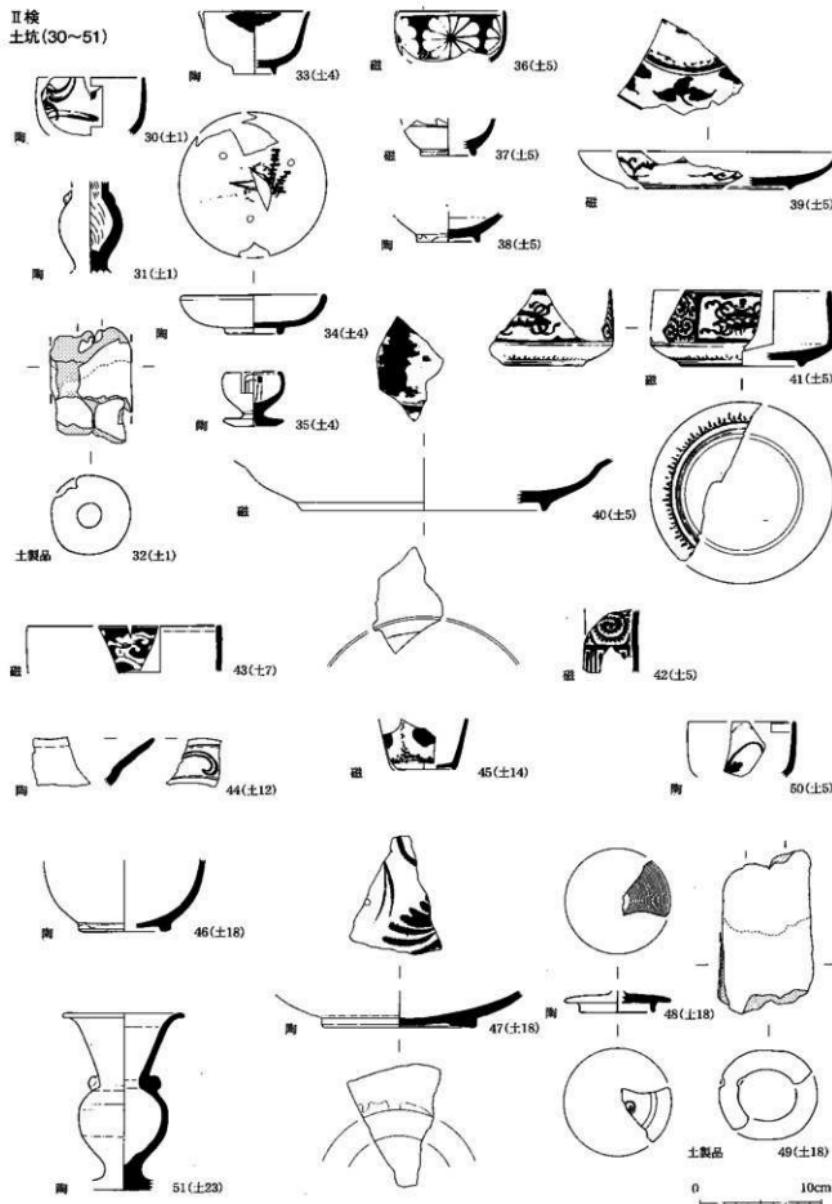
番号	機出 場	出土地点	注記	種別	形態	表量(m)	横幅	高さ	断面	材質	地質・文様・形状の特徴		判斷	推定年代	墓地		
											内面スス付垂	内面見込み壁文					
390	V	機出山	V-016	土器	壺	(11.8)	口: 一郎	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂	内側直か?		17c 初か?			
391	V	機出山	V-016	土器	壺	(8.6)	口: 1/8	底: 一郎	底	陶器				不明			
392	V	機出山	V-016	土器	壺	(10.6)	(5.6)	(2.8)	口: 一郎 底: 1/2	陶器	内面スス付垂			18c 後-17c 前			
393	V	機出山	V-016	土器	壺	(12.0)	(7.0)	2.9	口: 1/4 底: 1/4	陶器	内面スス付垂			16c 後			
394	V	機出山	V-016	土器	壺	(12.0)	口: 1/8	底: 一郎	底	陶器				17c			
395	V	機出山	V-006	陶器	壺	(6.6)	口: 1/2	底: 一郎	底	陶器体	内面見込み壁文			17c 前-中	肥前		
396	V	機出山	V-011	陶器	壺	(5.0)	底: 1/3	底: 一郎	底	陶器体				16c 後	肥前		
397	V	機出山	V-016	陶器	壺	(12.0)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器体	全周被黒			16c 後	肥前		
398	V	機出山	V-016	土器	内瓦壺	(25.8)	口: 1/12	底: 一郎	底	陶器				在地			
399	V	機出山	V-009	土器	内瓦壺	22.0	底: 完	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂			在地			
400	V	機出山	V-013	土器	内瓦壺	(31.4)	口: 一郎	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂			在地			
401	V	機出山	V-013	土器	内瓦壺	(25.6)	口: 2/3	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂			在地			
402	V	機出山	V-006	土器	内瓦壺	(33.4)	(26.0)	(15.6)	口: 1/4 底: 2/3	陶器	内面スス付垂			在地			
403	V	機出山	V-006	土器	内瓦壺	(27.6)	口: 2/5	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂	柱頭部供化物付		在地			
404	V	機出山	V-001	土器	内瓦壺	(21.4)	口: 1/8	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂	近頃一部剥離		在地			
405	V	機出山	V-001	土器	内瓦壺	(4.0)	底: 3/2	底: 一郎	底	陶器	内面見込み縫合び脱り			陶付	16c 中		
406	V	機出山	V-007	陶器	盒	10.2	開: 一郎	底: 3/5	底	陶器	内面スス付垂	田植土8-2と同一年か?		陶輪	17c 前-中		
407	V	機出山	V-007	陶器	盒	10.2	底: 3/5	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂			陶輪	肥前		
408	V	機出山	V-019	土製品	羽口	(9.4)	底	底	底	陶器	内面スス付垂			羽口付			
409	V	機出山レ	T-021	陶器	瓶	(12.8)	口: 1/2	底: 一郎	底	陶器	内面見込み草文			陶付	18c 中	肥前	
410	ト	機出山ト	T-021	陶器	瓶	5.2	底: 完	底: 一郎	底	陶器	台座焼付軸巻腰取り	蛇の目台		鉄輪	不明	城戸古墳	
411	ト	機出山レ	T-1 置-001	土器	皿	11.1	6.7	3.3	口: 3/4 底: 完	陶器	内面スス付垂	丸頭端しく熱黒			16c 後		
412	ト	機出山レ	T-006	土器	皿	(9.9)	(6.6)	(2.3)	口: 1/4 底: 1/3	陶器	内面スス付垂			19c 初か?			
413	ト	機出山レ	T-021	陶器	瓶	(19.0)	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂			灰釉	17c 前	城戸古墳	
414	ト	機出山レ	T-021	陶器	瓶	15.4	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂	内面見込み具模あり 全周被黒		透明釉	19c	肥前	
415	外	機出山地区	7	陶器	碗	4.8	底: 完	底: 1/2	底	白	高台外面部斜傾 内面見込み十字花文?			陶輪	18c か?	肥前	
416	外	機出山地区	7	陶器	碗	(11.4)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器				灰釉	17c 守か?	城戸古墳	
417	外	機出山地区	7	陶器	碗	(10.0)	口: 1/4	底: 一郎	底	陶器	金田御跡 口縁端部被黒腰部被黒端部 一部スス付垂			瓦石輪	18c 中	城戸古墳	
418	外	機出山地区	7	陶器	小鉢	(8.8)	(3.6)	(2.6)	口: 1/8 底: 1/6	陶器	内面見込み具模あり			灰釉	不明	城戸古墳か?	
419	外	機出山地区	7	陶器	小鉢	10.0	底: 1/6	底	底	陶器	四脚付 内面縫合 外面風呂文か?			陶付	18c	肥前	
420	外	機出山地区	7	陶器	天目茶碗	(11.0)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器				陶輪	17c 前-中	肥前	
421	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(10.2)	口: 一郎	底: 一郎	底	陶器	内面施釉 外面刻削唐草文			陶輪	17c 前	肥前	
422	外	機出山地区	2	陶器	瓶	(12.0)	(7.6)	(2.5)	口: 3/8 底: 1/4	陶器	内面被黒	内面ビントテン痕あり 斜面輪トテン痕あり			灰釉	17c 初	城戸古墳
423	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(10.6)	(6.4)	(2.3)	口: 一郎 底: 1/3	陶器	内面被黒	内面ビントテン痕あり 斜面輪トテン痕あり			灰釉	17c 初	城戸古墳
424	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(10.4)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器	内面被黒	内面スス付垂		灰釉	17c 初	城戸古墳	
425	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(6.2)	底: 1/8	底: 一郎	底	陶器	内面被黒	内面被黒		灰釉	18c 中	城戸古墳	
426	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(6.4)	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器	内面被黒			灰釉	17c 初?	城戸古墳	
427	外	機出山地区	7	陶器	瓶	5.0	底: 1/5	底: 一郎	底	陶器	内面見込み輪入ギザ?			灰釉	17c 前-17c 前	城戸古墳	
428	外	機出山地区	2	陶器	瓶	(6.4)	底: 1/6	底: 一郎	底	陶器	底面 被黒			灰釉	17c 前	城戸古墳	
429	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(6.8)	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器	内面見込みトテン底あり 正面輪トテン痕あり 全周被黒			灰釉	16c 前?	城戸古墳	
430	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(9.4)	(6.4)	(3.0)	口: 1/8 底: 1/3	陶器	内面スス付垂						
431	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(9.2)	口: 1/10	底: 1/8	底	陶器							
432	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(9.8)	(6.4)	(3.0)	口: 1/7 底: 1/3	陶器	内面スス付垂						
433	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(9.6)	口: 1/8	底: 1/8	底	陶器	内面スス付垂						
434	外	機出山地区	7	陶器	瓶	(10.0)	(5.0)	(2.5)	口: 1/2 底: 1/6	陶器	内面スス付垂				19c 中-後		
435	外	機出山地区	7	土器	瓶	(10.0)	口: 1/8	底: 一郎	底	陶器							
436	外	機出山地区	7	土器	瓶	(10.4)	口: 1/5	底: 一郎	底	陶器							
437	外	機出山地区	7	土器	瓶	(11.0)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器	内面スス付垂						
438	外	機出山地区	7	土器	瓶	(9.2)	(4.0)	(2.6)	口: 1/6 底: 一郎	陶器	内面被黒	内面スス付垂			18c 中か		
439	外	機出山地区	7	土器	瓶	(8.0)	(5.0)	(1.9)	口: 1/3 底: 1/3	陶器	底				19c		
440	外	機出山地区	7	土器	瓶	(9.8)	(5.0)	(5.0)	口: 1/8 底: 完	陶器	内面スス付垂						
441	外	機出山地区	7	土器	瓶	(10.0)	口: 1/6	底: 一郎	底	陶器	内面被黒						
442	外	機出山地区	7	土器	瓶	(10.2)	口: 1/5	底: 一郎	底	陶器							
443	外	機出山地区	7	土器	瓶	(11.4)	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器							
444	外	機出山地区	7	土器	瓶	(8.4)	底: 1/4	底: 一郎	底	陶器							

番号	地出 (西)	出土地点 (西)	土質 (西)	地形 (西)	地中 基盤 (西)	柱 口幅 (西)	底標 (西)	標高 (西)	保存度 (西)	断面 (西)	断面・文書・防護特徴		編號	推定年代	概説
											外表面	内面			
445	外 沿岸区外	7	海砂	林	(26.2) (16.2)	(7.3)	口：底：	1/6	灰灰	外表面はさみ具痕あり 内面ピントテン痕あり 内外面スッキ付省 外部 砂地	灰袖	17c前	鹿戸川底		
446	外 沿岸区外	7	海砂	林			(14.6)		灰灰	内面はさみ具痕あり	灰袖	16c後-17c前	鹿戸川底		
447	外 沿岸区外	7	海砂	林地	(26.6)				灰灰	口：1/2	堆積	17c前	鹿戸川底		
448	外 沿岸区外	7	海砂	林地			(11.2)		灰灰	一帯	堆積	17c中	鹿戸川底		
449	外 沿岸区外	7	土質	内瓦築	(29.0)				口：一帯	堆積	全面被熱			在地	
450	外 沿岸区外	2	土質	内瓦築	(24.4)				口：一帯	堆積	全面被熱			在地	
451	外 沿岸区外	2	土質	内瓦築	(28.0)				口：1/10	堆積	全面被熱			在地	
452	外 沿岸区外	7	土質	内瓦築	(74.1) (26.9)	(12.1)	口：1/3 底：一部		堆積-黒斑	外面部スッキ付省	口跡前面がみあき 外面スッキ付省	灰袖	17c中-後	鹿戸川底	
453	外 海岸区外	7	土質	内瓦築		(27.4)			灰灰	一帯	堆積	外面部スッキ付省	灰袖	17c前	鹿戸川底
454	外 海岸区外	7	土質	内瓦築		(30.2)			口：1/6	堆積	外面部スッキ付省	灰袖	17c中	鹿戸川底	
455	外 海岸区外	7	土質	内瓦築		(18.0)			灰灰	一帯	堆積	外面部スッキ付省	灰袖	17c後	鹿戸川底
456	奥土 売土-003	7	土質	陶器	(4.6)				灰灰	1/4	灰灰		灰袖	17c中-後	鹿戸川底
457	奥土 売土-003	7	土質	陶器	(4.8)				灰灰	1/4	灰灰		灰袖	17c前	鹿戸川底
458	奥土 売土-003	7	土質	陶器	(6.4)				灰灰	1/2	灰灰		灰袖	17c後	鹿戸川底
459	奥土 売土-003	7	土質	小爪	2.2				灰灰	先	灰灰	1/4	灰袖	17c後	鹿戸川底
460	海上 鹿上-017	鹿島	天日赤系	(10.9)					口：1/3	堆積-暗赤	企画若手被熱		灰袖	17c前	鹿戸川底
461	奥土 鹿上-004	鹿島	土器	盆	(12.0) (7.1)	(2.2)	口：1/10 底：1/3		灰	全表面	全面被熱 内面・底部ピントテン痕あり	灰袖	16c末-17c初	鹿戸川底	
462	奥土 鹿上-004	鹿島	土器	盆	(9.0) (4.7)	(1.8)	口：1/4 底：1/5		灰灰	背部トランク痕あり	灰袖	16c末	鹿戸川底		
463	奥土 鹿上-004	鹿島	土器	盆	(6.0)				灰	堆積先 高台端面被熱後引き取り 全面被熱 内外面スッキ付省 背部トランク痕あり	灰袖	16c末-17c初	鹿戸川底		
464	奥土 鹿上-004	鹿島	土器	盆	(10.2) (6.4)	(1.8)	口：1/3 底：1/5		灰白	堆積先 内面見込み 黄斑に輪トランク痕あり 内外面一部被熱	灰袖	17c末-18c初	鹿戸川底		
465	奥土 鹿上-005	鹿島	土器	盆	(6.4)				灰	1/4	灰灰		灰袖	17c中	鹿戸川底
466	海上 鹿上-004	鹿島	土器	盆	(16.8)				1/6	灰袖	堆積先 一部被熱から	灰袖	18c末	鹿戸川底	
467	海上 鹿上-003	鹿島	土器	盆	(10.9) (6.2)	(2.9)	口：1/1 底：1/6		灰白	吉野 盆底 全面被熱	吉野 灰袖 全面被熱	吉野石袖	18c末	鹿戸川底	
468	奥土 鹿上-004	土器	盆	(10.0) (4.8)	(2.4)	口：1/6 底：1/10		灰	内外面一部にスッキ付省				17c		
469	奥土 鹿上-002	土器	盆	(6.6)				1/3	灰				小明		
470	海上 鹿上-003	土器	盆	10.4	6.3	2.3	口：1/4	灰 灰	堆積-黒斑	外面部にスッキ付省		吉石袖	17c初-中		
471	海上 鹿上-004	土器	盆	(9.2)				1/5	灰	外面部スッキ付省			不別		
472	海上 鹿上-003	土器	盆	(10.6) (6.0)	(2.8)	口：1/6 底：1/2		灰	近畿「三」の墨書きあり						
473	海上 鹿上-003	土器	盆	(9.8) (5.7)	(2.7)	口：1/4 底：1/8		灰					17c		
474	奥土 鹿上-004	土器	盆	(9.6) (6.3)	(1.8)	口：1/6 底：1/10		灰	外面部スッキ付省				18c		
475	奥土 鹿上-004	土器	盆	15.7		2.7	口：2/3		堆積	外面部面端部ガラフタガキ 内面部被熱痕あり 傷跡剥離跡 口縁端部使用による筆跡か?			不明	小明	
476	奥土 鹿上-003	陶器	内竹		(2.2)			1/4	堆積-堆積	堆積跡 内面見込み凹穴ら?		吉石袖	17c前-中	肥前	
477	奥土 鹿上-004	陶器	内竹					1/6	灰灰				清地	19c初	鹿戸川底
478	奥土 鹿上-004	陶器	内竹					1/8	灰				清地	19cから	京・大阪
479	海上 鹿上-004	陶器	内竹	(12.0) (6.2)	(5.1)	口：1/2 底：1/2			灰灰	鉄物にうのふね 金由被熱 内面見込みに墨ね黒斑 脚部貼り付け		灰袖	18c末-19c	鹿戸川底	
480	海上 鹿上-004	土器	内瓦築	(24.0)				1/6	灰	脚部に傷痕あり 内外面スッキ付省					
481	海上 鹿上-004	土器	内瓦築	(31.4) (23.6)	(6.4)	口：1/10 底：1/2		灰	外面部一般にスッキ付省						
482	奥土 土-006	瓦	瓦	16.7	33.0	8.8	堆積-深火		瓦灰	内面一部削りあひ					
483	土壁 土-049	土瓦	土瓦						土瓦	文修面被熱 スッキ付省					
484	V桶 土-049	土	瓦						瓦灰	側面に削り 内面は目洗痕ナゲ 外面角引りか?					

I 檢  
検出面(1~29)

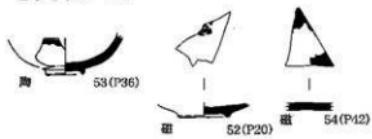


第17図 土器・陶磁器・土製品(1)

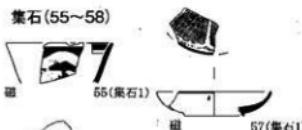


第18図 土器・陶磁器・土製品(2)

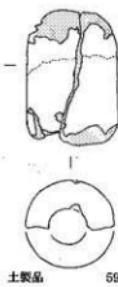
ピット(52~54)



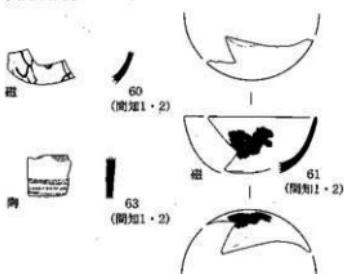
集石(55~58)



石組(59)

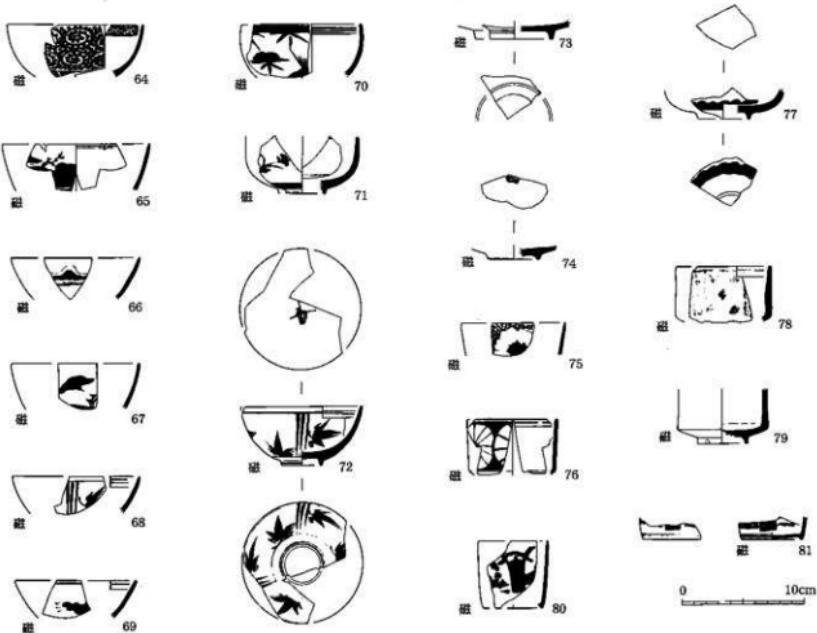


間知石列(60~63)

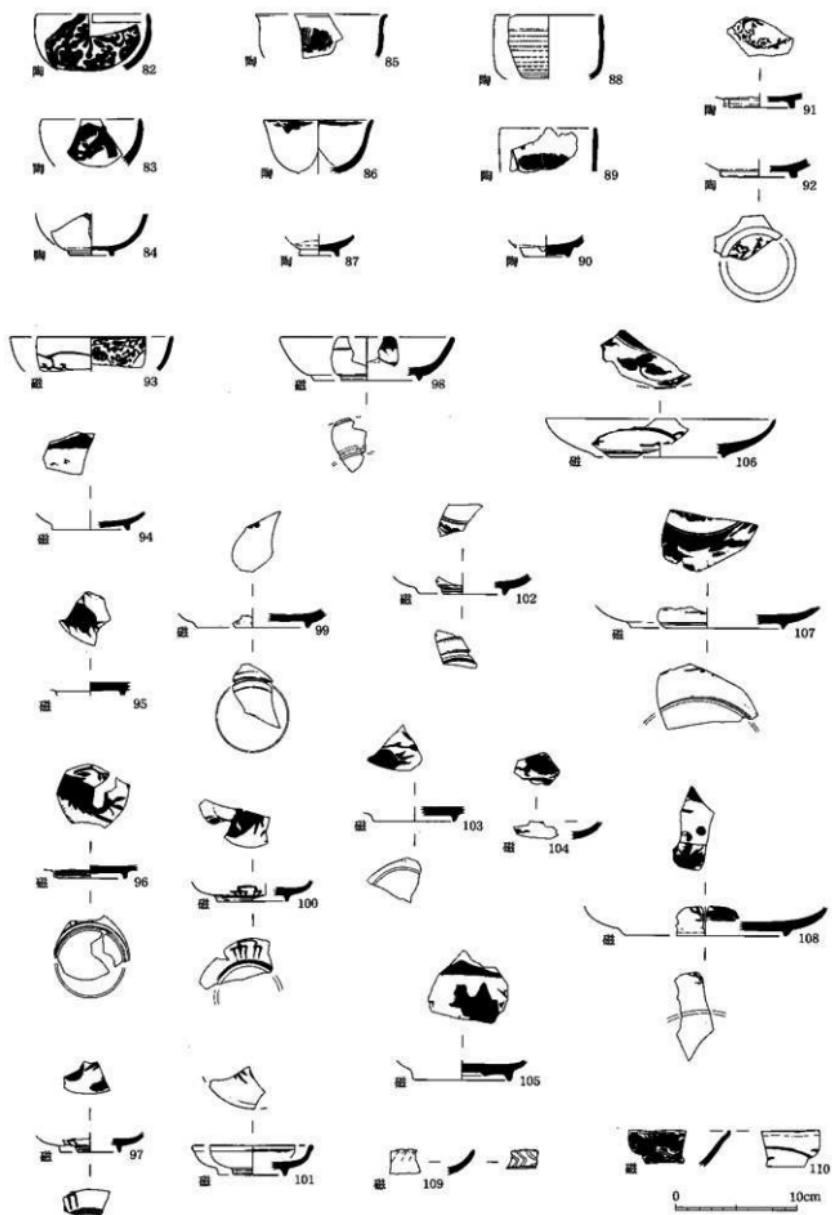


土製品 58(集石1)

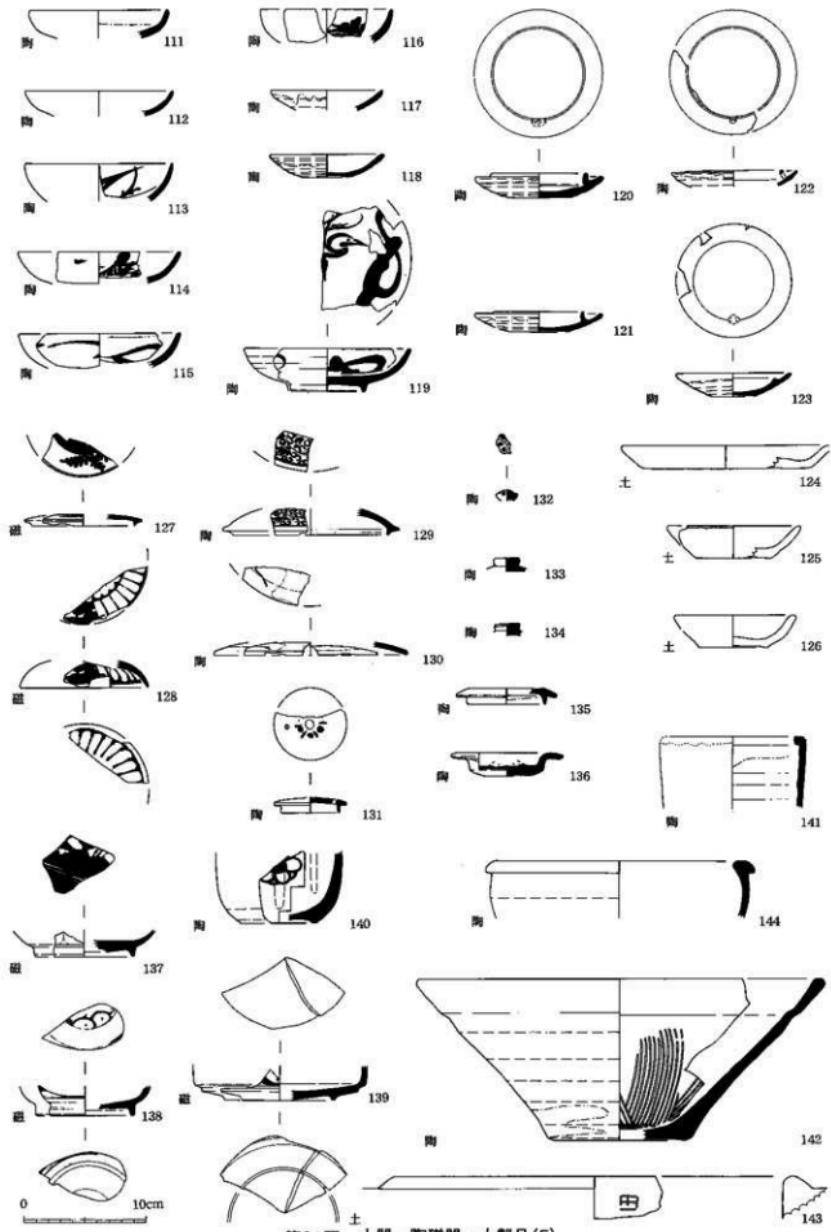
検出面(64~143)



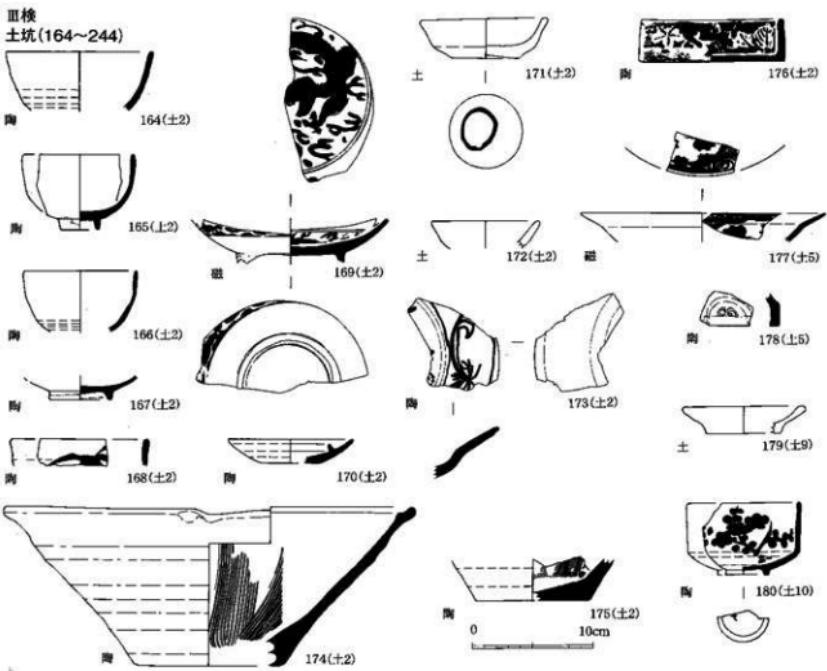
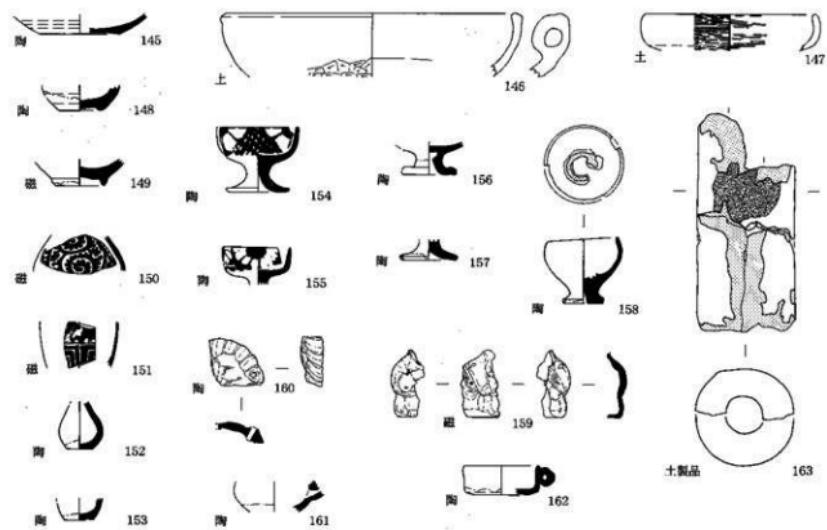
第19図 土器・陶磁器・土製品(3)



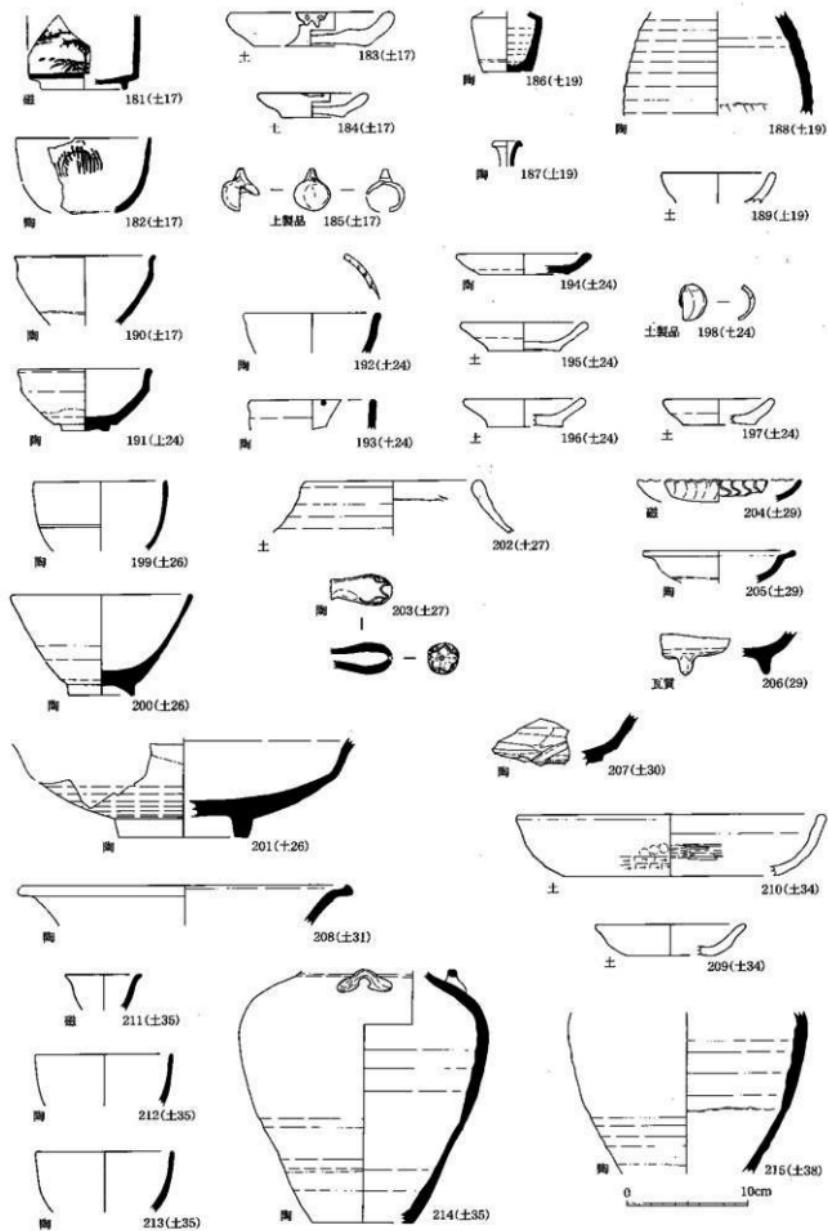
第20図 土器・陶磁器・土製品(4)



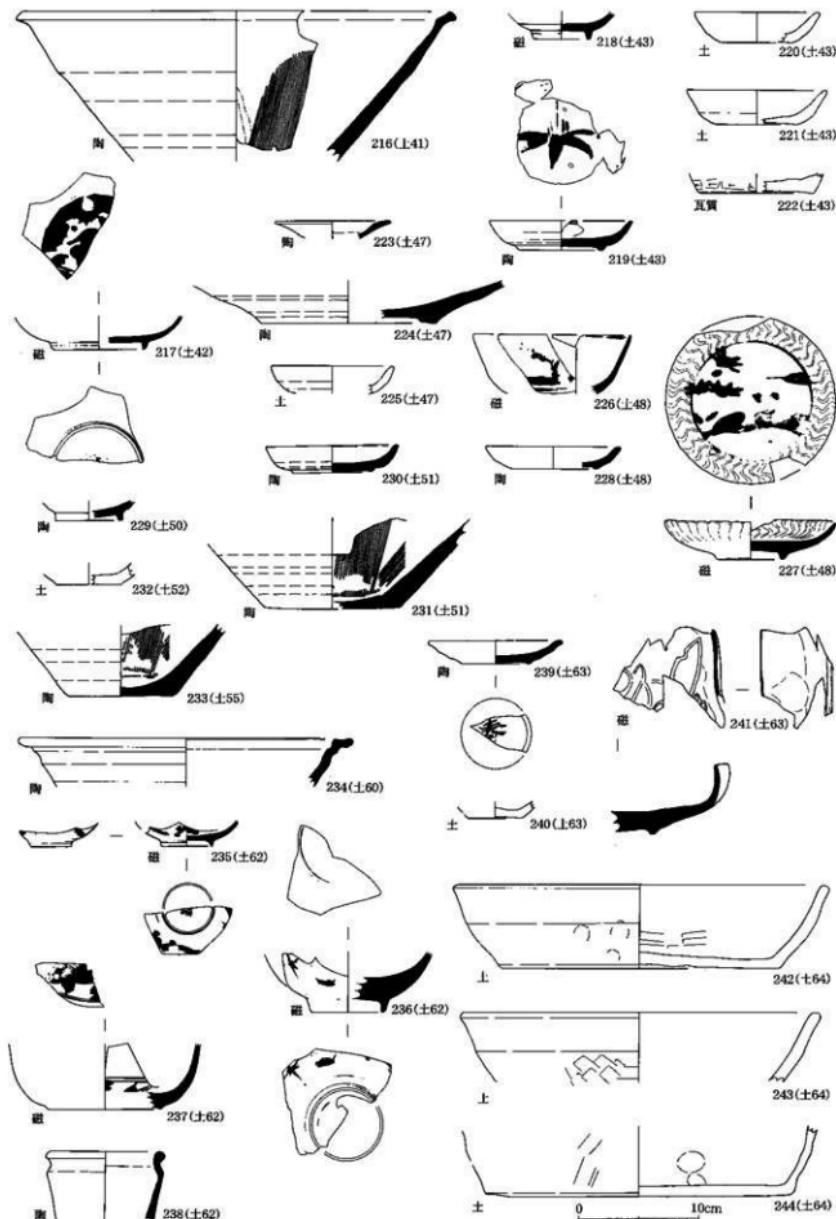
第21図 土器・陶磁器・土製品(5)



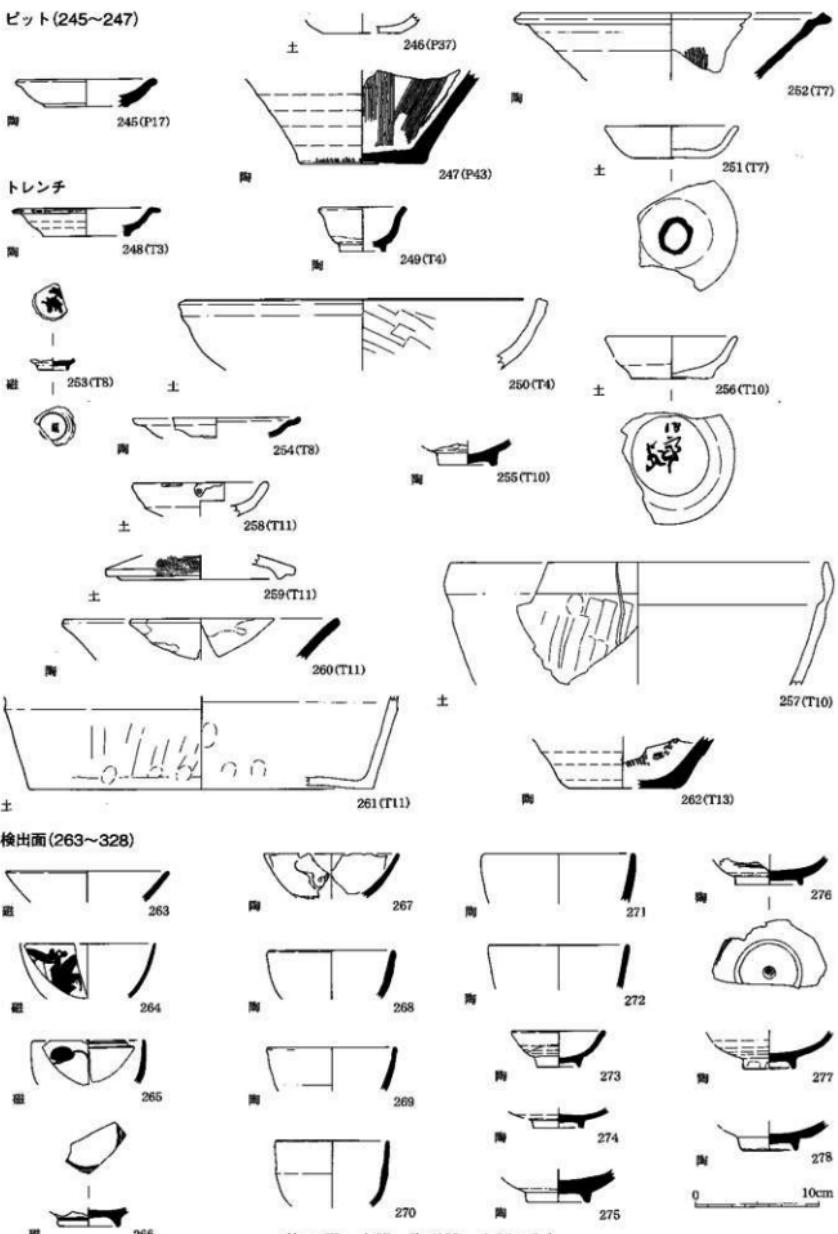
第22図 土器・陶磁器・土製品(6)



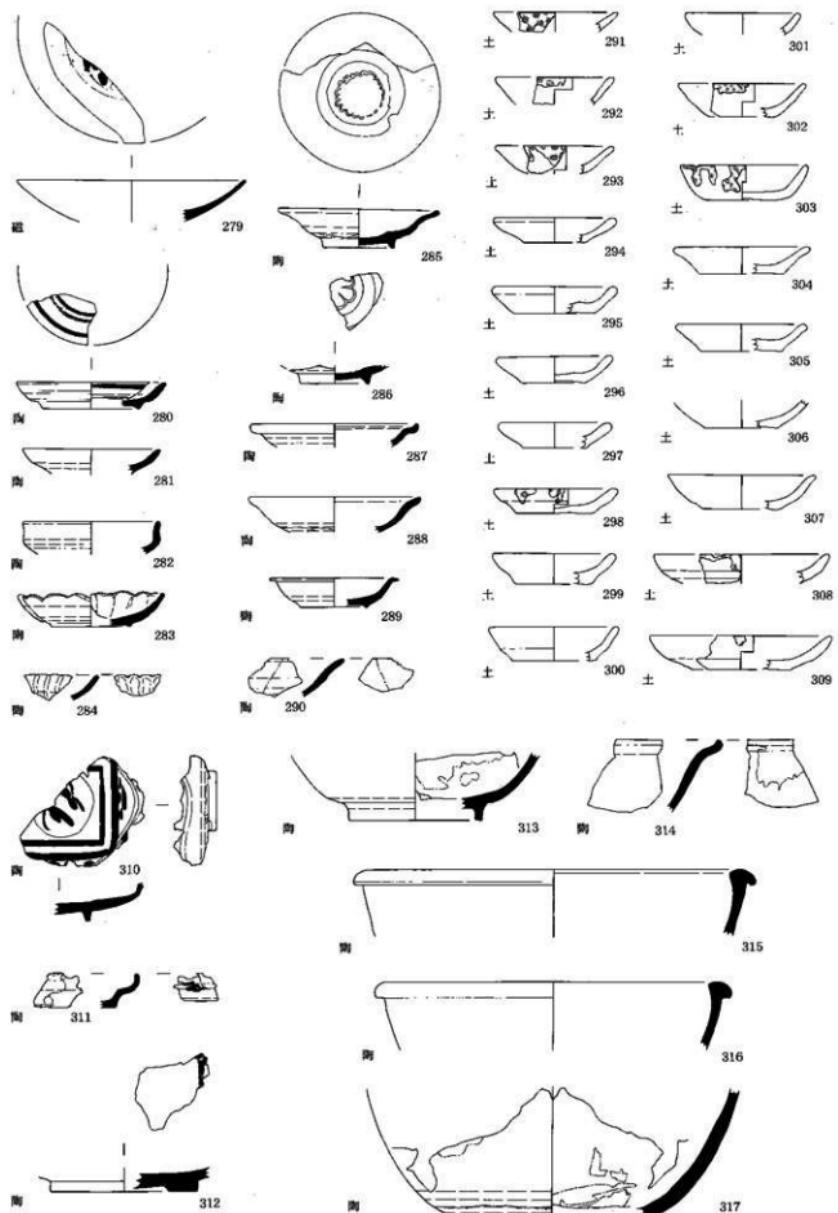
第23図 土器・陶磁器・土製品(7)



第24図 土器・陶磁器・土製品(8)

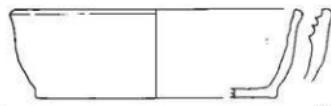
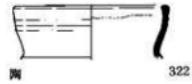
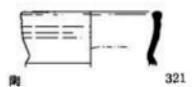
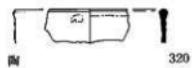


第25図 土器・陶磁器・土製品(9)

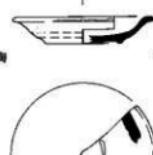
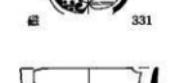
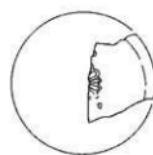


第26図 土器、陶磁器、土製品(10)

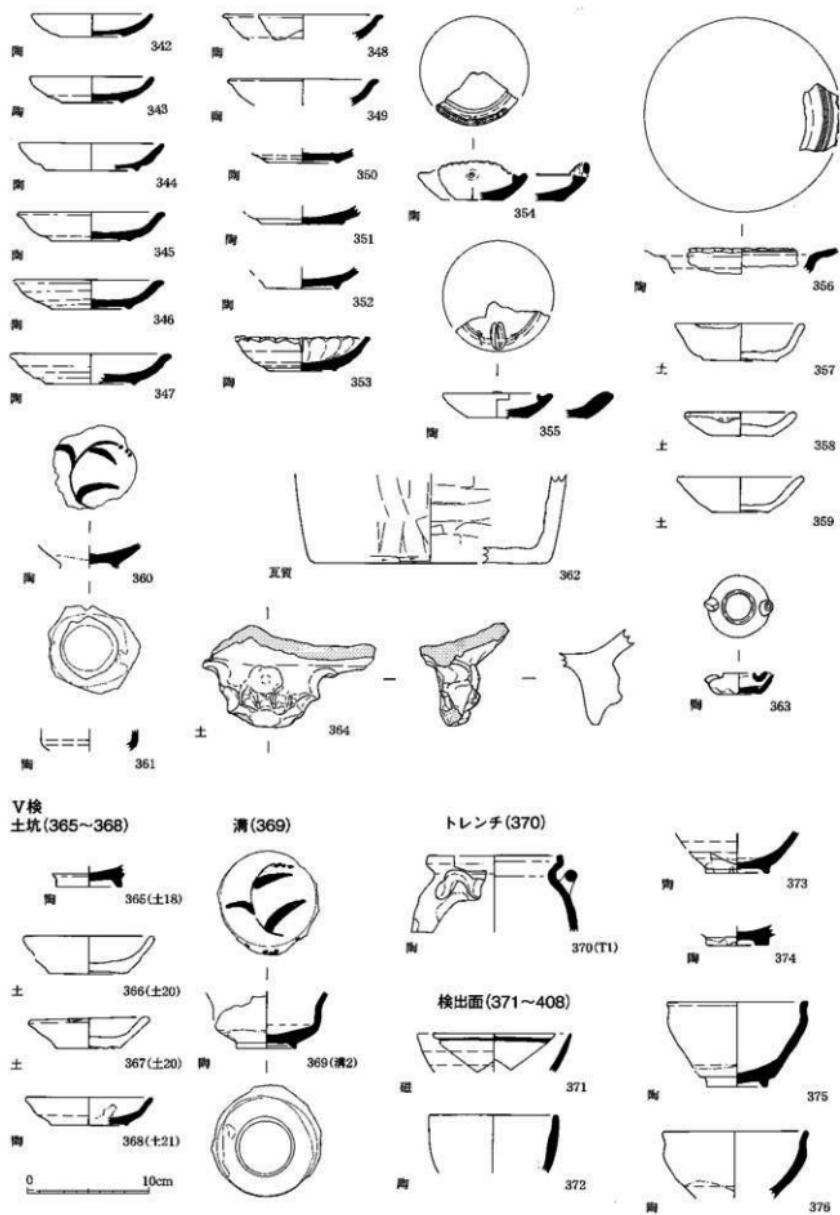
0 10cm



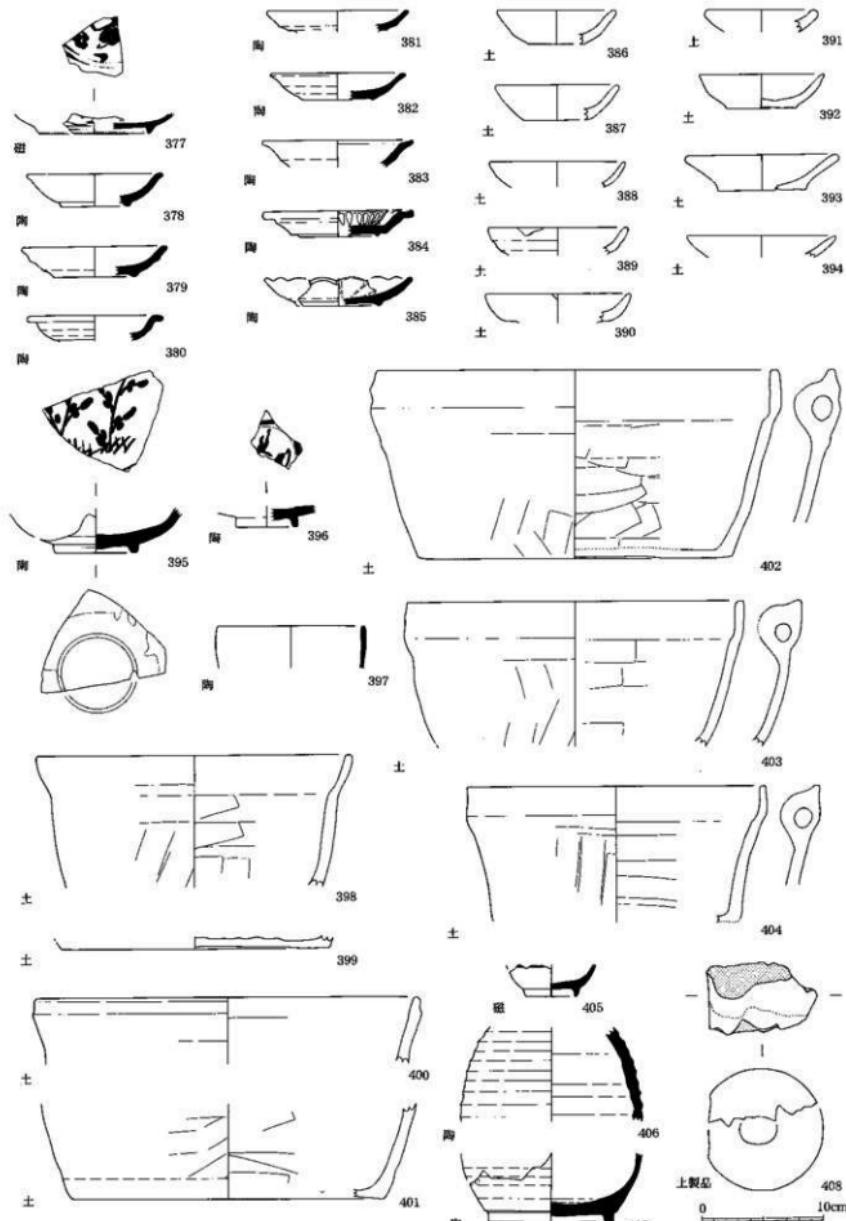
IV検  
検出面(329~364)



第27図 土器・陶磁器・土製品(11)

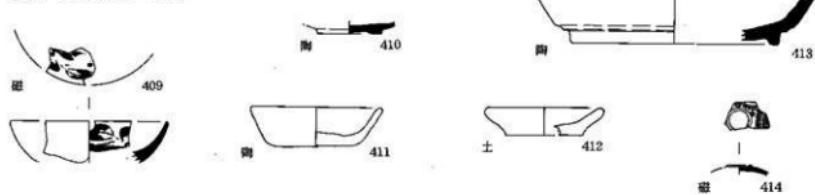


第28図 土器・陶磁器・土製品(12)

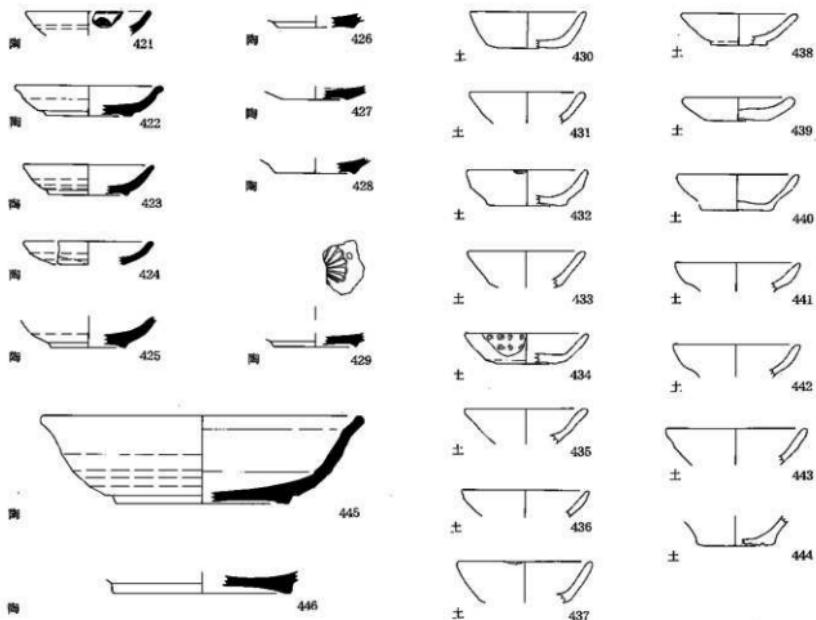
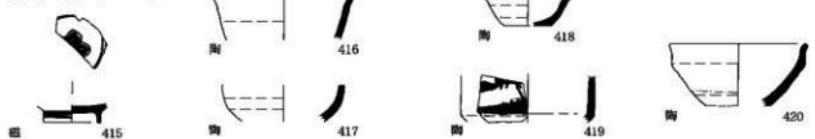


第29図 土器・陶磁器・土製品(13)

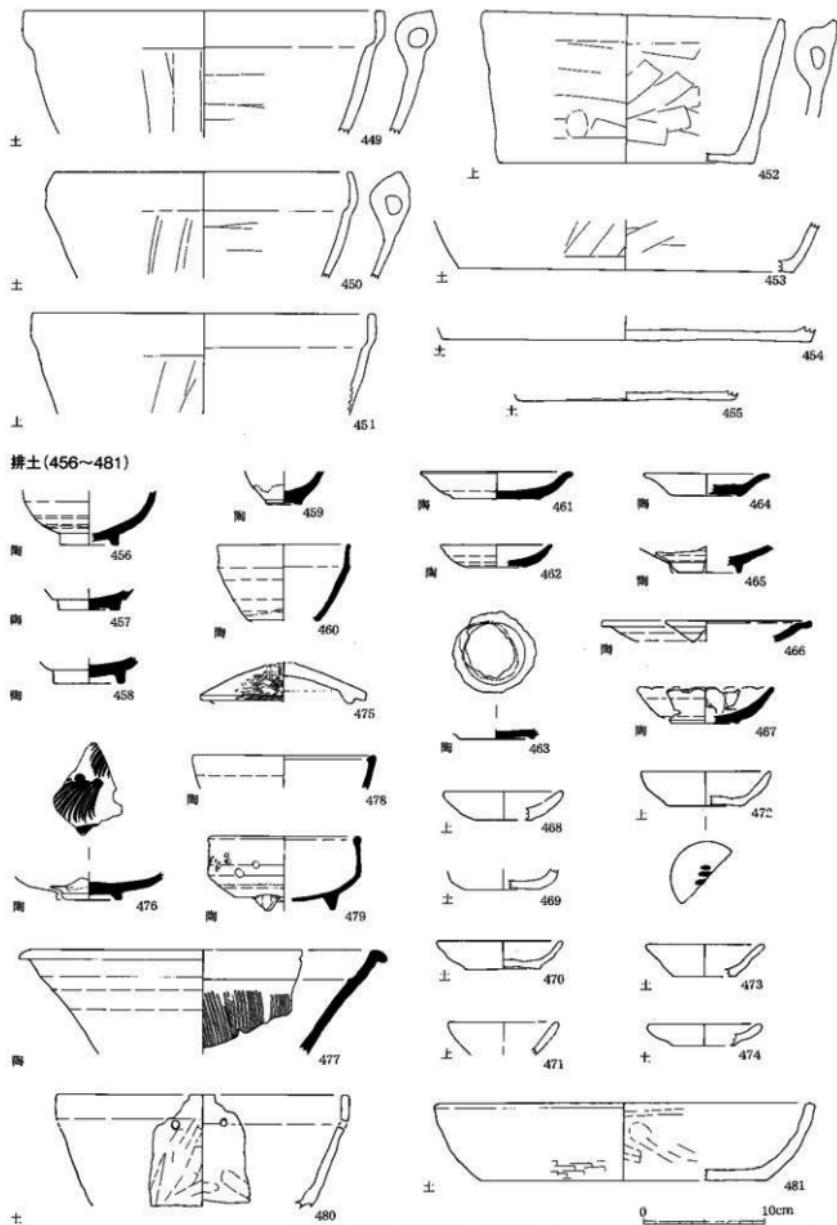
東部トレーン(409~414)



調査区(415~455)

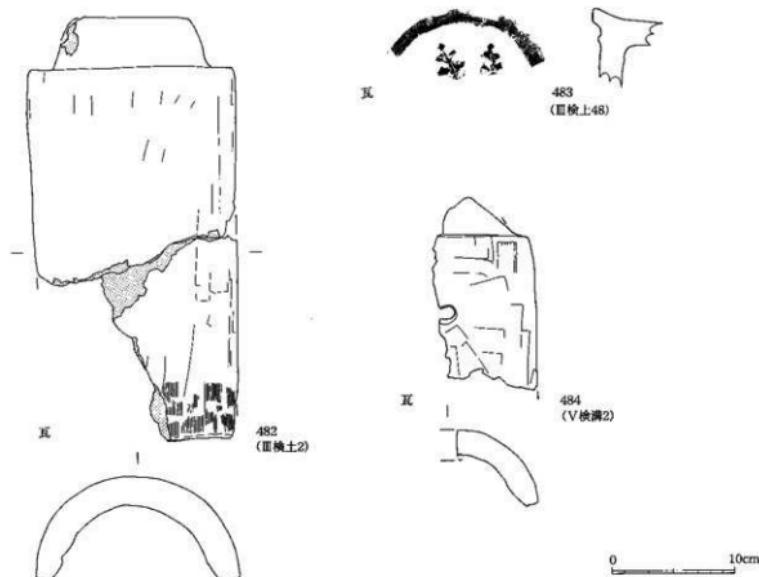


第30図 土器・陶磁器・土製品(14)



第31図 土器・陶磁器・土製品(15)

瓦(482~484)



第32図 瓦(16)

## 2 木製品

### (1) 出土木製品の概要

今回の調査では、55点の木製品が出土した。これらはすべてⅢ～V検より出土したもので、このうち実測可能な51点について図面を掲載した。層位別の出土量をみると、Ⅲ検25点、Ⅳ検8点、V検13点が出土した。出土木製品の種別をみると、漆器製品と木製品がみられる。漆器は漆椀・板類・円板・櫛、木製品は下駄・曲物・円板・鍔・木槌・独楽・櫛・箸・栓・折敷などがみられる。以下、各検出面の様相を述べていく。

### (2) 第Ⅲ検出面

Ⅲ検からは25点出土した。内訳は、土坑18点・検出面(包含層)7点である。土坑の中では、土2からが最も多く、10点が出土した。このうち漆器類は4点で、漆椀(1)、円板(2)、板類(3・4)がみられる。1は内面が朱漆、外面は黒漆で1箇所に模様がみられる。2は、曲物の底板と考えられる円板である。両面と側面の一部には黒漆が残っている。3・4は膳の側板と考えられる板類で、同一個体と考えられるものである。2点ともに片面は朱漆の下地に黒漆の重ね塗りで、他面は黒漆の下地に朱漆の重ね塗りがされている。木製品は、円板(5)、栓(6)、下駄(7)、木槌(8)、板類(10)、不明(9)がある。6の栓は、表面を丁寧に加工してあるため、工具痕は確認できない。上面は、斜めに切断されている。7は連歛下駄である。歛部は著しく摩滅している。後部中央には、円形の焼印が2箇所残る。土5からは11の漆椀が出土した。外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。外面には草花文が描かれており、底面には朱漆で文字が書かれている。18は、独楽と考えられる。一端を粗く削って尖らせている。19は漆椀である。小片で判断としないが、外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。

### (3) 第Ⅳ検出面

検出面(包含層)から8点出土した。漆器製品は2点(26・27)、木製品6点(28～33)である。26は、漆椀の破片である。内面は黒漆の上に朱漆の重ね塗り、外面は黒漆である。27は両面黒漆塗りの板類である。31は、鍔先である。先端部には刃部が付いていた痕跡がみられる。中央やや上方には、柄部を差し込んだと考えられる5.5×3.7cmの長方形の孔がある。

### (4) 第Ⅴ検出面

溝1・2、検出面から13点が出土した。漆製品は37・38・46の3点がみられる。37は、漆椀である。外面は黒漆、内面は朱漆に塗り分けられている。外面には、丸に桔梗文の文様が3単位みられる。38は、箱類の部品と考えられる板状の製品である。両面ともに黒漆が塗られている。46は漆椀の小片である。外面は黒漆で一部に文様がみられる。内面は黒漆に朱漆を重ね塗りしている。木製品は10点出土した。36は用途不明の板状の製品である。1枚の板を途中まで割き、その間に他の板材を差し込んでいる。表面の一部には墨書きが残る。39は板状の製品で、表面2箇所には小孔がある。形状から折敷の破片と考えられる。41は櫛の注口と考えられる。

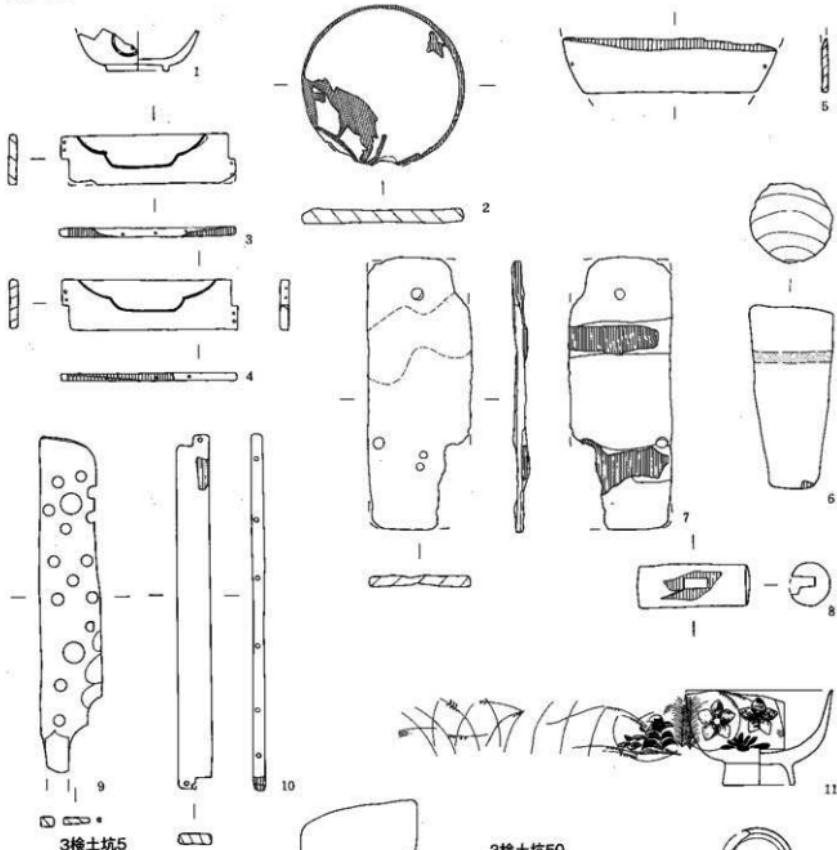
### (5) 東部トレンチ

東部トレンチからは5点を図化した。46は、内外面ともに黒漆が塗られた漆器製品である。楕形をしているが高台はなく、一部に小孔が穿たれていることから、杓子と推定される。48は、栓である。上面と側面には明瞭な加工痕が観察できる。49～51は下駄である。形状はすべて連歛下駄である。50には一部に被熱痕が観察でき、51には明瞭な指頭圧痕が観察できる。

第3表 出土木器一覧表

図名	検出番	遺物名	審査番号	器種分類	手法	長さ・径 (cm)	幅 (cm)	厚さ・高さ (cm)	備考
1	III	土2	A-3-14	漆椀	不明	-	-	3.6	内面黒漆、外面墨漆。外面に紋様あり。
2	III	土2	A-3-16	円板	板目	13.2	-	1.3	両面無漆塗り。部分的に被熱し炭化している。
3	III	土2	A-3-15	板類	板目	(14.5)	(4.0)	0.7	A-3-13と同様のもの。片面は下地朱漆に墨線で紋様あり。両端に竹釘各2箇所。
4	III	土2	A-3-13	板類	板目	14.3	4.1	0.6	片面は下地朱漆に墨線で紋様あり。もう一片面は下地朱漆に朱漆塗り。黒漆面に紋様あり。竹釘各2箇所。
5	III	土2	A-3-9	円板	板目	17.4	-	0.4	火鉢
6	III	土2	A-3-11	棒	板目	6.8	-	15.0	
7	III	土2	A-3-17	下駄	板目	22.3	8.4	0.8	一部欠損。背面はかなり摩滅。後部中央に2箇所の焼印あり。
8	III	土2	A-3-10	木桶	不明	2.6	-	6.5	柄部欠損
9	III	土2	A-3-8	不明	板目	(7.7)	5.0	0.8	墨線熱炭化、円孔多数
10	III	土2	A-3-12	板類	板目	28.2	2.7	0.9	両端2箇所、木口部6箇所に竹釘各2箇所。
11	III	土5	A-3-18	漆椀	不明	-	-	-	外面黒漆、内面朱漆、外面に草花の模様、底裏に朱漆で文字。
12	III	土51	A-3-21	箸	板目	23.9	0.7	0.5	
13	III	土43	A-3-19	箸	-	-	-	-	
14	III	土50	A-3-20	下駄	板目	19.2	9.1	1.4	連齒下駄。前・後歯ともに左側の磨耗が著しい。指頭正痕あり。後部裏端部は斜めに加工。
15	III	土51	A-3-21	箸	板目	-	-	-	
16	III	上51	A-3-21	箸	板目	-	-	-	
17	III	土66	A-3-22	箸	不明	-	-	-	
18	III	土66	A-3-23	独楽	-	-	-	4.4	
19	III	土6	A-3-6	漆椀	板目	(8.0)	(4.9)	0.4	小片、外面黒漆、内面朱漆
20	III	檢	A-3-7	漆椀	不明	底径: 5.7	-	-	厚1.1・高7.6 外面黒漆、内面朱漆
21	III	檢	A-3-5	漆	不明	(7.1)	4.2	0.5	背部欠損、黒漆
22	III	檢	A-3-3	柄杓	不明	10.5	3.6	2.3	柄杓の柄の留具
23	III	檢	A-3-2	円板	板目	12.2	-	0.5	
24	III	檢	A-3-4	箸	板目	17.4	0.8	-	一端欠損、加工痕明顯
25	III	檢	A-3-1	下駄	板目	(10.3)	9.1	3.1	1/2残存、角面取り。
26	IV	檢	A-4-3	漆椀か	不明	(4.2)	(3.1)	(0.6)	内面朱漆、外見黒漆。
27	IV	檢	A-4-2	板類	板目	(8.8)	(3.7)	0.6	両面黒漆塗り。
28	IV	檢	A-4-1	円板	板目	18.0	-	1.0	
29	IV	檢	A-4-5	不明	板目	(9.2)	1.3	0.6	
30	IV	檢	A-4-6	粒	芯持ち	5.5	-	3.2	加工痕明顯
31	IV	檢	A-4-8	鰐先	板目	31.4	12.0	2.7	
32	IV	檢	A-4-7	下駄	板目	15.2	7.9	3.9	連齒下駄。
33	IV	檢	A-4-4	不明	板目	(9.2)	1.3	0.6	径6.5cmの円孔あり。
34	V	檢	A-6-11	板類	板目	11.3	5.8	0.9	竹釘数箇所
35	V	遺1	A-5-13	不明	板目	24.9	3.0	2.5	
36	V	遺2	A-5-14	不明	板目	18.6	3.1	1.2	墨書きあり。1枚板を途中まで剥いで、他の板を差し込んでいる。
37	V	絵	A-5-12	漆椀	不明	11.8	-	0.9	外面墨線3単位
38	V	檢	A-5-4	板類	板目	(11.0)	(3.2)	0.7	表・裏ともに漆
39	V	檢	A-5-3	折敷か	板目	30.4	5.4	1.1	
40	V	檢	A-5-1	箸	板目	26.1	0.5	-	加工痕明顯
41	V	檢	A-5-7	樽の注口	不明	2.2	-	厚0.4・高2.6	
42	V	檢	A-5-9	下駄	板目	20.7	8.3	1.6	前歯欠損による斜による修補痕、指頭正痕あり
43	V	檢	A-5-10	下駄	板目	20.9	11.5	1.8	
44	V	檢	A-5-2	不明	板目	4.6	7.5	5.0	
45	V	檢	A-5-8	不明	板目	27.6	3.6	2.2	
46	V	檢	A-5-5	漆椀	不明	-	-	0.6	内面: 朱漆下喰りに墨線、外面: 黒漆、外面に極縫あり。
47	T	東T	A-東T-5	漆椀	不明	-	-	-	
48	T	東T	A-東T-1	粒	板目	3.8	-	8.5	
49	T	東T	A-東T-2	下駄	板目	21.2	7.3	2.5	連齒下駄、全体的に摩滅著しい
50	T	東T	A-東T-3	下駄	板目	20.3	8.2	1.5	連齒下駄、一端烘化
51	T	東T	A-東T-4	下駄	板目	20.3	7.9	1.3	連齒下駄、指頭正痕あり。
—	T	東T	A-東T-6	漆椀	不明	-	-	-	内面朱漆(下地墨漆)、外見黒漆
—	—	—	A-1	漆椀	不明	-	-	欠番	
—	—	—	A-5-6						

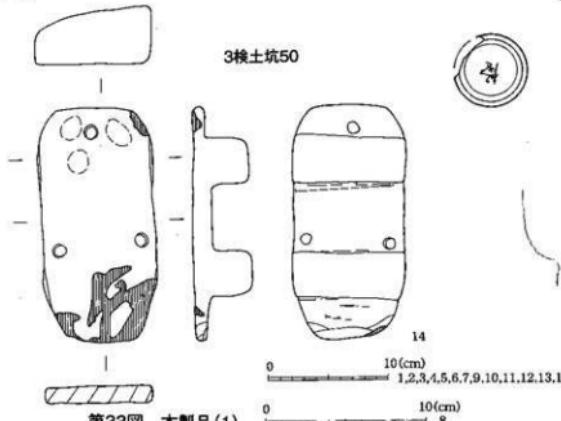
3号土坑2



3号土坑5

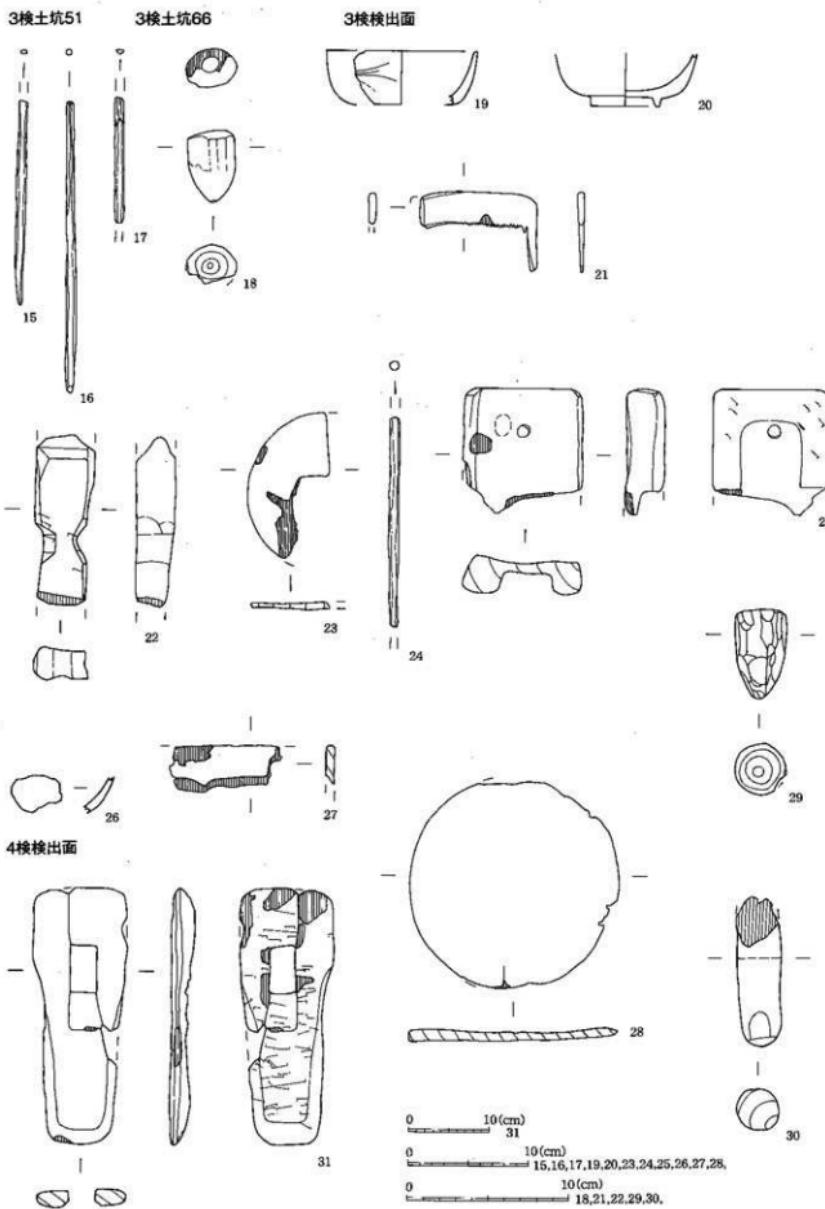


3号土坑50



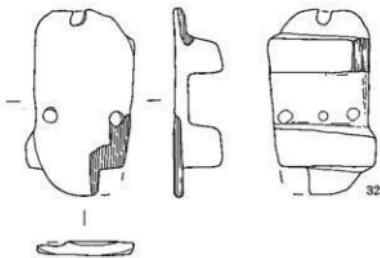
第33図 木製品(1)

10(cm)  
1,2,3,4,5,6,7,9,10,11,12,13,14  
0 10(cm)  
0 8

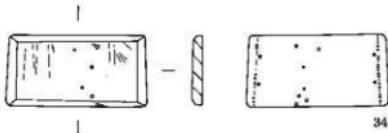


第34図 木製品(2)

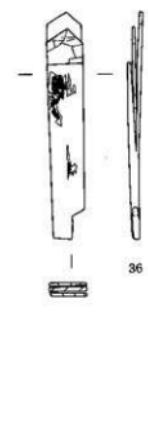
4検査出面



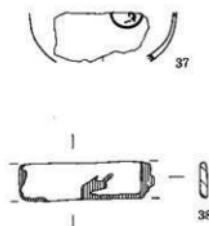
5検査土坑21



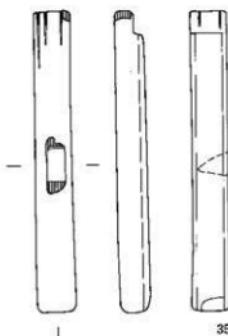
5検査2



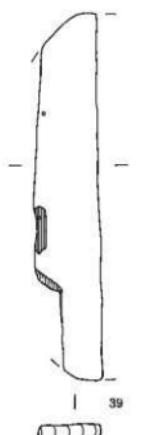
5検査出面



5検査1

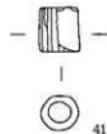


35



39

40

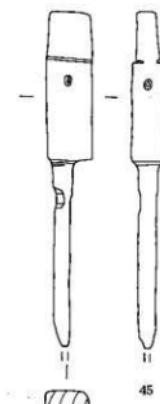
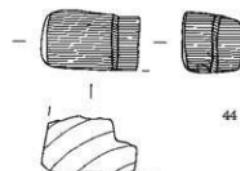
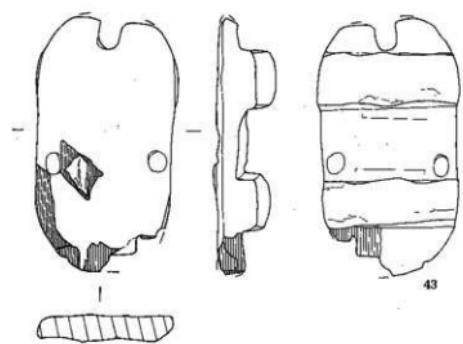


0 10(cm)  
32,34,35,36,37,38,39,40,42,

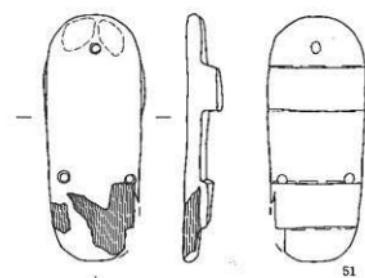
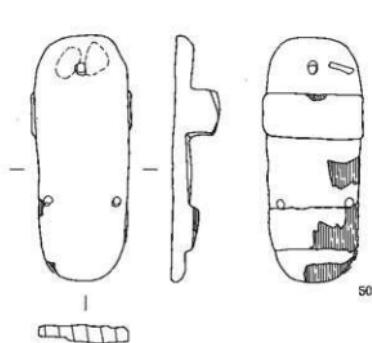
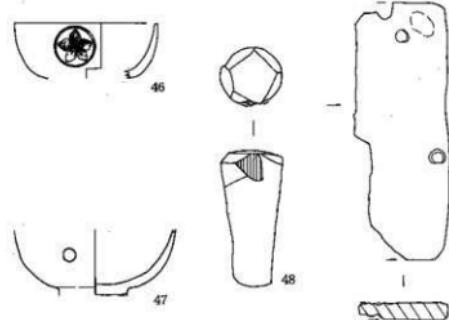
0 10(cm)  
33,41

第35図 木器(3)

5枚板出面



東部トレンチ



0 10(cm)  
43,44,45,46,47,49,50,51  
0 10(cm)  
48

第36図 木製品(4)

### 3 石製品・骨角製品

#### (1)石製品

本遺跡では各検出面を通じて総計47点の石製品が出土した。このうち、比較的残存状況の良好なものを図化し、21点の石製品を掲載した。器種は砥石や硯、搗臼など日用品がほとんどであったが、双六駒や碁石などの遊戯具も少量出土している。また掲載はしなかったが石臼、砥石、硯、水晶なども出土している。これらは總じて江戸期に属すると思われる。以下検出面ごとに概要を記述していく。

#### 第Ⅱ検出面

12点の石製品が出土した。内5点を図化した。1は大型の砥石である。3面使用しており、残る1面にはノミの痕が残されていた。2の砥石とほぼ同じ法量であり石材も同一と思われるため、同一個体である可能性も考えられる。3の砥石は砂岩で作られた砥石である。未使用であった下面等に石を切り出した際のノミの痕がみられた。

4は恐らく硯であると思われる。石材は粘板岩であり、摩滅が著しい。上面上端には横位に沈線が入っている。器面には擦痕が残っていた。5は頁岩で作られた硯である。激しく被熱し、白色化している。硯池部分にはわずかに墨が付着していた。

#### 第Ⅲ検出面

計21点が出土した。第Ⅱ検出面同様砥石が多く出土している。また、数点ではあるが黒曜石や水晶の破片、石臼や搗臼等も出土している。これらの内11点を図化して提示した。

砥石は数多く出土しており、実に12点の砥石が見られた。この中で図化したものが7～9、12・13の5点である。8・9は上州戸沢産、現在の群馬県甘楽郡南牧村産の砥石である。戸沢産砥石は凝灰岩を使用し、6面にゴザ目が入れられているのが特徴である。過去に行なった松本城下町跡本町4次調査では未使用のまま被熱し廃棄された戸沢産砥石が大量に出土したことから、この本町4次調査の調査地が戸沢産砥石問屋であったことが判明している。今回出土している8・9の砥石はともに使用された状態で出土しているため、恐らく調査地で消費されたものであろう。12・13は泥質凝灰岩製の砥石である。少々赤みを帯びた泥質凝灰岩を使っており、その石材から京都産の砥石であると推測される。磨耗が激しいためかなり使い込まれたのであろう。

硯は6の1点のみ出土している。頁岩製の硯であり、硯面にはわずかに墨が残っている。なお墨堂は使用により若干縮んでいる。

14・15はともに搗臼である。14の搗臼は大型のものであり、上面に加えて下面も使用している。15は14に比べて小型の搗臼である。こちらは片面のみ使用している。双方ともに溶結凝灰岩で作られている。

11は双六の駒と思われる。凝灰岩で作られた径約3cm、厚さ0.5cmの駒である。表面に模様等はみられず、多少摩滅しているものと思われる。16は碁石である。材質は珪板岩、いわゆる那智黒石であると思われ、やや構円に近い扁平な形をしている。10は用途不明の石製品である。長さ約10cm、幅0.7cmの棒状を呈しており、石英で作られている。石英表面は筋状に削られており、全面に透明軸のような粒が掛けられている。粒には一部模様のようなものが見受けられる。その形状からして笄である可能性が高いが、類例もなく断定することはできない。

#### 第Ⅳ検出面

第Ⅳ検出面は石製品の出土が少なく、4点のみ出土した。その中で3点の遺物を図化した。17・18は砥石である。17は凝灰岩を用いており、上面は前後2方向から使用している。残存している5面全てに使用が認められ、摩滅している。材質などから上州戸沢産の砥石である可能性が高い。18は泥質凝灰岩製の砥石である。上面上部には横位に、下部には縦位に擦痕がみられ、中央には削れたように窪んだ擦痕が残っている。

下面には上部に斜めに何らかの痕跡がみられる。材質から京都産である可能性が高い。

#### 第V検出面

第V検出面からは10点の石製品が出土しており、そのほとんどが砥石である。19は砂質泥岩を使った砥石である。4面に使用痕が認められる。使用後に被熱したらしく、一部が煤けて黒く変色している。20は溶結凝灰岩の砥石である。4面使用しており、使用後に被熱している。

21の石製品は腰めて櫛炉のようにして使われた温石であると思われる。石材は滑石であり、幅5.7cmの長方形を呈している。上端中央には径0.7cmの孔が空けられている。下面には縁から0.3cmの位置に縁に沿って沈線状の痕が残されている。石材が比較的軟らかいためか全面至る所に擦痕が見られる。この擦痕が使用によるものなのか後に付いたもののかは定かではないが、一定方向に入る擦痕などは恐らく使用時についたのであろうと考えられる。

#### (2) 骨角製品

後述する骨角類と違い、明らかに製品として使用されていたものを骨角製品として取り扱った。骨角製品は22・23・24の3点のみが出土している。22は鹿角製であり、径約2cm、厚さ約0.5cmの円盤型を呈している。表面には特に模様等はみられない。法量や形状から恐らく双六の駒であると思われる。23は鹿土より見つかったので出土位置等の詳細は不明である。法量は22とほぼ同じであり、形状も酷似している。そのためこれも同じく双六の駒であると思われ、22と関連している可能性も考えられる。種は特定できないが、動物の角で作られた物であろう。24はボタンであろうと思われる。裏面中心部には穿孔がみられるが、U字状に入れられており表面までは貫通していない。穿孔中心はブリッジ状であると思われるが、欠損しているため詳細は不明であった。

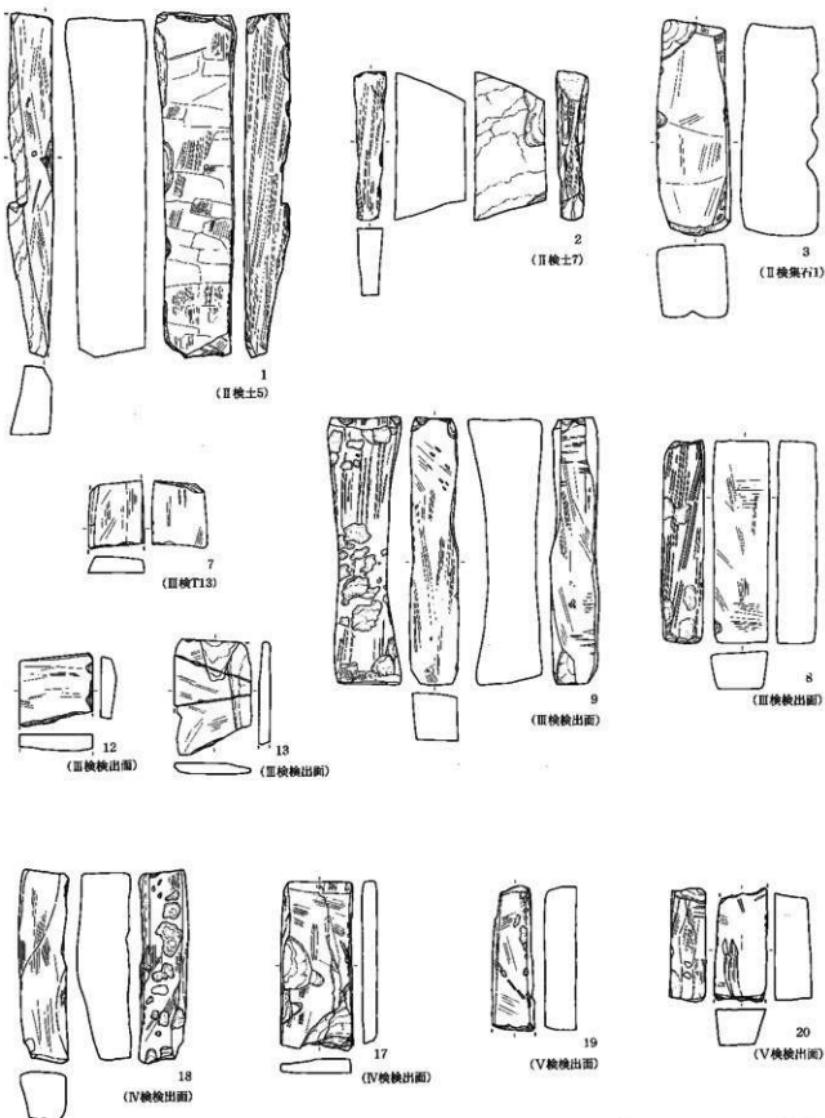
第4表 石製品一覧表

図No.	検出面	出土遺構	注記	種別	法量(cm)			重量(g)	残存度	石材	備考
					長さ	幅	厚さ				
1	II検	土5	上5-002	砥石	(21.3)	5.1	(2.6)	396	ほぼ完	頁岩	2と同一個体か?ノミの痕あり
2	II検	土7	上7-003	砥石	(9.2)	4.5	(2.1)	106	一部残	頁岩	1と同一個体か?
3	II検	集石1	集石1-004	砥石	(13.4)	4.5	4.5	494	ほぼ完	砂岩	ノミの痕あり
4	II検	集石1	集石1-005	硯	(7.0)	(6.9)	0.5	44	一部残	粘板岩	摩滅著しい
5	II検	検出面	検出-010	硯	(8.2)	7.5	2.5	26	上半残	頁岩	被熱により白変
6	III検	土5	土5-007	硯	8.9	6.4	1.6	150	一部欠	頁岩	
7	III検	T13	T13-012	砥石	(4.2)	3.4	1.0	26	一部残	凝灰岩	戸沢産か?
8	III検	検出面	検出-013	砥石	12.5	4.4	2.4	192	ほぼ完	凝灰岩	戸沢産
9	III検	検出面	検出-014	砥石	16.6	3.0	4.6	336	ほぼ完	凝灰岩	戸沢産
10	III検	検出面	検出-015	笄か?	(10.5)	0.7	0.6	14	ほぼ完	石灰	石英のような石材に輪がかかるつてい る一部模様あり
11	III検	検出面	検出-016	双六駒	2.9	3.1	0.5	96	完	凝灰岩	
12	III検	検出面	検出-017	砥石	(4.5)	4.5	1.1	32	一部残	泥質凝灰岩	京都産
13	III検	検出面	検出-017	砥石	(7.2)	4.7	0.7	36	一部残	泥質凝灰岩	京都産
14	III検	検出面	検出-019	笄	12.4	10.9	7.2	1030	完	溶結凝灰岩	片面使用
15	III検	検出面	検出-019	笄	8.2	7.4	3.7	256	完	溶結凝灰岩	片面使用
16	III検	検出面	検出-021	碁石	2.5	1.8	0.5	10	完	粘板岩	那智黒
17	IV検	検出面	検出-003	砥石	(12.1)	3.3	3.0	172	一部欠	凝灰岩	戸沢産か?
18	IV検	検出面	検出-003	砥石	10.5	4.5	0.9	78	一部欠	泥質凝灰岩	京都産か?
19	V検	検出面	検出-008	砥石	8.9	2.7	2.0	128	一部欠	砂質泥岩	一部被熱により黒変
20	V検	検出面	検出-009	砥石	(7.0)	3.0	2.2	92	一部残	凝灰岩	
21	V検	検出面	検出-006	温石か?	(5.2)	5.7	2.1	126	一部残	滑石	中心に穿孔あり

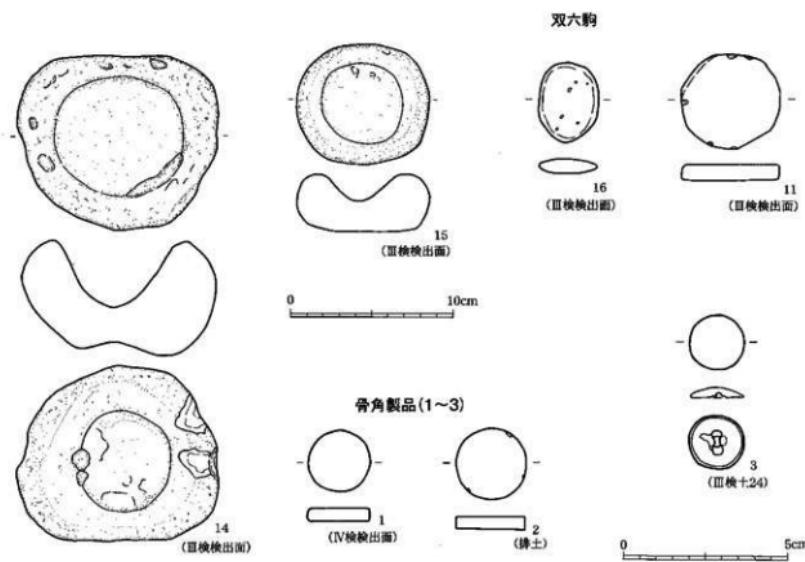
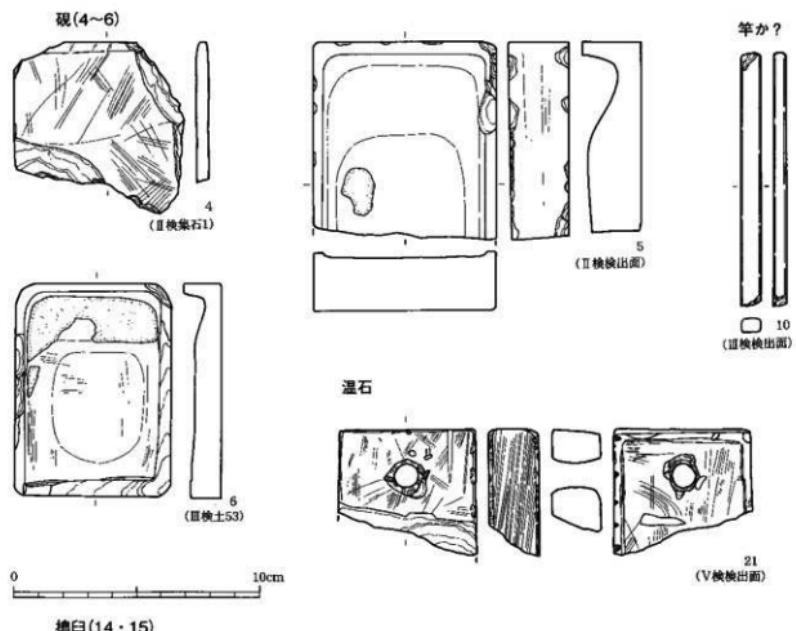
第5表 骨角製品一覧表

図No.	検出面	出土遺構	注記	種別	法量(cm)			重量(g)	残存度	石材	備考
					長さ	幅	厚さ				
1	IV検	検出面	検出-064	双六駒	1.9	1.9	0.4	2	完	鹿角	
2		鹿土		双六駒	2.2	2.2	0.4	4	完	角	
3	III検	土24	土24-001	ボタンか?	1.6		0.3		ほぼ完	鹿角	

砾石



第37図 石製品(1)



第38図 石製品(2)・骨角製品

#### 4 鉄製品

今回の調査では538点の鉄製品が出土した。内311点は鉄滓である為、製品の出土は227点となる。これら鉄製品のうち残存状態の良いものを中心に84点について図化掲載することとした。

検出面ごとにみるとI検・11点、II検・75点、III検・114点、IV検・13点、V検・6点とIII検が突出して多く出土しており、次いでII検が多くなっている。比べて鉄滓はII・III・V検でのみ出土しており、総数311点(9,194g)である。

なお、文中では図化提示したものを実○、拓本提示したものを拓○、図化できなかった資料をID○として区別させていただいた。

##### (1)鉄製品

先にも述べた通り、総数217点の鉄製品が出土している。器種をみるとまず目に付くのは銭貨であり、39%にあたる85点が出土している。中でも寛永通宝は総数61点出土しており、今回の出土銭の72%を占めている。寛永通宝はほぼ全て一文銭であり、1点のみ背に波形のある四文銭が出土している。また、寛永通宝の他に輸入銭の類も多く見られ、開元通寶(1点)・乾元重寶(1点)・宋通元寶(1点)・祥符元寶(1点)・祥符通寶(1点)・天聖元寶(1点)・皇宗通寶(2点)・元豐通寶(4点)・元祐通寶(2点)・紹聖元寶(2点)・聖宋元寶(1点)・政和通寶(1点)などが出土している。今回出土した銭貨のうち、最古銭は開元通寶の621年、最新銭は文久永寶の1863年である。また、少數ではあるが明治期の半銭通貨なども出土した。

銭貨に次いで多くみられたのは釘と煙管である。釘は62点出土しており鉄製品の28%を占めている。長さはまちまちであるがほとんどが角釘であり、頭巻釘もしくは切釘であったと思われる。煙管は20点(9%)出土している。総じて羅字煙管であり、雁首は13点、吸口は7点出土している。その他鎌、鉈、鍔、簪、杓子、風鈴、火打ち金具等の日用品や鑿、鎚等の大工道具が出土するなど、多種多様な金属製品がみられる。

##### 第I検出面

第I検出面からは銭貨4点、煙管2点、釘3点、風鈴1点、留め金具1点の計11点が出土した。銭貨の内2点は明治期の半銭であり、明治15年・明治8年の銘がみられる。残る2点は寛永通寶である。煙管は2点出土している。

##### 第II検出面

第II検出面からは75点の鉄製品が出土した。内訳は釘35点、銭貨11点、留め金具5点、鎌4点、刀身3点、鎌1点、楔・鑿1点、煙管1点、小柄2点、把手2点、ナイフ1点、鉈1点、鑿1点、火箸1点、不明5点である。釘は35点が出土している。やはりほとんどが角釘である。銭貨は11点出土した。多くは寛永通寶であるが文久永寶と半銭硬貨が1点づつ出土している。半銭硬貨は明治期のものであるが、検出面攢乱範囲中から出土しているため上層からの混入品と思われる。寛永通寶は総じて一文銭であったが拓5のみ背に文の字がみられた。

その他日用品として鎌、鉈、火箸、鍔、鎚、楔、留め金具などもみられた。鎌は計4点出土している。内2点は土18からの出土であり、様相も酷似しているため同一個体である可能性が高いように思われる。鉈はID78である。中心付近に穴を持つが、先端の幅が広くなっているため鉄を挟む金鉈である可能性が高い。

また、武具として刀身、小柄、ナイフが出土している。刀身は破片のみであるため全容は判断しがたいが、打刀の刀身であると思われる。小柄は2点出土している。実13は小柄の柄である。断面三角の筒状を呈しており、端部には丸い筒状の装飾が施されていたと考えられる。

##### 第III検出面

第III検出面からは114点の鉄製品が出土している。半数以上が銭貨であり、実に62点の銭貨が出土している。銭貨の中でも特に多いのはやはり寛永通寶であり、77%にあたる48点が出土している。寛永通寶はそ

の字体により大きく2分されるが、古寛永通寶は41点、新寛永通寶は6点みられた。中でも特に折13～19は土48からまとまって出土しており、7枚の錢貨が重なるようにみられた。土48は柱穴であるとみられるため埋納錢の類とは考えにくいので、まとめられた錢貨がそのまま埋没したものであろうと考えられる。寛永通寶以外に宋錢も多く出土しており乾元重寶、元豐通寶、皇宗通寶、紹聖元寶、祥符元寶、祥符通寶、聖宋元寶、政和通寶、宋通元寶、天聖元寶などが出土している。中でも拓50～57は全て土54からの出土であり、土48同様連なった状態で出土している。こちらは出土状態から備蓄錢である可能性も考えられる。

その他釘、煙管、鉄、鎌、火箸、火打ち金具、笄、小柄、匙なども出土している。中でも釘は最も多く、21点出土している。全て角釘と思われ、頭を潰した釘が多い。次いで多いのは煙管である。煙管は全て羅字煙管であり、雁首が8点、吸口が5点出土している。雁首は全てに補強帯がみられる。鎌は土2から出土している。長さ45cm、太さ2.5cm程の柄に刃部がつけられた状態で出土した。ID227はその一部であると思われる。実7はほぼ完形の火打ち金具である。両端が反り上がるような形状を呈しているため、ねじり鎌式の火打ち金具であると考えられる。実6は和鉢であると思われる。中央より割れてしまつてはいるが、ほぼ完形であり若干柄の長い和鉢であると考えられる。

#### 第IV検出面

第IV検出面では13点の鉄製品がみられた。点数も少ないためか器種も少なく、錢貨3点、煙管2点、釘2点、火箸1点、小柄1点、刀子1点、留め金具2点、鑿1点であった。錢貨は全て輸入錢で、元祐通寶2点と開元通寶1点である。煙管は双方とも吸口であった。

#### 第V検出面

第V検出面では元豈通寶、煙管、楔・鑿、鍤、鑿、火打ち金具の6点が出土している。実23は棒状の鉄製品である。断面角状の製品の先端が潰されて細くなっていた。恐らく楔か鑿であると思われるが詳細は定かではない。実8は完形の火打ち金具である。いわゆる山形の火打ち金具で把手部には木質物が付着していた。使用の便をよくするため把手部を木製にしていたのであると考えられる。

#### (2) 鉄滓

今回の調査では総数311点、総重量9,194 g の鉄滓が出土した。各検出面の出土量はII検4,586 g、III検229 g、V検5,308 g であり、II・V検に集中している事がわかる。以下それについて概要を述べたいと思う。

#### 第II検出面

4,586 g の鉄滓が出土した。各遺構の内訳は検出面:169.9 g、土18:2239.3 g、P25:504.2 g、P26:352.7 g、P27:390.8 g である。土18をはじめP25・26・27は調査区南西の隅に集中しており、付近には轍の羽口が出土している土17があるため、この付近の遺構一体として鍛冶関連遺構であると考えられる。

#### 第III検出面

229.7 g と少數ではあるが鉄滓がみられた。出土した遺構は土17・24に限られており、両遺構ともに調査区中央に集中しているため、付近を中心して鍛冶遺構が存在した可能性も考えられる。

#### 第V検出面

鉄滓の出土量が最も多く、4969.2 g の鉄滓がみられた。出土遺構は土6、トレンチ1・2の他は検出面で発見されており、検出面での出土量が4893 g と最も多い。検出面出土の鉄滓は全て調査区北側の流路内から出土している。トレンチ1・2も流路内に設定したトレンチであるため、調査区片側の流路からは4931.7 g の鉄滓が出土したこととなり、第V検出面出土鉄滓のほぼ全てが流路に集中していることが分かる。この流路は他に動物骨等も多量に出土しており、付近には焼土等の痕跡も見られなかったため、恐らく洪水等で流入し一括埋没したものであると考えられる。

第6表 出土鉄器一覧表

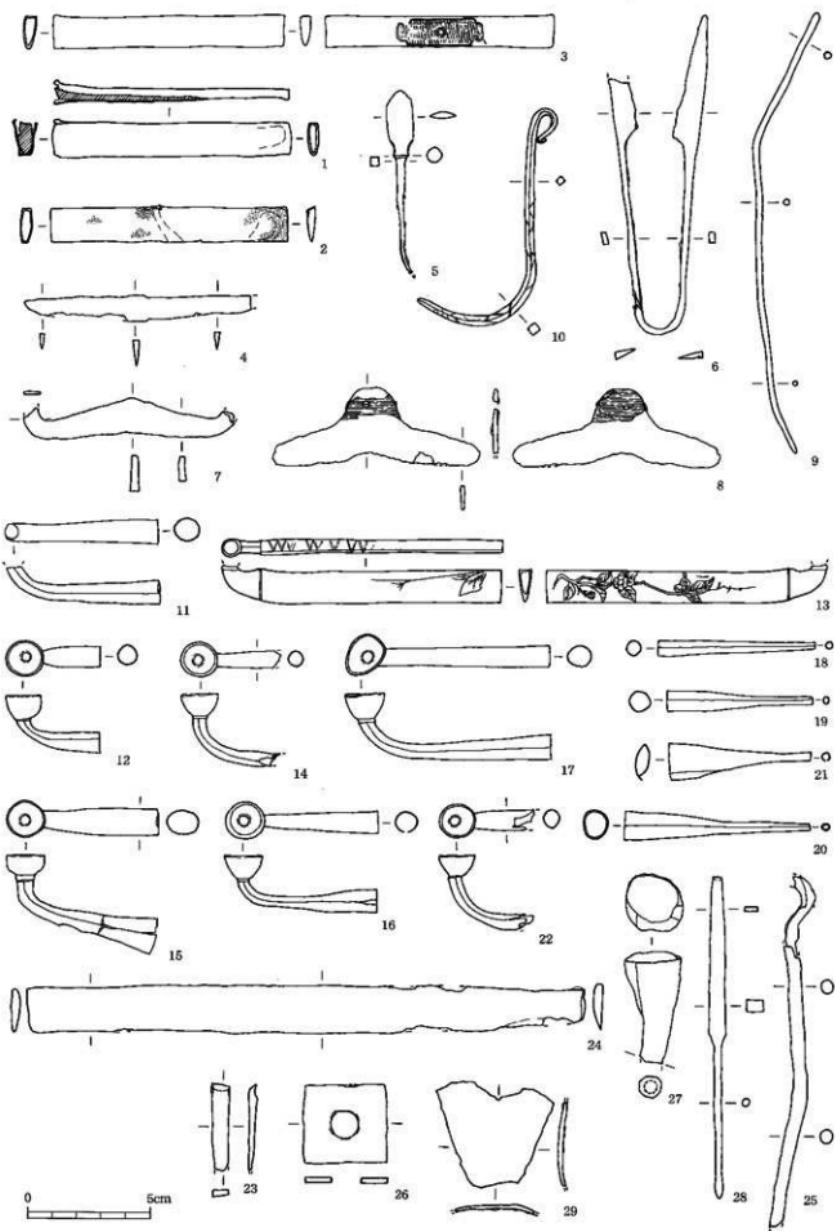
番号	ID	検出面	出土遺物	器種	法規				備考
					高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
実測 1	209	2	検出面	小柄	62.6	20.3	4.2	18.7	
実測 2	352	4	検出面	小柄	97.4	14.4	5.0	12.7	
実測 3	537	3	拂土	小柄	96.0	13.7	13.7	31.2	
実測 4	353	4	検出面	刀子	93.6	11.1	2.9	6.0	
実測 5	333	3	検出面	匙	76.9	12.6	6.2	6.2	鍔匙
実測 6	229	3	土2	はさみ	126.3	11.3	5.6	7.2	TT3 No. 04 R228
実測 6	230	3	土2	はさみ	112.2	10.0	6.2	7.3	TT3 No. 06 R228
実測 7	293	3	検出面	火打金具	86.2	16.1	4.9	12.7	No.14 ねじり錐式
実測 8	368	5	検出面	火打金具	85.5	28.4	12.9	12.4	No.10 把手部に木質物付着
実測 9	327	3	検出面	簪	172.5	3.0	2.8	8.8	
実測 10	233	3	土2	釣り金具	90.4	11.1	4.0	10.0	TT3
実測 11	5	1	検出面	煙管	61.8	11.0	10.1	5.6	雁首 V
実測 12	92	2	土20	キセル	39.4	21.0	15.2	5.8	雁首 III
実測 13	196	2	検出面	小柄	116.0	14.8	6.3	34.0	柄 端部に装飾があったと思われる
実測 14	231	3	土2	キセル	39.0	28.7	14.5	4.3	TT3 雁首
実測 15	249	3	土24	キセル	87.1	14.9	14.6	8.4	No.07 雁首 III
実測 16	253	3	土24	キセル	59.9	21.3	15.3	7.5	No.11 雁首 III
実測 17	319	3	検出面	キセル	85.0	23.3	16.7	11.9	雁首 III
実測 18	289	3	検出面	キセル	64.3	17.3	17.2	5.3	No.08 吸口 IV-V
実測 19	336	3	検出面	キセル	59.5	8.7	8.7	3.4	吸口 V
実測 20	348	4	検出面	キセル	76.7	11.9	10.8	5.4	吸口 IV-V
実測 21	349	4	検出面	キセル	58.4	15.0	7.4	2.9	吸口 IV-V
実測 22	525	5	トレンチ	キセル	42.4	30.0	14.3	4.3	雁首 III-IV
実測 23	398	5	検出面	櫛・櫛か?	35.9	8.3	3.7	4.4	
実測 24	197	2	検出面	刀身	230.0	20.5	7.5	83.7	
実測 25	351	4	検出面	火箸か	145.4	9.7	6.4	25.3	
実測 26	356	4	検出面	留め金具か?	35.9	33.1	3.1	15.4	
実測 27	357	4	検出面	鑓か?	47.0	27.4	25.0	63.0	
実測 28	381	5	検出面	鑓か?	133.5	6.9	5.5	14.9	No.20
実測 29	538		調査区外	不明	44.4	44.3	2.2	8.5	
拓本 1	1	1	1 検出面	寛永通寶	23.6	23.5	1.1	2.7	新 初鋲年1668年
拓本 2	191	2	2 検出面	寛永通寶	24.4	24.4	1.0	3.0	新 初鋲年1668年
拓本 3	192	2	2 検出面	寛永通寶	23.0	22.9	1.1	2.8	新 初鋲年1668年
拓本 4	193	2	2 検出面	文久通寶	27.6	25.7	1.1	3.0	初鋲年 1863年
拓本 5	195	2	2 検出面	寛口通寶	25.3	17.0	1.2	2.3	新(背:文) 1668年 下部1/3程打ちかかれている
拓本 6	234	3	土4	寛永通寶	24.7	24.7	1.6	4.1	古 初鋲年1626年
拓本 7	235	3	土4	寛永通寶	24.4	24.4	1.4	3.3	古 初鋲年1626年
拓本 8	236	3	土10	寛永通寶	25.1	25.0	1.1	2.9	新(背:文) 初鋲年1668年
拓本 9	240	3	上17	寛永通寶	24.7	24.4	1.3	3.5	古 初鋲年1626年
拓本 10	241	3	土17	寛永通寶	25.0	24.9	1.2	3.4	古 初鋲年1626年
拓本 11	254	3	土24	寛永通寶	24.2	24.2	1.1	3.2	No.12 古 初鋲年1626年
拓本 12	266	3	土45	寛永通寶	24.6	24.6	1.7	4.0	古 初鋲年1626年
拓本 13	267	3	土48	寛永通寶	24.2	24.1	1.1	3.2	No.03 古 初鋲年1626年
拓本 14	268	3	土48	寛永通寶	24.7	24.5	1.5	4.0	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 15	269	3	土48	寛永通寶	24.4	24.4	1.0	3.2	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 16	270	3	土48	寛永通寶	24.3	24.2	1.1	3.6	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 17	271	3	土48	寛永通寶	24.5	24.3	1.3	3.0	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 18	272	3	上48	寛永通寶	23.9	23.9	1.6	4.7	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 19	273	3	土48	寛永通寶	24.1	24.0	1.0	2.9	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 20	288	3	P19	寛永通寶	23.6	23.6	1.3	3.2	No.04 古 初鋲年1626年
拓本 21	283	3	P19	寛永通寶	24.5	24.4	1.3	3.6	No.01 古 初鋲年1626年
拓本 22	284	3	P19	寛永通寶	23.8	23.7	1.1	2.6	No.01 古 初鋲年1626年

測定番号	ID	測定部位	測定	法線				備考	
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	面積 (cm²)		
拓本	23	285	3 P19	寛永通寶	24.0	23.9	1.5	3.3	No. 02 古 初鋅年1626年
拓本	24	286	3 P19	寛永通寶	24.3	24.3	1.4	4.4	No. 03 古 初鋅年1626年
拓本	25	292	3 檢出面	寛永通寶	24.2	13.9	1.0	1.7	No. 12
拓本	26	295	3 檢出面	寛永通寶	24.5	24.4	1.2	2.8	No. 27 吉(背:文) 初鋅年1626年
拓本	27	296	3 檢出面	寛永通寶	24.0	24.0	1.0	1.9	No. 28 占 初鋅年1626年
拓本	28	297	3 檢出面	寛永通寶	25.0	25.0	0.9	2.8	No. 29 古 初鋅年1626年
拓本	29	298	3 檢出面	寛永通寶	25.0	25.0	0.9	2.8	
拓本	30	299	3 檢出面	寛永通寶	25.3	25.2	1.4	3.6	古(背:文) 初鋅年1626年
拓本	31	300	3 檢出面	寛永通寶	23.8	23.5	1.1	3.2	古 初鋅年1626年
拓本	32	301	3 檢出面	寛永通寶	23.9	23.8	1.3	3.1	古 初鋅年1626年
拓本	33	302	3 檢出面	寛永通寶	24.1	24.1	1.3	2.9	古 初鋅年1626年
拓本	34	303	3 檢出面	寛永通寶	24.5	24.5	1.3	3.6	古 初鋅年1626年
拓本	35	304	3 檢出面	寛永通寶	24.8	24.7	1.3	2.5	古 初鋅年1626年
拓本	36	305	3 檢出面	寛永通寶	25.0	24.9	1.1	3.3	古 初鋅年1626年
拓本	37	306	3 檢出面	寛永通寶	23.7	23.6	1.3	2.8	古(背:文) 初鋅年1626年
拓本	38	307	3 檢出面	寛永通寶	24.0	23.9	1.3	3.3	古 初鋅年1626年
拓本	39	308	3 檢出面	寛永通寶	22.9	22.9	1.0	2.9	新 初鋅年1668年
拓本	40	310	3 檢出面	寛永通寶	25.2	25.2	1.0	3.1	新 初鋅年1668年
拓本	41	312	3 檢出面	寛永通寶	24.1	23.9	1.6	3.8	古 初鋅年1626年
拓本	42	313	3 檢出面	寛永通寶	24.2	24.1	1.1	3.2	古 初鋅年1626年
拓本	43	315	3 檢出面	寛永通寶	24.6	24.5	1.2	3.9	古 初鋅年1626年
拓本	44	317	3 檢出面	寛永通寶	22.7	22.7	1.0	2.6	新 初鋅年1668年
拓本	45	318	3 檢出面	寛永通寶	23.9	23.9	1.1	3.3	古 初鋅年1626年
拓本	46	535	拂土	寛永通寶	24.0	24.0	1.2	3.9	古 初鋅年1626年
拓本	47	237	3 土11	皇宗通寶	24.3	24.3	1.5	3.5	No. 01 初鋅年1038年
拓本	48	243	3 土24	宋通元寶	23.6	23.6	1.0	2.3	No. 02 初鋅年960年
拓本	49	257	3 土24	皇宗通寶	24.4	24.4	1.1	2.9	No. 16 初鋅年1038年
拓本	50	274	3 土54	元豐通寶	23.8	23.5	1.2	3.3	No. 01 初鋅年1078年
拓本	51	275	3 土54	元豐通寶	23.6	23.5	1.1	2.8	No. 01 初鋅年1078年
拓本	52	276	3 土54	元豐通寶	23.8	23.8	1.2	3.0	No. 01 初鋅年1078年
拓本	53	277	3 土54	天聖元寶	23.0	22.7	1.0	2.4	No. 01 初鋅年1023年
拓本	54	278	3 土54	政和通寶	24.7	24.6	1.2	3.5	No. 01 初鋅年1111年
拓本	55	279	3 土54	元重寶	22.5	22.5	1.7	2.7	No. 01 初鋅年758年
拓本	56	280	3 土54	聖宋元宝	23.9	23.8	1.2	3.2	No. 01 初鋅年1101年
拓本	57	281	3 土54	祥符元宝	24.3	24.2	1.1	2.7	No. 01 初鋅年1099年
拓本	58	291	3 檢出面	紹聖元宝	23.2	23.0	1.0	2.4	No. 11 初鋅年1094年
拓本	59	309	3 檢出面	□聖元寶	23.6	23.0	1.0	1.7	天聖元寶か?
拓本	60	343	3 T9	祥符通寶	24.3	24.2	1.2	3.0	No. 02 初鋅年1009年
拓本	61	344	3 T11		24.4	24.3	1.2	2.6	No. 02 初鋅年1094年
拓本	62	345	4 檢出面	元祐通寶	24.7	24.6	1.1	3.0	初鋅年 1086年
拓本	63	346	4 檢出面	元祐通寶	23.6	23.4	1.1	2.9	初鋅年 1086年
拓本	64	397	5 檢出面	元豐通寶	23.8	23.8	1.1	2.6	初鋅年1078年
	2	1 檢出面		寛永通寶	21.4	21.3	1.3	2.0	古 初鋅年1626年
	3	1 檢出面		半錢	22.2	22.0	1.2	3.2	明治15年 1882年
	4	1 檢出面		半錢	22.0	21.8	1.2	3.0	明治80R18年 1875or1885年
	6	1 檢出面		鑼管か?	63.8	27.2	10.2	12.7	押曾雁吉のつぶれたものか?
	7	1 檢出面		風鈴	36.1	35.9	31.0	17.3	
	8	1 檢出面		留め金具	58.0	25.6	13.3	4.7	
	9	1 檢出面		釘	129.7	12.4	11.7	14.5	丸釘
	10	1 檢出面		釘	73.4	14.5	7.8	9.7	
	11	1 檢出面		釘	44.9	9.5	8.8	3.6	
	12	2 土1		寛永通寶	23.4	23.3	0.9	2.4	新 初鋅年1668年
	13	2 土1		寛永通寶	25.6	25.6	1.8	3.2	古 初鋅年1626年

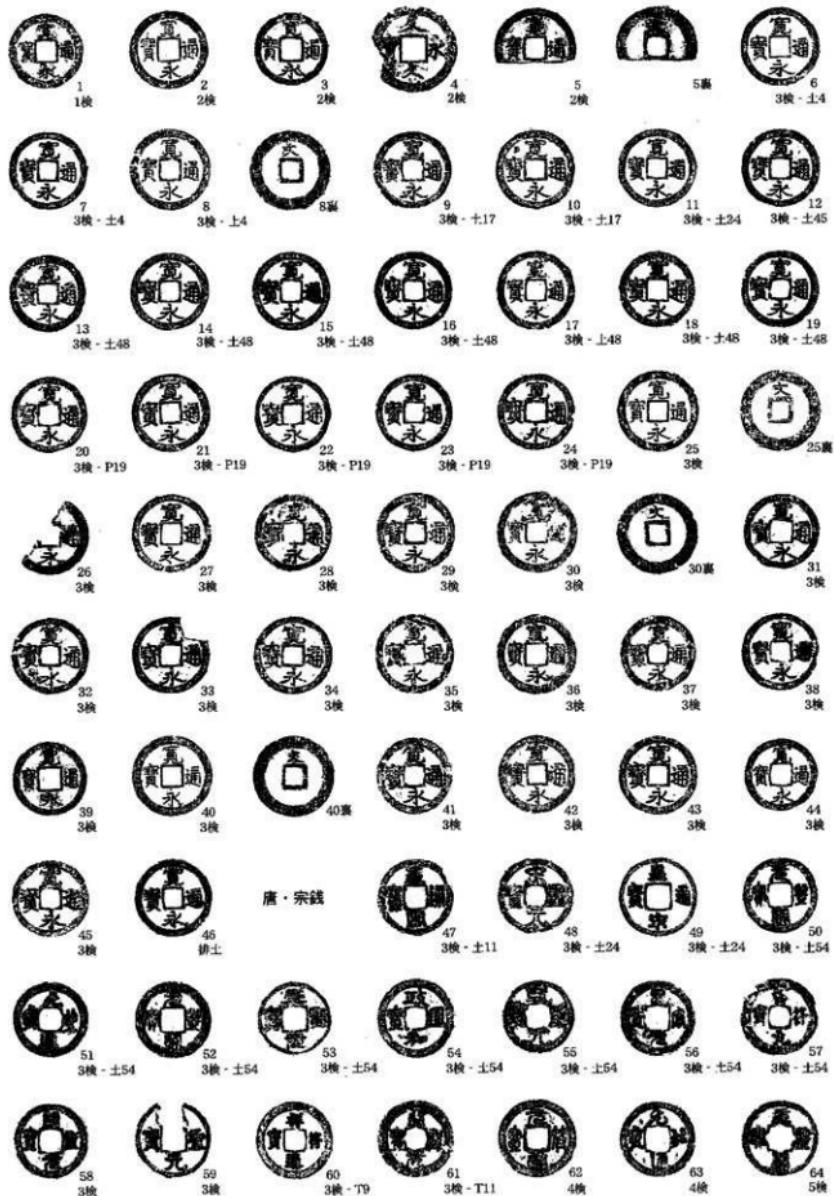
番号	ID	検出時	出土遺物	説明	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
	14	2土1	寛永通寶	23.9	23.7	1.9	3.2	新(背:文) 1738年	
	15	2土1	釘	52.3	6.0	3.5	3.8		
	16	2土1	釘	39.3	10.3	6.2	2.7		
	17	2上1	釘	42.0	9.6	6.2	1.6		
	18	2土1	釘	22.2	8.2	4.2	1.5		
	19	2土2	楔・鑿か?	73.9	19.8	6.9	23.0		
	20	2±5	釘	56.1	7.2	4.9	3.2		
	21	2上5	釘	29.8	8.6	3.5	1.0		
	22	2土7	釘	30.5	9.4	8.8	3.0		
	23	2土7	釘	36.4	5.9	5.0	0.8		
	24	2土18	留め金具	152.6	40.7	30.0	200.0	No.01 木質物の留め具	
	40	2土18	鉗か?	164.5	65.8	6.2	250.7	No.07	
	41	2上18	小柄	75.5	16.4	4.5	9.9	万能か?	
	42	2土18	釘	79.1	11.5	10.6	24.6		
	75	2土18	不明	165.0	36.8	35.6	374.7	棒状	
	76	2土18	不明	109.5	55.9	37.2	242.1	棒状	
	77	2±18	留め金具	92.1	36.7	16.7	93.6	留め金具か?	
	78	2上18	鉗か?	116.5	21.7	12.2	72.1		
	79	2土18	留め金具	61.6	37.7	10.8	45.7	留め金具の穴あり	
	80	2土18	鍔か?	49.1	27.3	8.6	38.5		
	81	2±18	鍔か?	62.4	24.4	5.1	19.0		
	82	2±18	釘	51.7	8.5	7.0	9.3		
	93	2ピット24	釘	36.6	3.9	3.3	0.7	紙	
	94	2ピット24	釘	22.9	7.2	5.6	0.8	紙	
	95	2P25	釘	83.8	8.8	8.0	7.3		
	96	2P25	釘	81.1	9.4	6.5	9.4		
	97	2P25	釘	49.5	6.3	4.9	2.2		
	101	2P26	釘	46.7	9.2	9.1	4.9		
	174	2P28	不明	58.1	28.7	22.0	26.4	No.01 金具	
	175	2集石3	留め金具	84.6	25.0	13.3	105.0		
	176	2集石3	留め金具	84.7	20.4	4.5	24.3		
	177	2集石3	釘	56.9	5.9	5.7	4.0		
	178	2集右3	釘	54.0	4.0	3.9	2.2		
	179	2集石3	不明	19.4	18.9	6.5	13.5	四角い塊	
	180	2集右3	釘	20.0	10.1	9.9	2.8		
	181	2検出面	ナイフ	114.8	31.0	8.4	88.3	E15,S3 肥後の守か?	
	182	2検出面	釘	51.2	4.4	3.4	1.4	紙 東西部 黒色土層	
	183	2検出面	釘	36.6	7.1	3.7	1.3	紙 東西部 深色土層	
	184	2検出面	釘	44.9	9.0	8.1	13.0	南西隅	
	185	2検出面	釘	38.8	5.7	5.5	3.9	南西隅	
	186	2検出面	釘	33.1	3.3	3.1	1.0	南西隅	
	188	2検出面	不明	8.2	5.4	5.1	0.2		
	189	2検出面	半錢	27.8	27.8	1.4	6.6	明治16年 1883年	
	190	2検出面	寛永通寶	22.5	22.5	1.3	2.3	古 初鋳年1626年	
	194	2検出面	(寛永通寶)	27.0	19.0	1.7	1.5	新(背:波11) 初鋳年1769年	
	198	2検出面	鑿か?	117.0	10.5	5.0	20.3		
	199	2検出面	釘	50.9	9.2	5.8	4.2		
	200	2検出面	釘	49.0	6.7	4.3	2.6		
	201	2検出面	釘	46.2	6.6	5.1	3.9		
	202	2検出面	把手か?	29.5	27.7	4.0	5.1		
	203	2検出面	釘	26.1	7.8	6.1	2.1		
	204	2検出面	釘	27.7	6.2	6.2	1.2		
	205	2検出面	釘	18.7	8.3	5.3	1.5		

番号	ID	表面	出土遺物	器種	法規				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
206	2	検出面		釘	14.4	5.4	5.2	0.8	
207	2	検出面		火箸か?	143.2	6.8	6.8	24.6	
208	2	検出面		把手か?	109.8	7.9	7.4	22.8	
210	2	検出面		刃身	27.7	24.5	6.1	16.1	
211	2	検出面		鍔	43.9	8.2	7.4	9.8	
212	2	検出面		釘	38.1	7.9	8.3	5.4	
213	2	検出面		釘	57.8	7.3	4.0	2.7	
214	2	検出面		釘	32.9	7.8	5.3	1.5	
215	2	検出面		釘	100.1	6.0	5.9	11.5	
216	2	検出面		鎌	68.6	49.9	4.6	29.0	
217	2	検出面		鎌	47.3	43.9	4.3	14.2	
225	2	石列1,2		寛永通寶	24.5	24.4	1.3	3.4	TT1 新 1668年
226	3	構状遺構		寛永通寶	24.0	23.8	1.1	2.4	TT3 古 1626年
227	3	上2		鎌	143.2	52.6	3.8	30.6	TT1 No. 05
228	3	土2		釘	84.6	12.0	4.3	7.3	TT3 No. 02
232	3	土2		寛永通寶	24.1	23.9	1.7	3.4	TT3 古 1626年
238	3	土17		釘	44.4	5.2	3.2	1.5	No. 07
242	3	土19		釘	21.1	4.8	4.4	0.7	
244	3	上24		釘	109.5	11.2	10.8	14.6	No. 04
245	3	土24		火箸か?	161.0	8.2	7.2	20.8	No. 05
246	3	土24		火箸か?	97.8	9.1	8.1	15.5	No. 05
247	3	土24		火箸か?	56.3	12.2	8.3	8.8	No. 05
248	3	土24		刀子か?	30.3	14.2	6.8	4.6	
250	3	土24		刀子か?	48.4	17.1	5.7	7.1	
251	3	土24		キセル	35.5	12.0	11.3	2.1	No. 10 麦首か?
252	3	土24		キセル	28.4	7.5	6.6	1.5	No. 10 麦首
255	3	土24		寛永通寶	23.9	23.8	1.1	3.6	No. 13 古 初鋲年1626年
256	3	土24		キセル	42.8	11.2	11.0	3.9	No. 14 吸口 IV
258	3	土24		釘か?	63.8	4.0	3.8	3.0	
259	3	土24		釘	29.8	15.6	6.0	3.7	
261	3	上27		釘	70.3	18.0	10.0	8.8	TT No. 01
262	3	土34		寛永通寶	23.3	23.3	0.8	1.9	新 初鋲年1668年
263	3	土37		キセル	57.5	9.2	8.5	2.0	吸口 IV
264	3	土41		キセル	57.0	10.2	9.6	2.7	吸口 IV
265	3	土43		釘か?	40.4	6.7	5.8	1.1	
282	3	土64		釘	96.3	21.4	7.8	12.4	
287	3	P19		寛永通寶	23.9	23.9	1.2	3.4	No. 04 古 初鋲年1626年
290	3	検出面		小柄	98.0	16.5	10.0	26.6	No. 10
294	3	検出面		寛永通寶	25.3	25.3	1.1	3.2	No. 18 新(背:文) 1668年
311	3	検出面		寛永通寶	24.7	24.6	1.1	3.3	古 初鋲年1626年
314	3	検出面		寛永通寶	23.3	23.3	1.3	3.0	古 初鋲年1626年
316	3	検出面		寛永通寶	23.8	23.7	1.5	3.2	古 初鋲年1626年
320	3	検出面		釘	87.3	15.9	6.4	9.9	
321	3	検出面		釘	49.0	19.5	6.8	6.0	
322	3	検出面		釘	43.8	6.9	6.1	2.8	
323	3	検出面		釘	22.7	4.7	4.6	1.1	
324	3	検出面		刀子か?	55.8	17.0	5.7	11.0	
325	3	検出面		釘	46.4	5.8	3.9	1.5	
326	3	検出面		釘	27.0	6.8	6.8	2.6	
328	3	検出面		鎌か?	43.0	34.7	4.3	10.8	
329	3	検出面		小柄	41.8	20.8	8.0	8.8	
330	3	検出面		釘	49.0	17.0	10.2	5.0	
331	3	検出面		釘	40.4	4.5	2.9	0.8	

番号	印	検出面	出土遺構	測定	寸法				備考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
332	3	検出面		釘	64.3	5.7	4.2	5.2	
334	3	検出面		不明	39.9	13.9	6.4	4.3	
335	3	検出面		釘	25.4	4.5	4.4	1.0	
337	3	検出面		キセル	79.2	11.4	6.1	5.2	雁首
340	3	T11		キセル	17.8	17.8	10.3	3.1	雁首 III
341	3	T3		釘	79.4	5.0	3.5	4.1	
342	3	T8		釘	59.1	9.5	4.7	9.4	
347	4	検出面		開元通寶	23.1	23.1	1.2	1.9	初鋤年 621年
350	4	検出面		釘か?	41.1	9.6	9.4	9.7	
354	4	検出面		釘	45.0	5.0	4.0	1.4	
355	4	検出面		留め金具か?	52.2	34.9	3.2	15.4	
526	5	トレンチ		鑿か?	88.7	13.2	3.8	10.4	
531	東部	トレンチ		寛永通寶	24.5	24.5	0.9	2.4	新 初鋤年1668年
532	東部	トレンチ		リング状	18.8	18.8	2.0	1.2	
533	東部	トレンチ		キセル	16.2	15.8	8.9	2.3	雁首
534	東部	トレンチ		釘	84.3	13.0	6.4	13.7	
536	排土			錢	22.2	22.2	0.8	2.2	文様不明 銀錢



第39図 金属製品(1)



第40図 鉄製品(2)

0 2cm

## 5 自然遺物・骨類

今回の調査では5点の植物類、22点の自然遺物、23点の骨類が出土している。各検出面を通じて出土しているが、自然遺物は第II・III検出面、骨類は第III・V検出面に集中して見られた。

### 植物類

植物類は第III検出面から出土している。5点の内2点がクルミ、2点が桃の種、1点が炭化したコナラであった。恐らくクルミ・桃等は食用にされたものであろう。

### 自然遺物

第II検出面では3点出土している。内2つはハマグリであり、残る1つはアワビであった。いずれも破片である。第III検出面では19点の貝が出土した。その内訳はハマグリ7点、アサリ5点、ホタテ4点、アワビ1点、サザエ1点である。ハマグリ、アサリ、ホタテなどは二枚貝であるが全て左右の殻が外れた状態で出土しているため、片殻のみで1点と数えた。これらの貝は総じて食用に好まれる物であるため、食されて捨てられたものである可能性が高いが、土47出土のホタテには穿孔らしき痕がみられた。ホタテは貝杓子として用いられることがあるため、このホタテも貝杓子として使用された可能性が考えられる。

### 骨類

骨類は全て動物の骨であった。ほとんどは破片での出土となるため種の判別は困難であったが、出土した23点のうち14点のみ種が同定できた。種としてはウマ、イノシシ、シカなどが主であったが、ただ1点イヌの上顎骨がみられた。また、シカの角が4点みられたが、内1点には基部に切痕が、他の1点には基部に擦痕がみられた。これらは何らかの目的で加工、使用されたものと思われる。

また、特筆すべきは第V検出面出土の骨類である。第V検出面出土の骨類はほぼ全てが北側の流路から出土している。これらの骨もほぼ全て破片での出土であるが、その破断面は鋭利であり一部化石化しているものがみられるため、この場で捨てられたものではなく別の場所から流されてきた後埋まったものであると考えることができる。

## 5 調査のまとめ

松本城を中心として広がる松本城下町。その北東部に親町の一つとして東町が存在する。今回の調査地はその東町の北部に位置している。調査地近辺の様子は幾つかの絵図資料に記載がみられ、おおよその変遷は推察することができる。それに拠れば調査地近辺は商人地であり、調査範囲には中央に靴屋、時期によっては北側に塗師屋、南に船屋や個人宅があったと記されている。このことを踏まえて調査結果をみると、まず注目すべきは第III検出面にみられた石組み遺構であろう。径2m40cmの円形とおよそ2mの方形が組み合わされた形状の石組みは深さ1m40cmあり、円形部分には火を焚いていた痕跡が明瞭に残っていた。この石組みはその形状や類例から靴窓であると推察できる。第II検出面は出土した遺物などから17c中葉～18c前葉に帰属すると考えられるが、絵図資料において調査地で靴屋の記載が確認できるのが元禄10（1697）年から享保9（1724）年であるため、この靴窓の時期は絵図資料に靴屋の記載がみられる時期とほぼ一致する。まさに絵図資料と符合する調査結果となった。なお、この靴窓は廃絶後石を崩して粘土で埋められていた。この粘土は調査区北東部に広くみられたため、第II検出面を整地する際に広く粘土で覆いながら封じたものと思われる。

さて、調査地が靴屋を中心に3軒にまたがっていたことは先に述べた通りであるが、その町割はどのように変遷したのであろうか。年代順に変遷を追ってみたいと思う。まず、第V検出面では調査区北端に東西方向に流れる自然流路が確認できた。そしてそれに直交する形で幅約1m、深さ55cm程の台形状の溝が南北方向に伸びていた。溝には流水の痕跡が認められず、溝を境に西側に柱穴が多数みられるためこの溝は区画溝である可能性が高い。城下町絵図をみると東町は東西に長い短冊形の町割となっているため、仮にこの溝が区画溝であるとするならば城下町絵図にみられる町割とは方向や位置が異なる。第V検出面は出土遺物から16c末～17c前半であると考えられるが、松本城下町は天正13年（1582）年に小笠原貞慶が大普請を行ない親町3町もこの際に町割されたといわれているため、第V検出面は松本城下町成立以前の区割りである可能性が考えられる。

続く第III検出面では東西方向の間知石列が調査区北部で検出されており、調査区南部には同じく東西方向に段差が生じていた。この段差は恐らく整地の際に生じたものであると思われるため、この段差付近に屋敷境が存在していた可能性が考えられる。第II検出面の段階になると屋敷境を示す間知石列はより明確に把握することができ、調査区北部・南部に計3本の間知石列が確認できた。この結果、調査区は3軒の屋敷にまたがっていることが分かる。第II検出面は18c中葉～後葉と考えられるが、この頃の絵図には屋号や業種が記載されていない。調査の中では南部に鍛冶炉がみられ、中央部でも轍の羽口が数点出土しているので中央部南部共に鍛冶屋となっていた可能性も考えられるであろう。

このように第II・III検出面の段階では城下町絵図にみられる東西に長い短冊形の町割に沿った方向で屋敷境が設けられている。そのため、第V検出面段階（16c末～17c前）では南北方向に区分されていた町割が第III検出面段階（17c中～18c前）では東西方向に変遷していることがわかる。このような変遷は松本城下町の変遷に伴うものであり、城下町の成立や文化を考察する上で貴重な資料となり得るであろうと思われる。



## 写真図版

I 檢全景  
上が西



II 檢全景南部  
上が西



II 檢全景北部  
上が西

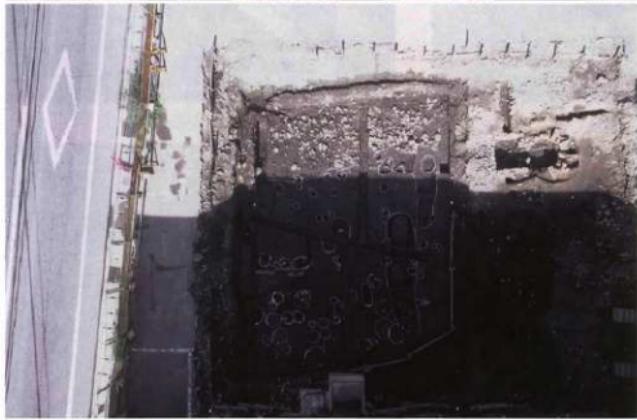




III検全景  
上が北



III検土2  
竈竈と思われる



V検全景

II 檢土1



乗燐

II 檢土1



II 檢南西部



出土状況

II 檢土18 蓋 内側にベンガラが付着している



II 檢P25



木材出土状況

II 檢P32



柱材が残っている

II 檢集石2



II 檢石列3



II検 開知石列1・2

中央部



II検検出面

灯明受け皿



III検土24



III検土53

硯



II検 開知石列3



III検土7



III検土27

桶出土状況



III検土48

錢貨が重なっている



III検土62



III検土64



内耳鍋

III検P24・25・26・27

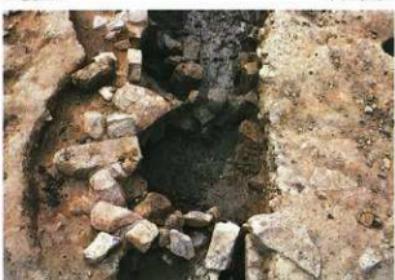


III検土5



半割状況 石組が見える

III検土2



半割状況

III検土2



東部円形部土層断面

III検西部



方形部土層断面

III検土2



南から

III検土2



底面に炭の層が見える

III検土2



中央が溝状になっている

III検土2



方形部クイ

III検土2



板類

III検土2



漳州窯産皿

III検土2 トレンチ2

鉄釉碗



III検土2



木製品

III検間知石列



V検土5



V検土13



V検土20



遺物出土状況

V検溝1



V検検出面



内耳鏡

V検トレンチ



漆桿

作業風景



現説風景







35



119



154



160



159



170



169



173



176



180





310



326



327



328



345



354 • 555



363



358



336



367



木42上面



木46



木42左侧面



木8



木36



金5



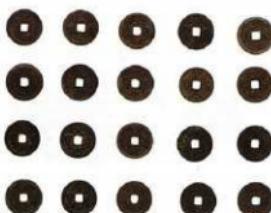
金7・8



金10



キセル(吸口)



寛永通宝



宋錢



キセル



小柄



拓5

長野県松本市 松本城下町跡東町 第3次 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもし まつもじょうかまちあとひがしまち だい3じ はくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城下町跡東町 第3次 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.185							
編著者名	竹内 靖長、櫻井 了、小山貴広							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市大手3-8-13 (5F) TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2006(平成18)年3月24日 (平成17年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
まつもじょうかまちあと 松本城下町跡 ひがしまち 東町	ながのけんまつもし 長野県松本市 じょうこうまちあと 城東2丁目3番	20202	157	36° 14' 24"	137° 58' 31"	2004.05.17 ～ 2004.11.16	I～V検 計570m <sup>2</sup>	東部地区コミュニティ防災広場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松本城下町跡 東町	屋敷跡(町屋)	戦国 江戸	土坑 ピット 溝 溝状遺構 集石 石列 問知石列	118 141 2 3 3 5 4	土器・陶磁器、土器品、 木製品、石製品、 骨角器、金属器、自然 遺物	松本城下町跡 東町の3度目の 調査である。第 III検出面では難 釜と思われる石 組みが出土した。		

---

松本市文化財調査報告 No.185

長野県松本市

**松本城下町跡東町**

-第3次 発掘調査報告書-

発行日 平成18年3月24日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873 長野県松本市大手3-8-13 (5F)

印刷 株式会社 精美堂印刷

---

